
CROSS ROAD【ディール急襲】 第一部

かりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CROSS ROAD【デイル急襲】 第一部

【Nコード】

N6569V

【作者名】

かりん

【あらすじ】

発端はデイル領家による商都急襲の報だった。強気で姑息でちよつぱり我がまま——そんな庶民な奥方様が行く手をはばむ災難・皺よせなんのその、凜然果敢に立ちむかい奮闘しちゃう物語。

オリジナル・ファンタジーサイト【極楽鳥の夢】からの転載です。

プロローグ

ところはカレリア王国クレスト領家。国土北方を領有する、かの領家の閨ねやである。

ここに、若き当主ダドリー・クレストに見そめられ、華やかなりし商都から大陸最北端ノースカレリアの片田舎まで、はるばる嫁いだ奥方様がいた。その名もエレーン・スレーター。公家筆頭ラトキエ領家にてメイドを務めた御仁である。すったもんだの騒動の末、領家の嫁にめでたく収まったこの彼女、幸せいっぱい大手を振って、いそいそ嫁いだまでは良かったが――。

ところが、着いた早々、由々しき事態が持ちあがる。それは、
「子供がいる!？」

エレーンはあるぐり絶句した。

「――ああ。男の子が一人、な」

新婚のベッドの隣には、ごろりと寝転がった新郎ダドリー。そして、無駄に頼つぺた搔きつつも、コソツとさりげなく目をそらす。

エレーンは二の句がつけずに氷結した。なにせ婚家は人もうらやむクレスト領家。（投げ売り間際で）玉の輿にのり、るるるん嫁いできたところ。前途洋々、将来有望、期待値うなぎのぼりのピンクの夢は、るるるん甘ったるい蜜月生活。二人の前に置かれているのは、夫婦仲良く手に手を取りあい、描き上げていくべき真っ白なキヤンバス――

のはずだった。

そう、この結婚は堅実な布石のはずだった。十全磐石な永久就職のはずだった。輝かしい未来に向けての記念すべき第一歩を、今まさに踏み出したばかりなのだ。なのに――ああ、なのにそれなのに、彼には既に、

”子供がいる” だあ？

利き手の拳を不穏に震わせ、エレーンは隣の詐欺師をねめつける。

これはまさに青天のへきれき。華やかなりし華燭の典、その興奮も冷めやらぬ、えへらへらとくねった背中に冷や水ぶっかけられたも同然である。

そうとも。寝耳に水ってやつである。驚天動地の事態である。聞いてない！　ってヤツである。なんといつても、きっちりかつちり新婚そのものなんである。

さあて、みな様、お立ちあい。

ご用とお急ぎでない方は、どうぞ見てっておくんなまし。メイドあがりのこの彼女、万難排して、幸せをつかむことができるのか。

強気で姑息でちよっぴり我がまま、そんな庶民な奥方様が、災難・しわ寄せなんのその、凜然果敢に立ち向かい、奮闘しちゃう物語。

序章

「……でも、どんな女だ？」

やはり、エレーンは気になった。よって、世話係の執事を締めあげ、妾宅の所在地を白状させた。昨夜勃発した修羅場の後の、その後の断絶は言うに及ばず、ダドリーは往生際悪くぶちぶち言い訳を積みあげていたが、つまるところ、こういう話だ。

かの妾はダドリー十七の弱年のみぎりに、両家の縁付けのために押し付けられたものであり、互いに愛情があるわけではない。なにぶん大昔の出来事なので、かかる妾子の存在は今やあまりに当然であり「うっかり申告し忘れた」のだと。だが、そんな「うっかり」が平気でまかり通るほど、この世の中は甘くはないのだ。

当然のごとくに不実をなじれば、しかし、あのダドリーは、「バカバカ言うなよ。あのな、知ってるか？ バカって言うヤツが本当は一番——」

この期に及んで、なんたる減らず口。無論すぐさま撃沈したともだが、呆れ果てたお気楽男には、負い目などはない様子。ついには口を滑らせて、妾自慢まで披露する始末だ。これで往なされる女バカはいない。とはいえ——

所在なさにこそソコソコしているダドリーを、白けた白眼視で冷ややかに見つつも、エレーンはぶつくさ考えた。どれほど気さくに見えるようが、彼は歴とした領家の当主。今やカレリア三大公家の一翼を担うクレスト領家の主なのだ。由緒ある血統を絶やさぬ為に妾を置くというのもよくある話。そう、彼はそんじょそらの市民ではない。それを承知で、こんな遠い片田舎まで遙々嫁いできたのではなかったか。

ならば、どうにも嫌ではあるが、妾の存在もやむなしか。というより、いつまで拗ねて腐ったところで、どうにかなるような代物でもないのだ。現に妾と子供がいるのなら、どんなに怒って詰め寄っ

たところで、今更消えてなくなりはない。

自分を無理やり納得させて、ようやく不満を飲み込んだ。更には、ダドリーが翌朝、あまりに哀れっぽくおどしたりするものだから、そして、あまりに熱く愛を囁くものだから、うっかりほだされ、丸め込まれそうにもなったが、次の思わぬ一言で、エレーンの心は凍りついた。ダドリーはこう言ったのだ。

「俺はもう、子供は要らない」

事もあろうに、幸せな家庭を夢見ていた、嫁いだばかりの妻に向かって。

「そりゃあ俺だって、あんたの子の方がいいに決まってるさ。でも、仕方がないだろ。現に俺には、もう後継ぎがいるんだから」

ぬけぬけと言い、ああ、とようやく合点したように顔をあげた。

「心配しなくても、子供がいなくなつて、ないがしろにはしないよ。俺にはあんたが一番大事だ。責任を持って、生涯俺が面倒をみる。だから、そんなに怒らなくても」

罵倒の言葉を山ほど吐き捨て、エレーンは居間を飛び出した。

「——なによ。妾は置かないって言つたくせに」

避暑地に適した北カリリアの気候の中、緑梢ゆれる閑静な庭の裏道を進み、生垣の緑に目隠しされた鉄柵の陰に身を潜める。件の妾宅に敵情視察にやってきたのだ。

夏の陽揺れる青芝の上で、ダドリーは空に、子供を高く抱き上げていた。

「——お？ 大きくなったな、クリード。お母さんの言うこと聞いて、ちゃんと良い子にしていたか？」

曇りのない笑顔だ。ダドの奴！

「はい！ お父さま！」

はきはき元気に良いお返事。見るからに小生意気そうなガキだ。年の頃は五歳というところだろうか。腕白そうな男の子。隣には、線の細い優しい女が一人——あれがお気に入り、サビーネちゃ

ん、ね。

それは清楚な女だった。まだ、あどけなささえ残る顔立ちは、子持ちのそれにはとても見えない。年は確か、ダドリーより一つ下の二十二才、だったか。腰まで伸ばした黒い直毛、大きな瞳、広い額。優美で繊細そうな面差し。肌の色が白いせい、か、病弱そう、で、大人しそうだ。エレーンは腕組みで品定めした。

（ふーん、深窓のご令嬢ってわけね。今までにない人種だわ……）
つまり、アレに勝っての？

虚しい溜息で頬を掻いた。神様は意地悪だ。何の因果でそんな試練を。ともあれ、ああいう弱々しいタイプは初めてだ。ご令嬢の友達もいるにはいるが、彼女はおしとやかな奥ゆかしさとは程遠い。

穏やかな日ざしの青芝の上、親子三人の笑顔が揺れる。親子団らんの予期せぬ光景。戯れる彼らは幸せそう。ダドリーのことはよく知っているはずだった。なのに今は、見知らぬ他人を見るようだ。黒い鉄柵を両手でつかんで、エレーンは身じろぎもせず凝視していた。ダドリーをここで見つけたら、怒鳴り込んでやろうと思っていた。耳たび引っつかんで引きずり出してやろうと思っていた。なのに、いざ、それを目の当たりにすれば、足が一步も動かない。彼らの姿はまぶしくて、近づくことさえできなかった。彼らの笑顔が、光の庭が、いやに遠く輝いて見える。目を背けたいのに、背けられない。

「――強引に引っ張ってきたくせに」

見つめる瞳に涙があふれた。こんなに遠くまで引っ張ってきたとい、て、手を放すつもりなの？ あんたがこんな所まで連れてきたのよ？
伸ばしたこの手が届かない。

あのダドリーに届かない。こんなに近くにいるというのに、ダドリーはまるで気づかない。ここに自分がいることに。彼の優しいまなざしは、天に高く抱きあげた我が子の笑顔に向けられている。そして、若く美しい母親に。当然だろう。彼らは”家族”なのだから。
「……こっち向いてよ、ダドリー」

黒い鉄柵が、手に冷たい。

「あたしを見てよ、ダドリー」

指の先が震えだす。

「今更ひとりで見捨てられたら、あたし一体、どうしたらいいの？」
エレーンは泣きじやくつていた。他に何ができただろう。すぎる
想いで見つめる他に。緑陰にたたずむ自分と異なる、日ざしのただ
中で戯れる彼らを。

屈託なく、子供が笑う。母親が笑う。ダドリーが笑う。

「……なんで、あんたが”そっち側”にいるのよ」

自分の横にいるべき彼が、何故、向こうにいるのだろう。向こう
に与くみしているのだろう。青芝の庭は、平和な光に満ちている。安ら
ぎに満ちた穏やかな空間。明るく温かな世界から、自分一人が締め
だされてしまったようだ。

——あたしは輪の中に入れない。

ダドリーは「子供は要らない」と言ったのだから。自分の子供は
「要らない」と。ならば、あの幸せの光景は、この自分の未来とは
生涯無縁のものなのだ。

居たたまれない思いで踵を返し、エレーンは肩を落として逃げ戻
った。”他人”をやんわり排除する、明るく平和な空間から。

手にしたグラスを一気におおり、とん、とそれを卓に戻した。琥
珀の酒精が芳香を放ち、グラスの中でゆったり揺れる。

豪華で退屈な屋敷の中で、エレーンは酒をあおっていた。苛立ち
の種は無論のこと、先日、目に焼きついた家族団らんのあの光景、
妾宅で目撃した幸せの構図だ。

酔いで痺れた額を揉みつつ、エレーンは無機質な液体に目を据え
る。そこに何らかの意味を読みとろうとでもいうように。

気怠い仕草で黒瓶に手をかけ、奪うようにして引ったくった。半
分に減った黒瓶を、空いたグラスに手酌で注ぎ足す。だが、この時

ばかりは、普段ならば大好きな酒も不快を軽減する一助にもならなかった。疼くような胸の痛みを麻痺させてくれるところか、むしろ感情の振れ幅が大きくなって手に負えなくなってくる。

そう、分かっているのだ。ダドリーは一介の庶民ではない。今や押しも押されもせぬ三大公家のご当主様。それはちゃあんと分かっている。だから、妾を囲うこともあるのだと泣く泣く諦めたはずだった。けれど――。

エレーンは深く溜息をついた。やはり、あれ以来、喧嘩が絶えない。彼のことなすこと気に障り、ますます険悪になっていく。そうなればテキも面白くはないらしく、不貞腐って出て行っただきり、新婚の居室に戻らない。近頃では寝室さえも別々になったという悪循環――もっとも、それは、己が閉め出したのが発端なのだが。

ああ、きつと今は、妾の所にでも転がり込んで、女々しく愚痴っているのだろ。なにせ、あそこには子供がいる。ダドリーはあ見えて子煩悩のようだから――。けれど、彼にとっては我が子でも、こっちにとっては赤の他人だ。

「……なんで、あたしが、こんな目に遭わなくちゃなんないのよ」
酔いで気怠い額をつかんで、もう何度目になるか分からぬ溜息をついた。幸せな家庭を築く夢、早くもそれが打ち砕かれてしまっていた。しかも、ささいな浮気どころか、公の妾子であると、敵は平気な顔で居直っているのだ。不慣れな領邸の面々もツンケンしていて嫌な感じだ。メイドあがりと侮っているのが、ありあり分かる。

ああ、まったく面白くない！ 故郷の商都にいつそ帰ってやろうかしら！

事情を執事から聞き及び、エレーンはダドリーの執務室へと駆けつけた。ラトキエ領家が使わした使者に、ダドリーが門前払いを食らわせたというのだ。

カレリア国には、三つの公家がある。ラトキエ、ディール、クレ

ストの各領家だ。もつとも、その実体は小国の集合体と変わりなく、国王サディアスの統治の下、遠く離れた各領家がおのの独立採算で自活自立し、緩く連携しているというのが実情だ。三領家は調和と協調を以て結束し、初代国王が即位してこの方、ラトキエの治領・商都カレリアを中心とする平和な国家運営に尽力してきた。国土を荒らす戦がない為、国は栄え、民の暮し向きは安定して豊かだ。

その三領家の宗主ラトキエ領家が、今、前代未聞の危機的状況に直面していた。首都である商都カレリアを、事もあるうにディールの軍に急襲・包囲されたのだ。この未曾有の暴挙の報は、エレーンが嫁いだ遠い北方にまで届いていた。

大振りな執務机の両端に決裁書類を積みあげて、ダドリーは白羽のペンで書き物をしていた。大振りな椅子をギシリと鳴らし、椅子の背もたれに寄りかかる。思い余ってつめよると、彼は落ち着き払って平然と返した。

「会って書状を受け取っちまったら、人を出さなきゃなくなる」
エレーンは愕然と見返した。「——助けに行かないつもりなの！」
「ああ」

胸を抱き寄せようと伸びてきた手を振り払い、エレーンは翻意を促した。だが、ダドリーの決意は固く、あくまで首を縦に振らない。
「そんな余裕はどこにもない。ここは戦のない片田舎だぞ」
「でも！」

「この市民は、なんの訓練も受けていない、戦にはすぶの素人ばかりだ。訓練されたディールの兵と一体どうやってわたり合う。——土台無理な注文だ。万に一つの勝ち目もない。そんな真似は如何にも無謀だ。今、商都に領民をやる訳にはいかない」

できる事と、できない事とがある、とダドリーは言った。この辺りはただでさえ豊かとは言い難い土地柄だ。商都やトラビアのように潤沢な蓄えがあるでもない。壊滅的な被害を受ければ、二度と立ち直れなくなるだろう。そもそも商都に駆けつけたところで、武力なしでは助けにならない。ならば、静観するより道はない——つま

り、自分が長らく暮らした街を、かつて笑い合った友人たちから「助けてくれ」と乞われたその手を、薄情にも突き放す、と彼は言うのだ。何より商都は、エレーンの懐かしい故郷でもある。きっぱり、ダドリーは言い放った。

「俺は、商都からの使者には会っていないし、何も知らない」

すぐさま取りついて懇願したが、何を言おうが無駄だった。ダドリーはあくまで首を振る。

「なんと言われようと、助けは出せない。俺には、領民を守る義務がある」

「——あんたって人は！」

冷え固まった奥底から、何かが沸々と込みあげた。制御できない怒りのままに、エレーンは顔を振りあげた。

「人でなし！ 自分さえ良ければ、それでいいの！ あんたはそれで満足なの！ ダドのばか！ 大っ嫌いっ！」

なだめる手から憤然と飛びのき、執務室から飛び出した。

ドアの鍵穴から廊下を覗いて、エレーンはぶちぶち毒づいていた。鍵穴の形に切り取られた廊下では、寝室から閉めだされたダドリーが、肩を落として嘆息している。だが、ゴネるでも怒るでもなく、ドアに背を向け、すぐすぐ廊下を引き上げていく。エレーンは苛々舌打ちした。

「男なら、押し倒すぐらいのこと、してみせたらどうなのよ！」

普段であれば、強引な面さえ見せるダドリーだが、事エレーンに対しては、いつも、たいそう聞き分けが良い。嫌だと言えば、無理強いなどは決してしない。だが、それさえ、今のエレーンには腹立たしい。

とはいえ、エレーンの苦難はこの件だけに留まらなかった。

事もあるうちにダドリーが、どろん、と失踪しやがったのである。

夢の石

詰め所の手すりに置かれた ” それ ” を、門衛はちらりと眺めやった。透明度といい、曲線を描いた片面といい、いつもより若干美しくはあるようだ――。

目の高さにまで摘みあげ、ためつ眇めつじつくり眺め、だが、厚布の敷かれた背後の棚へと、ぶつきらばうに押しやった。それはガラクタとも見まごう翠石のかけらだった。丸い面をわずかに残して割つ欠けている。今度も ” ハズレ ” であるようだ、と密かに落胆、視線を戻す。その先には、小遣い銭を首尾良くせしめて、いそいそ戻る釣り人の背。

ここは大陸北方、クレスト領家、北の邸門にある検問所である。詰め所の窓の手すりには「回収窓口」と書かれた立て札、そして、今しがた詰め所に持ち込まれてきたのは、緑色をした石ころのかけら、いわゆる「夢の石」と呼ばれる代物である。

そう、” 夢の ” 石。この安易な呼び名が示す通りに「人の世の望み、すべからく叶えます」というなんとも豪気な代物である。もつとも、それが ” 本物であれば ” の話だが。

夢の石にまつわる逸話は、この手の胡散臭い事例のご多分に漏れず、古きは創世物語の昔から、古今東西、津々浦々、脈々と語り継がれて現在に至る。「賊の奇襲に遭遇した小さな村の長老が、秘蔵の石で絶体絶命の危地を脱した」或いは「敵中に取り残されて陥落寸前の敗残部隊が、突如出現した少年の石により、辛くも窮地を救われた」等々。

だが、今、問題であるのは、それらおとぎ話の内容ではない。そうした石の出自である。それというのも「カレリア北方、北の河原で拾った」との証言が滅多やたらと多いのだ。そうして、これは領土を治める為政者にとって、頭の痛い厄介事に他ならない。なにせ、この夢の石ときたら、拾った者の氏素性にかかわらず、願いをすべ

らく叶えてしまふというのだから。

看過しえぬ事態を受けて、クレスト領家は夢の石の回収に乗り出した。言い伝えと同様の外見の石を、すべからく没収しようというのである。協力者には相応の謝礼を支払う旨、声も厳かに公告し、ここ北門検問所には、専用の回収窓口も設置された。しかし、それを聞いた領民が、是幸いと日々持ち込むその数たるや――

「……畜生。まうた、いっぱいになっちまったか」

回収棚に背をひねり、門衛はうんざり頭を抱えた。厚布の敷かれた三段構えの木棚には、大小様々、形も様々、不揃いな翠石のかけら達がズラリと一列に居並んでいる。かつて別の用途で設えられたのであろうこの棚も、お触れが出た今となつては、件の石ころ専用の一時預かり保管所と成り果ててしまった感がある。とはいえ、そんな公示を出そうものなら、こうした事態に陥ろうことは火を見るよりも明らかである。石など河原に腐るほど転がっているのだから、いや、そもそも、石など集めたところでキリがない。まさに、その一語に尽きた。もっとも、引き取りの条件は”緑の”石に限定されているから、珍しいといえ、そう言えなくもないのだが、しかし――しかし、である。

麗らかな陽気の窓の外、敷地西にそびえ立つ豪壮な領邸を振りおぎ、門衛はそつと溜息をついた。つい先日、母屋に運んだばかりである。そう、前回の運搬からまだ三日と経っていない。棚から石ころを追いやつて、たまつた埃もきれいに払つて、さあ、やつと清々した――！ と伸びをしたのも束の間で、あつという間に元の木阿弥、又しても満員御礼、大盛況の有様である。

日々が経つのは、いかにも早い。とはいえ、保管場所が埋まつたからには、さつさと場所を空けぬことには、次の持ち込みに対処できない。扱ふブツの性質上、積み重なるなどは以ての外、粗雑に扱つては絶対いけない事情があるから、鎮座まします石ころどもに、可及的速やかにお立ちのき頂き、母屋の方へとお連れせねばならない、という三段論法的、強迫観念的緊急任務が否が応にも生じてし

まうことに相なるのである。そもそも「ああ、そこで（暇そうに）突っ立つてただけなら、ついでにこれもやつといてくんない？」的この手の窓口業務など、かつたるい雑用以外の何者でもない。実際、畑違いもいいところである。ぶつちゃけ、やってらんねえってな話である。仕事を勝手に増やされたところで、給料が増える訳でもなし！

無論、表立つては言えないが。

門衛は詰め所の事務机に頬杖をつき、いかにもげんなり、満杯の三段棚を見ていたが、つけ終わった回収記録にペンを無造作に放り込み、溜息と共にパタリと閉じた。限らない徒労感に背を押され、それでも、よつこらせ、と腰をあげる。棚の下に立てかけた運搬専用トレーを取りあげ、翠石をひよいひよい移していく。その手付きたるや慣れたもの。脇戸を開けて、少しの間、持ち場を離れる旨、同僚の立ち番に声をかけ、狭い検問所から歩み出た。

制服の肩に、初夏の日差しが降り注いだ。緑豊かな麗らかな邸内。暑くもなく、寒くもなし。実に程よい按配だ。大陸北方の北カレリア地方は、初夏といえども過ごしやすい。夏の日々の快適さたるや、各地からの避暑客が、例年、押し寄せてくるほどである。

裏道を歩いて母屋に向かえば、左に第一政務棟、右の外壁沿いには使用人宿舎、これらの間を通り抜けると、ちよつとした裏庭が右手に見える。その向こうは厨房棟、更に向こうに通用門、更に足を進めれば、領邸前に配された小奇麗な詰め所が現れる。

門衛はトレーを水平に掲げ、込みあげるあくびを噛み殺し、豪壮な母屋に足を向ける。静謐をたたえた広大な屋敷の、そのどこかにいるはずの、当主付きの老執事の元に、これらを運ぶのがお役目である。散歩気分でぶらぶら歩き、いつものように一人ごちた。

「——あほらしい。どうせ又、真つ赤な偽物なんだろうに——」

本物が一つでも混じっていたなら、今頃こんな所を歩いてはいない。宿舎に取って返して荷物をまとめ、とうにどこかへ消え失せている。大金持ちに変身して。

そう、年季がかつた北の詰め所が、豪勢な屋敷に化けちまつたりしないのは、凡そこにある石ころ全てが”偽物であるが故なのだ。運搬者は誰だって、持ち込みの石を受け取る都度、運搬のお鉢が回ってくる都度、密かにそれを願っている。ある時は切実に。ある時は投げやりに。

—— 夢の石よ、夢の石。俺を金持ちにしておくれ！

ともあれ、領邸を護衛すべき門衛が、こんな明るい昼日中から、本来の仕事そっちのけで、胡散臭い事この上ない石ころ風情を呑気に運んでいる、というのだから——門衛は肩をすくめて空を見る。

「平和だねえ……」

まったく平和だ。

四六時中気忙しい商都が拠点のラトキエや、常に緊張を強いられる国境デイルの勤務では、こうものんびりとはいかないだろう。

北の端つこの片田舎なんかじゃ事件も起きないもんだから、上に居座る連中も、こんな訳の分からぬ傍迷惑な業務^{イベント}を、暇に飽かして思いつくのだ。そもそも、そんなお宝を手中にしながら、それを領家に差し出して、二束三文に代える阿呆が、どこの世界にいるものだろうか。望めば、願いが叶うのに？ どんな金持ちの権力者にだって成り代わることができるのに？ そう、石に願をかけさえすれば、世界の様相は塗り変わる。

北方特有の高木から、日ざしが麗らかに降っていた。風はゆるやかに吹きわたり、木々の梢がざわついて揺れる。澄んだ夏空を仰ぎやり、凝った肩をこきこき動かし、くわあつ、と門衛はあくびしたのんびり歩く制服の肩に、木漏れ日が静かにちらついた。釣り人に持ち込まれた翠石のかけらが、きらきら日ざしを弾いている。

見向きもされないトレーの隅で。

使者 1

絶交したダドリーとは、あれから口もきいていない。むしろ、顔も合わせていない。なにせ屋敷にいないから。人伝に聞いた話では「領地の視察に出ている」というのが不在にしている名目で――だが、それもどうか怪しいものだ。そう、どうせならもっと、まじな嘘をつけばいいのに。

どうせ、顔を合わせるのが嫌なのだ。ちょっと怒ったもんだから、拗ねてイジけてへソ曲げて。大方、妾宅にでも引きこもり、羽を伸ばしているに違いない。だって、とっ捕まえたあの秘書官、途端に目を泳がせて、おどおどソワソワしていたし。そうよ、どう見たってあの顔は、嘘をついていた顔だもの。

襟元から取り出した緑の石を、エレーンは憮然と眺めやる。いわゆる俗に言う「夢の石」、ダドリーの執務室で厳重に保管されていた珍宝だ。「人の世の望み、すべからく叶えます」という世にもありがたい稀代の秘宝。そんな大層な代物が何故に首飾りにくっ付いているかといえば、その理由は他でもない、こっそり持ち出してやったからだ。

石の紛失が発覚すれば、不屈き至極の冷酷男も慌てふためいて困るだろう。つまりは腹いせ、あの石頭ダドリーへの嫌がらせだ。

もつとも、どうせ偽物だろうが。願をかけても、願いは何一つ叶わなかったし。妾も子供も未だに健在、ダドリーも翻意しなかった。あれから二週間余りが過ぎていた。商都は未だ軍勢に封じ込められている。だが、悲しいかな、辺境夫人の非力な身では、どれほど一人で気を揉もうが、どうすることもできない。

エレーンはソファアの肘掛にもたれ、開け放った飾り窓から、ぼんやり夏空を眺めていた。普段通りの、ひっそり穏やかで物憂い午後だ。北カレリアの晴れた空には、白雲がぼっかり浮いている。むくむく純白の入道雲。夏の空だ。瀟洒なカップをおもむるに取りあ

げ、立ちのぼる芳香を静かに楽しむ。麗らかな夏の昼さがり。広い居間には誰もいない。そう、これも、いつものこと――。

「お、奥方様！ 大変でございます！」

優雅な静けさが突如破られ、エレーンは気だるくドアを見た。何かと思えば、駆け込んできたのは、例の世話係の老執事ではないか。妾宅の所在地を白状させた、てっぺんハゲの小柄な執事だ。何があったか、せつぱつまつた狼狽ぶり。既に息切れしている小柄な執事は、膝に屈んで息を整え、まあい禿頭を振りあげた。

「旦那様のお姿が、屋敷のどこにも見当たりません！」

エレーンは白けた顔で手を振った。

「――だからあゝ、視察でしょ？ シ・サ・ツ。たく。何を今更そんなこと。まー、どこ視察してるかは、だいたい見当つくけどね」

余裕綽々香茶をすする。そうだ。妾とイチヤつく程度のことで大騒ぎなんぞしていたら、領家の奥方様は務まらないのだ。もちろん澄ました仮面の裏側では、めらめら怒りがたぎっているが――。ともあれ今は、かしずかれるべき使用人の前。威厳を保って、ゆったり優雅に、鷹揚に。ところが、そうは問屋が卸さなかった。

「い、いえ、それが、ご別宅の方ではございません」

「あん？ なら、どこだつて言うのよ」

「ですから！ こうして伺つておるのです！ 私共も、ていつきり、そちらにいらつしやるものとばかりに。しかし、先からは、お見えではないとの返答で」

「……はあ？ つまり、なに？ それつて、つまり――」

つまり、”よそ”へ憂さ晴らしに行ったのか？

エレーンはわなわな拳固を握る。妾だけでは飽きたらず！ 見下げ果てたその態度、断じて誓つて許すまじ！

「しかも、それだけではございません」

額の汗をハンカチで拭き拭き、執事はそそくさ報告を続けた。「間の悪いことに、ディールから使者が来邸しまして」

「ディ、ディールですつてえ！」

ぎよつ、とエレーンは見返した。「デイル」といえば、目下ラトキエを攻めている不埒な仇敵の家名ではないか。以前メイドをしていたエレーンにとって、ラトキエ領家は馴染み深いかつての職場領邸で働く使用人たちは気心の知れた者ばかり。そして、商都カレリアは生まれ育った大切な故郷だ。

「な、なんで？　なんでデイルがウチなんかに来んの！」

余裕こいた虚仮おどしから一転、美しく整った広い居間の白壁を浮き足だつてあたふた見回す。執事は憐れむように首を振り、辺りをはばかりるように見回した。頬に手を当てコソつとのたまう。「ですから、援軍の要請でございませう？」

「——わかつてるわよ！　そんなこた！」

右往左往の目を止めて、ぬう、とエレーンは睨めつけた。恐慌中の茶々は気に障る。ちらと執事は目を向けた。「して、どうなさいます？」

ぐ、と詰まつて、エレーンはぎりぎり拳を握る。お伺いを立てるだけの奴は気楽でいい。

「どうなさいますうって、どーすんのよ！　あの人がどこ行ったかなんて、こっちが訊きたいくらいだわよっ！」

「とにかく」

こほん、と執事が咳払いで仕切り直した。「使者が言うには、事は急を要するので、旦那様がご不在ならば、代理の方に書状をお納め頂きたい、と」

「は、はいっ？　代理つてまさか」

エレーンは愕然と己をさす。仰せの通り、と執事はにっこり微笑んだ。

「はい。先方との釣り合いから、ここはやはり、奥様にご対応頂くのが一番かと」

「そ、そうだっ！　お義兄様がいるじゃない！　闊達にして聡明なる、ダドリーの二番目のお兄様がっ！」

「グレッグ様はお加減がお悪いとかで、屋敷へお引き取りになりま

した」

「はあっ？ いーわけ？ そーいう見え透いた手で！」

「グレッグ様より、ご伝言がございます。万事粗相のないように、くれぐれも丁重にご対応になるように、と」

「でも！」

「ご自分は領主ではないから、と」

逃げやがったか。

ついにがつくりうなだれて、エレーンは力なく首を振った。「……いや、無理だつてえ」。絶対無理。そんなの、あたしにできる訳ないでしょ」

ついこの間まで、しがないメイドだったのである。ほんのつい数日前に、領邸に着いたばかりなのである。ぴらぴらドレスこそ着ちやいるが、中身は庶民この上ない。

「それにしても、旦那様のご不在というのに、助言もして下さらぬとは」

執事が嘆息して眉をひそめた。「これはやはり、我々は、相当な恨みを買ってしまったようですな。大旦那様のご遺言で、弟君の方を指名されたのでは、面白くないのも道理でしょうが」

先年、先代当主と嫡男が相次いで急逝した折、家督を継ぐ領主の椅子が二番目の兄の頭上を飛び越えて、末子ダドリーまで一氣に行ってしまったのである。

「でもおゝ、そんなこと、あたしに言われても」！

エレーンはげんなり額をつかむ。「あんのバカ！ 一体どこほつつき歩いてんのよ！ この一大事に！」

嘆息と舌打ちで罵って、キツと執事に顔をあげた。

「帰って頂きなさい」

きょとんと執事は瞬いた。

「……は？ では、居留守を使う、と仰せになるのです？」

「だあって、あたしが勝手に面会する訳にはいかないじゃない」

エレーンは不敵に笑って腕を組む。「領主は不在、居なけりゃ居

ないで致し方なし！」

もちろん本音は「厄介事はご免」である。そう、降りかかる火の粉は、断固速やかに振り払うべし。執事はおろおろ扉を見る。「し、しかし、使者はもう、すぐそこまで——」

「あー、具合悪るっ！」

「は？（『どこが？』）」

くるりとエレーンを振り返り、あからさまに疑惑の眼差し。胡散臭げな執事の顔には（ピンピンしてるじゃねーかよいい！）とのもっともな反論が書いてある。エレーンはやおら俯いて、己の腹をぺちぺち叩く。

「あらやだ！ そーいえば、おなかの調子も！——んまあ！ あたしったらオナカが痛いわ？ 今迄すーっかり忘れてたけど、そういえば今朝から、ずーっとおなか痛かったのよね。——あら、やだ、たーいへん！ もう今にも割れそうだわあ！」

「それはそれは（『割れる？ 腹が？』）」

老執事は冷ややかに燕尾服の腕を組む。おほほ、とエレーンは頬に手を当て、ドレスの脇を引っつかんだ。

「これにて、わたくしは休みます。具合が悪くて伏せっております故、使者にはそうお伝えしてね。万事粗相のないように」

「ほう？ 良い根性でございますな。では、この爺じい一人に押し付けて、ご自分だけお逃げになると？」

執事は口を尖らせて、主人の意向を正確に意識。エレーンはそそくさ出口へ向かった。

「奥様っ！」

「んじゃ、爺。後はよろしく頼んだわよん？」

こんな所に長居は無用。さつさと、どこかへズラかるべし。そう、逃げるが勝ちつてものである。そんな厄介事を背負い込むなんぞ、まったくもって言語道断。扉のドアノブむんずとつかみ、力任せに押し開ける。

バン——と予定外の音がした。

使者2

華美な客室中央で、傷一つない飴色の卓をさし挟んで座っていた。エレーンはぶちぶち背後を見る。そこには危ういところで難を逃れ、胸なで下ろした老執事。

（もー。なんで、あたしがこんなことをー！）

向かいには、眼窩の落ち窪んだ痩せぎすの中年男が背筋を伸ばして着席している。デイルからの正式な使者だ。その紛うことなき当人を、あるうことが元氣ハツラツぶつ飛ばしてしまったからには、引くに引けない崖っぷちである。

「さて、早速でございますが」

簡単な口上を述べ終わり、使者は早々に切り出した。

「我が主より預かりました書状にございます。ご領主様ご不在の由、先ほど確かに承りましたが、なにぶん事は急を要します故、ご当主様に代わって、お受け取り願いたく」

「いいえ。受け取れませんわ」

ツン、とエレーンは横を向いた。既に喧嘩腰の態度である。だって、故郷を攻めた憎きデイルの使者なのだ。歓迎などできようはずもないではないか。ラトキエの方の使者ならともかく。使者は面食らったように動きを止めて、怪訝そうに見返した。

「受け取れない？——失礼ですが、何を仰っているのか、お分かりか」

「私は領主ではございせんもの。そんな権限、どつこにもございせんことよ？」

手の甲頬に押し当てて、ホホ、とエレーンはお愛想笑い。虚勢を張るのも、無論これが精一杯。そう、冗談ではない。そんな危なっかしい話になんか、極力絶対関わりたくない。デイルの使者は啞然と向かいを眺めている。

「——そうですか。それでは仕方がございませんな」

意外にも、あっさり引き下がった。一度差し出した件の書状を卓の上から拾いあげ、落ち窪んだ眼窩を無表情に向ける。

「それでは大変残念ですが、私は自国^{くに}へ立ち戻り、クレストの助力は得られなかった旨、報告せざるを得ませんな。つまり、貴女^{あなた}は、我々を敵に回すと仰るのですね」

「——それは！」

「世事に疎い奥方様といえども、この状況で早馬が立てば、援軍の要請であることはお分かりになって然るべき。それを書状さえ受け取らずに追いつ返すというのであれば、弓引く意志は歴然です。結論を出される前に、よくよくお考え頂きたい。我々を敵に回して宜しいのですかね。奥方様の大切な領土が、明日にも消えてなくなるやも知れませんか」

「あ、あのっ！ でも、そんな——！」

急展開に戸惑いつつも、チラと壁を振り向けば、老執事は顔を強張らせ、首を横に振っている。それに小さく頷き返して、エレーンは顔を振りあげた。

「お引き取りを」

「……ほう。やはり、お心は変わらぬと？ クレストは我々に敵対すると、こう受け取って宜しいのですな」

「いいえ？ そのようなことは誰も申しておりませんわ」

怪訝そうな向かいの使者を、エレーンは微笑んで、ゆったり見据えた。

「それほど大事な書状でしたら、私などが受け取るわけには参りませんもの。クレストの意向をと仰るならば尚のこと、当家の主が戻り次第、出直して頂くのが筋というもの。そうではございませんかと？」

「ですから、急を要すると」

「そちら様のご都合でございましょう？ 私などに仰られても」

あらあらまあまあ、ところどころ笑い（さあ、どーよ！ これでどーよ！）と断固として目を向けた。これは予期せぬ返答であつたら

しく、使者は眉をひそめている。

エレーンは密かにほくそ笑んだ。偉そうなキツネが、なんか困っているようではないか。こうは見えても元庶民。多くの他人に揉まれつつ世の荒波を渡ってきたのだ。口先で相手をやり込める事にかけては、ちよつとばかり自信もある。

場は不気味に静まった。慇懃な穏やかさは成りを潜め、不穏な緊迫が張りつめる。

「――頑固なお方でいらつしやる」

やがて、使者は苦笑いで表情を崩した。

「ならば、こちらもう少しばかり、事情を明かすのでしょうか。ああ、いえ、ここから先は、ありふれた世間話とお聞き流し下さつて結構。いやなに、ちよつと小耳に挟んだ他愛のない話なのですがね」

硬直した場を仕切り直すかのように前置いて、これまでの儀礼的な口調を少し親しげなものに改める。礼装の肘を卓につき、骨張った指を組み合わせ、ほんのわずか目を眇めた。

「実は先日、我々の兵が、こちらのご領主様にとてもよく似た者を捕らえて参りましたな」

「――主人が！」

愕然とエレーンは目をみはった。ここ数日の変調が、絶句した脳裏を瞬時に掠める。未だ行方の知れぬダドリー、見計らったように現れた使者、含みを持たせたこの物言い、身柄の拘束をちらつかせる脅し。ならば、使者の言う「よく似た者」とは――

「いえいえ、そうは申しておりませんよ」

使者は苦笑いで否定した。射抜くような視線は逸らさぬままに。しばし間を取り、相手の芳しい反応を確認すると、おもむろに身を乗り出した。

「恐らく、これは人違い、さもなくば誤報の類でございましょうが、しかし一応念の為、奥方様のお耳にも入れて差しあげた方が親切なわけではありませんかと、かように思案した次第でしてな。いや、まさ

か、遠い北の地のご当主様が、今頃トラビアなんぞにおられようはずもない。そうでございますよう、奥方様」

眼窩の落ち窪んだ冷やかな目で、白々しくも同意を求める。エレーンは唇を噛みしめた。「そ、そんなことして、ただで済むと思つてんの！ 仮にも一国の領主を人質にとるだなんて！」

詰問がうわずり、むなしく震える。

「はて、なんのことでございましょうか。ご非難の意味合いが分かりかねますが」

「だ、だつて！ 今、あんだ、ダドリーを」

「ですから、先刻から申し上げておりますでしょう。よく似た者と」憫笑さえも頬に浮かべて、使者はあくまで空惚ける。

エレーンは打ち震えて絶句した。何が起きているのか分からない。他領の主には礼節を以て接するものだ。それを犯罪人の如くに拘束するなど、まかり通る話ではない。まして正式な使者の立場というなら尚のこと。

だが、現に、これは紛れもない脅迫だった。ディールへの隷属を拒むのであれば、領主の命の保証はない、そう脅されているも同然だ。使者は今、領家の自立と領主の命——つまり、領民の命とダドリーの命の二者択一を迫っているのだ。だが、どちらか一方を選ぶことは即ち、残る一方をこの使者に、ディールに差し出すことに他ならない。進退窮まり、エレーンは奥歯を食いしばる。「——一体、あたしにどうしろと」

「おや、急に聞き分けが良くなりましたな。初めからそうして素直に聞いておけば宜しいものを」

哀れむように小さく嘲笑い、使者は書状を差し出した。

「奥方様には、当家への援軍をご検討頂きたい。こちらのご当主様は、しばらくお戻りにはならぬようですし」

向かいの顔を睨みつけ、エレーンは卓の下で拳を握る。目の前が真っ暗になりそうだ。クレスト領家の命運が思わぬ転落を始めている。だが、食い止めようにも術がない。

何事か打ち明けるかのように、使者が卓に乗り出した。「我々は兵が欲しいのです。それも、ちっぽけな農民の寄せ集めなどではない。戦地シャンバールでさえ第一線で通用する、遊民どもの精鋭が」
「……ゆうみん、の？」

思わぬ名称に面食らい、エレーンは啞然と向かいを見る。

「ええ、遊民の」

苦々しい口調で念押しし、使者はハンカチで口元を押さえた。その名を口にするのも汚らわしいとでもいうように。甲高く掠れたしわがれ声で、使者はゆったり言葉を紡ぐ。

「クレストには無論、民兵もご提供頂く。奥方様もご存知でしょうが、我々の領土トラビアは隣国と境を接しておる故、国境防衛のお役目を、国王より仰せつかっておりますのでな。商都に軍を留めていては守備に支障をきたしてしまう。よって、今、我々は、一人でも多くの兵を必要としているのですよ。しかし、今日こうして伺ったのは、何もそれだけが理由ではない」

慇懃無礼な物言いの底に、厚かましい威圧が見え隠れする。儀礼の仮面を脱ぎ捨てたようだ。これが掛け値なしの素の態度、弱小領家クレストに対する、ありのままの評価というわけなのだ。使者が蔑むように目を向けた。

「そろそろ決着をつけようと思うのですよ。あの賤民どもの手にかかれば、商都陥落などは容易いはず。如何なしぶといラトキエといえども応じぬわけには参りますまい。もつともそこは、ならず者の集団のこと、どここの家中にも伝^{つて}などというものがあるうはずもない。あろうはずもないが、しかし、ここクレストであれば、そうした事情も別物のはず」

声を一段と低くして、耳打ちするように顔を寄せる。「おありになるのでしょうか？ 特別な伝が。奥方様におかれましては、是非ともそちらの方面で、ご尽力を賜りたい」

エレーンは戸惑った。話がさっぱり飲み込めない。

遊民というのは、どさ回りの旅芸人を指す蔑称だ。どこの国籍も

持たない彼らは、歌や軽業等の華麗な芸妓を披露しながら、幌馬車一つで各地を転々と放浪する。歌ったり、踊ったり、芝居をしたり、道化を演じて笑わせたり、そんな芸事畑の旅芸人を、何故、戦に駆り出そうとするのか、まず、そこからして見当もつかない。まさか兵を慰労する為でもないだろう。

そもそも、この「遊民」はいささか毛色が変わっている。彼らは混血児の集まりで、異国民との混血は、一般に嫌われる風潮がある。その為、彼らは市民より一段低く見られがちだ。彼らの方でも舞台を降りれば、群れに部外者を近付けない。市民と遊民、両者の間は、冷たくよそよしく隔たっている。そんな排他的な存在に、特別な伝など、あるうはずもないのだ。

「……何故、私などに手配できると思うのです？ 何か勘違いをされているのでは」

哀れむような失笑で、使者は笑った。

「おやおや、あなたは何も知らされてはいないらしい。クレストと賤民どもとの親密なる関係を」

「でも、そんな話、あたしは何も」

「遊民どもにお会いになれば、それはすぐにも、お分かりになること。クレストの頼みとあらば、連中も嫌とは言いますまい。ともあれ」

言葉をきって改めて見据え、ディールの使者は淡々と、だが、威圧的に話を締めた。

「本来であれば、一刻の猶予もないところですが、急な話で驚かれたことでしょう。これはクレストの今後を左右する大切なお話ですからな。奥方様におかれましては、よくよくご検討頂いて、返事については明日にでも、改めて伺うことと致しましょう」

使者3

「ねーちよつとさー、無責任じゃないの？ 今の態度」

エレーンはぷりぷり、不貞腐った腕組みで歩いてた。弱きを助け、悪しきを挫く正義の味方お巡りさんに、いそいそ相談に行つたのだが、あっさり突っぱねられたのである。あんなに丁重にお願いしたのに。いわく

『あのねー。あんたの街の善良な市民が、こうして目の前で困っているのよ。なのに、なんにもしないで追い出す気い？』

相手の返答はこうである。

『しかし、奥方様は、もう、市民じゃありませんよね』

更には「出勤の裁可なし」と言い張られ、つまりは「あんたには警邏を動かす権限はないよ」と突っぱねられて、体良く押し付ける事にまんまと失敗したのである。詰め所で散々主張された通り、彼ら警邏のお仕事は「街の治安を守ることであつて、断じて戦をすることではない」のである。

隣を歩く老執事が、ちら、と呆れ顔で盗み見た。「奥様と良い勝負でございますな。そもそも、この話を突っぱねたのは奥様ですぞ」「なによおー、あれは爺じいがよせて言つたから」

「はて。かようなことを、いつ申しましたか」

「首振つて合図したじゃない！」

「あ、いや、あの時はちよつとこう、首の周りが痒かったものですから」

(……このおー！)

エレーンはファイティングポーズで拳固を握る。醜い争いってものである。

「ここはやはり、グレッグ様にご相談なさるべきでしょうな」

燕尾服の腕を組み、執事はやおら頷いた。「使者とのやり取りを包み隠さずお話し、こうした場合の指示を乞うのです。チェスター

家を継いだとはいえ、グレッグ様もクレスト公家のお血筋なれば、知らん顔もできますまいて。まして奥様自らお訪ねになれば、会わぬわけにも参りますまい」

「ナイス！ 爺！」

パンと両手を打ち鳴らし、エレーンはほくほく頷いた。

「そうよね？　いくら（意地悪な）お義兄様だつて、いつまでもすつ呆けてるはずはないわよね？　我がまな子供^{ガキ}じゃあるまいし。うん！　それいいわ！　それいきましょ！」

元より異議など、あるはずもないのだ。こんな分不相応に巨大な重荷は、さつさと下ろして清々したい。足取りも軽くほくほくと、チエスター候の屋敷へと向かった。

チエスター候は、当地の貴族で構成される「ノースカレリア貴族院」議員の要職にある。つまりは領家の要諦だ。政務をとる立場なら、こんな名ばかりの奥方様より、よほど適任というものではないか。むしろ任せて然るべき！

ところがしかし、

「申し訳ございません。旦那様はご不在です」

対応に出向いた黒服の執事が、冷たく慇懃に頭を下げる。エレーンは苛々爪を噛んだ。

「どこへ行つたの、こんな時に！　一刻を争う緊急事態なのよ。捜して連れてきてちょうだい！」

「なんでも、商都の状態が心配なので、様子を見に行かれるとかで――」

エレーンは愕然と絶句した。つまり、それって、

――まだ、そこいらにいてるってわけだ。

拗ねてしまったお義兄様は、子供より質が悪いのだった。屋敷の奥深くへとお隠れあそばしてしまつたらしく、呼ぼうが脅そうが出てきやしない。そして「執事」とは即ち、アポなしの客を追い払うプロフェッショナルの別名である。

執事にゴネてもどうにもならず、結局にべもなく門前払い。敵は

どうやら意地悪く、高みの見物を決め込むつもりでいるらしい。

赤く染まり始めた夕刻の道を、エレーンとはとぼ引き返していた。まさか見捨てられるとは思わなかった。気に入られていないのは知っていたが、そこは身内のことなのだ。なんだかんだ言ったって、最後には力になってくれる、そうとばかりに思っていたのに。

既に万策尽きていた。これ以上の手段など、もう思い浮びそうにもない。いや、そもそもが無理な話なのだ。一人でどうにかしろつたって。けれど相談しようにも、この土地には来たばかりで、知り合いさえも碌にいない。ならば一体どうしたらいい――。

気力尽き果て、道の真ん中でしゃがみ込む。エレーンは虚ろに膝を抱えた。通りすがりの数人が、怪訝そうに避けて行く。身形が市民のそれではない、あまり見かけぬ荒んだ風体。各地から人・物共に集中する商都カレリアの裏通りで、ああした身形の集団が歩いていくのを稀に見かけることがある。あれが世に言う傭兵という類いだろうか。

彼らは通り過ぎて足を止め、不躰に眺めているようだった。道を塞がれて邪魔だったか、往来の真ん中で座り込んだ様子が不審だったか――それでもエレーンは伏せたまま、その場をわずかにも動かなかった。いや、動くことができなかった。立ちあがって立ち去るうにも、既に精根尽き果てている。老執事が心配し、顔を覗き込んでいるようだったが、応える気力さえ失せている。見物していた一団は、やがて動いて歩み去った。

（もう、いや……）

膝を抱えた両腕に、エレーンは更に力を込めた。明日など、いつそ来なければいい。ずっとこのまま、こうしていたい。

「……あたしに、できるわけが、ないじゃないよ」

物資、財力、技量、人材、全てを取り揃えた領家の絶大な権力に、素手で立ち向かえ、と言われているようなものだ。

飽和し、拡散していく意識の中で、一点だけが冴えていた。はっきり分かっていることが一つだけある。それは、救いの手を差し伸

べる者など、どこにもいない、という紛れもない現実だ。領邸勤めのかつてのように、物事に判断を下し、適切な指示を出し、責任をとってくれる上司などという存在は、今やどこにもいないのだ。もう頼ることはできない。

誰にも。

（あたしがなんとかしなくちゃいけない……）

絶望に目がくらんだ。途方もない重圧で窒息してしまいそうだった。他の誰でもない自分のこの手で、事態を乗り切らねばならないのだ。自分の頭で考えて、この決断を下さねばならない。そこに派生する一切を、全て引き受ける覚悟の上で。仇敵デイルに隷従するか、要請を突っぱね自立を保つか、それとも、他にも方法が——？ それを検討する為の、どんな材料があったろう。どんな選択肢があるだろう。政治方面には疎いから、判断材料は乏しかった。それでもなんとか吟味して、知恵のありつたけを動員し、吹けば飛ぶような経験もフル稼働で働かせ、なんとか、より良い結論を——

「考え、ないと……」

エレーンはのろのろ立ちあがった。問題を誤魔化して遊んでいる暇は、もう、ない。

執事がおろおろ覗きこむ。ずっと傍らで気遣ってくれていたらしい。何事か話しかけているようだが、どんな慰めも耳に入らず、上の空で返事をした。

腹をくくる時がきたようだった。

決定の期限は、今夜限り。

使者 4

「心はお決まりになりましたかな」

再び交渉のテーブルに着き、使者はいそいそ上機嫌で覗いた。「最早一刻の猶予もございませんのでな。昨日のお返事、しかと頂戴致したく」

相手が承諾することを、露ほども疑わぬ傲慢な顔だ。

「さあ、どうなさいました。色良いご返答を頂けるのでしょうか」

エレーンは膝に目を落とした。指先の震えが止まらない。ドレスの膝を握り締めているのは、何の変哲もない自分の手——まったく冗談みたいな話だった。こんな小さな自分のこの手に、領家の命運がかかっているというのだ。幾千幾万もの領民たちの運命を、それぞれが築く未来の全てを、自分のこの手が握っている。ついこの前まで領邸のメイドとして働いていた、見識も資質もない、ちっぽけなこの手が。

——逃げたい。

壮絶な恐怖が込みあげた。こんな場所はすぐにも逃げ出し、自分を誰も知らない所で、無関係な顔を決めこみたい。自分は他人様の運命を、まして他人の生命を顎の先で左右できるような、そんなたいそれた器ではない。領邸で寝起きはしていても、中身はただの庶民だ。人の上に立つべく教育された生粋の貴族のダドリーたちは、端から全く違うのだ。英気が。器量が。才腕が。

ふと、それを考えた。ならば「領家の人間」なら、ダドリーならば、どう対処するだろう。どう使者に答えるだろう。今、この場に
いる者が、ダドリー・クレストであったなら——。

あの光景が脳裏を過ぎった。彼に詰め寄った午後の書斎が。ラトキエへの援軍を促して突っぱねられたあの時が。

「さあ、奥方様。ご返答を」

「……お引き取りを」

ピクリと使者が動きを止めた。

「——いや、申し訳ない。よく聞こえなかったのですがね」

訝しげに聞き返す。緊張に汗ばみ、強張った両手を強く強く握りしめ、エレーンは膝から顔をあげた。今度は一語一語はつきりと、クレスト領家としての意向を伝えるべく、相手を見据えてきつぱりと告げる。

「領主不在のこの折に、私の一存で兵を動かすことはできません。お引き取りを」

そう、ここにいるのがダドリー・クレストであつたなら、何を置いても領民を守る。それを最優先にしたはずだ。自分が大切にしているものが、それで犠牲になるうとも。捨て難いものを失うとしても。例えそれが懐かしい商都であろうとも。

今にして、ようやく分かる。彼が下した決断の意味が。一貫してはねのけ続けた領主としての言葉の重みが。同時に二つは選べないだから彼は採つたのだ。自分の領土と領民を。何より大事な領民の暮らしと、その生命を守る為に。

彼は泣き言なんか言わなかったけれど、商都が大事でなかったはずはない。考えなかったわけがないのだ。自分が見捨てる人々のことを。ラトキエの人々の行く末を。

それでも彼は一人で決めた。どれだけ文句を言っても、人でなしと罵られても、逃げ出したりはしなかった。体が二つに引き裂かれそうな痛みが、決断するしかなかった苦悩が、同じ立場の今なら分かる。けれど、要請を蹴つたなら、切り捨てられたダドリーはどうなる？

暗い牢獄に繋がれて、背中を鞭で打たれるかもしれない。二度と外には出られないかもしれない。悪くすれば死んでしまうかもしれない。遠いトラビアの獄中で、誰にも看取られることもなく。でも、それでも。

珍しいものでも見るように使者はまじまじと眺めやり、戸惑ったように眉をひそめた。

「ほう。宜しいのですかな、本当に？ 結論をお出しになる前に、よくよくご再考願いたい。既に申し上げているはずです。切り札は我が手中にあると。よもや、お忘れではないでしょうな」

エレーンは無言で睨めつけた。断じて、ここで屈してはならない。
「――強情な方だ」

使者は忌々しげに舌打ちし、乗り出していた背を椅子に戻した。
「そうですか。それはまことに残念だ。ご当主様はこちらには、二度とお戻りにならぬかも知れませんが。しかし、民も災難ですな。主に見捨てられようとは！」

苛立つた皮肉で脅迫し、人差し指で卓を叩く。

「本当に宜しいのですな。貴女あなたの下す判断一つで、街が火の海になるやもしれませんぞ。それでも良い、と仰るのですな」

「――で、ですから、それは！」

さすがにエレーンは口ごもった。それを持ち出されては領けるはずがない。

「そうですか！ ならば――」

使者が痺れを切らして席を立った。落ち窪んだ眼窩で冷ややかに見下し、憎々しげに睨みつける。冷徹な色がその眼に過ぎった。

「ならば、首を洗って待っているがいい」

靴の踵を鋭く鳴らして、憤然と外套をひるがえす。

「――ちよつと待ちなさいよ」

立ち去りかけた足を止め、使者が肩越しに振り向いた。エレーンはゆっくり席を立つ。そして、剣呑に睨み据えた。

「あたしの夫にちよつとでも妙な真似をしてみなさいよ。そんなことしたら、あんた、ただじゃ済まさないわよ」

使者が鼻じらんだように顔を強張らせ、取り繕うように鼻を鳴らした。そそくさ扉に踵を返す。

重厚な扉が叩き付けられ、凄まじい音が部屋中に響いた。交渉の決裂した瞬間、売られた喧嘩をクレストが買った瞬間だった。

がらんと白けた空間に、沈黙が重く淀んでいた。場違いなほどにのどかな日差しが、傍らの大窓から差しこんでいる。少し離れて見ていた執事が、おろおろしながら寄ってきた。

「お、奥方様。どうしたら！」

冷たく閉じられたドアに目をやり、やきもき手を握りしめる。「あの様子では、ディールはやはり本気なのでしょうな。我々は従うべきだったのでしょうか」

「いいえ」

エレーンは静かに、だが、きっぱり首を横に振った。

「クレストはラトキエの要請にも応えなかったのよ。それを今更、ディールの書状を受け取るわけにはいかないわ」

「ですが奥様。このままでは旦那様の身が」

「大丈夫。きつと殺されはしない。——大丈夫」

エレーンは首を振って、目を閉じた。癖っ毛の彼の、屈託のない笑顔が蘇る。こうなってしまった以上、彼は二度と戻ることができないかも知れない。それでも、そうするより他ないのなら。あの場にいたのが彼ならば、そう答えたというのなら。

領主の代理として赴いた以上、その意に反することはできなかった。領主の意向を伝える事こそ、交渉のテーブルに着く者の、唯一にして重大なる役目だ。

「大丈夫——きつと大丈夫！」

微かに灯る希望を唱えて、エレーンは自らに言い聞かせた。「あの人たちは知っているもの、ダドリーの身分を。だから、きつと殺したりしない。ダドリーだけは最後まで」

暗示を紡ぐ声が震える。

「ラトキエが勝つまで我慢するのよ。それなら時間は、まだ残されているはずよ」

「ですが万一、ラトキエが敗れば、その時は」

エレーンは拳を握って沈黙した。足元の一点を睨みつけ、奥歯を強く噛みしめる。床に俯いた目の端で、窓の外の梢がゆれた。昼下

がりの領邸は、穏やかな静謐に包まれている。

「——でもね、あの人は褒めてくれると思うの」

なんとか言葉を紡ぎだし、エレーンは強張った頬をようやくゆるめた。

「よくやったって、笑って褒めてくれると思うの。だ、だから、あたしは、しっかり留守番してないと——」

声が震えて、その先は言葉にならなかった。執事は黙って聞いている。目を逸らした横顔は居たたまれない面持ちだ。こみあげた涙を腕でぬぐって、エレーンは気を取り直して微笑みかけた。

「ね、爺じい。あの人が領民は出さないと決めたのよ。なのに、あたしが勝手に反することはできないわ」

「しかし奥様。それでは旦那様の身が」

「あたしはダドリーに従うわ」

きっぱりエレーンは断言した。

「ダドの決定に、あたしは従う。彼の目を信じるわ。ダドリー＝クレストは、あたしが選んだ最高の夫よ。ダドの言うことに間違いはない」

執事は深く嘆息した。

「左様でございますか。ならば、爺にはもう、何も申し上げることはございません」

ゆるゆる首を振っている。老いた胸中を占める想いは諦めだろうか。絶望だろうか。彼とてこの渦中にいるのだ。明日をも知れぬ不穏な渦中に。

「そ、それにしても——」

それに気づいて居たたまれなくなり、エレーンは慌てて話題を変えた。

「今の使者、妙なことを言っていたわね。あれはどういう意味かしら。遊民の精鋭を手配しろ、だなんて」

「本当でございますとも！　どういふ見であるのやら！」

意気消沈していた執事が、ここぞとばかりに大喝一声、薄い頭を

振りあげた。使者の叩き付けた大きな扉を、腕組みでぷりぷり睨めつける。本人がいないと威勢が良い。

「……遊民、か」

元の椅子に座りこみ、エレーンは額に手を置いた。新参者の自分には、彼我の間の因縁は、何のことやら見当もつかない。だが、あまで執拗にこだわったところを見ると、その意味は決して小さくない。

「まったく！ 珍妙なことを言うものですな！ よりにもよって遊民どもを手配せよとは！ あのいかげんしい連中が大挙して集う場所へなど、のこのこ出向いてごらんなさい。何をされるか知れたものでは——」

「さ、爺。行くわよ」

ガタンと椅子の脚を鳴らして、エレーンは席を立ちあがる。きょとん、と執事が顔を見た。「はて。どこへでございますかな」

「決まってるでしょ。デュナン草原、遊民たちの天幕群へよ」

「え……えええっ！」

そう、使者がそうまで欲するならば、彼らが切り札になる筈だ。最悪の事態を覆す、最後の強力な切り札に。

交渉 1

通されたのは、意外にも小綺麗な応接室だった。珍しい模様の瀟洒な皿が飾り棚の上に立てかけられ、精密な彫りの調度品が品良くさりげなく飾つてある。

デユナン草原、遊民たちの天幕群。見張りの立つ入口で「一番偉い人を」と頼みこみ、来意に応えて出てきた彼は、遊民たちを統括する「統領の代理」と立場を名乗った。彼の名前はデジデリオ、統領の実弟ということだ。

ソファーに脚を組んだ統領代理の後ろには、彼の護衛であるらしき目つきの鋭い五人の男が隙なく並び立っている。着こんだ革ジャンに暗色のズボン、頑丈そうな編み上げ靴、そして、年季の入った上着の下には短剣の柄が見えている。皆、堀が深く精悍だ。カレリア人の顔立ちではない。隣国の傭兵でも雇っているのだろうか。

向かいのソファーの青年は、涼やかな目を向けている。手入れの行き届いたウェーブの長髪、一目で高価とわかる服。若く端麗なその顔は、そつなく落ち着きを払っている。

「さて、ご用の向きを伺いましょうか。こんなむさくるしい所まで、公爵夫人直々にご足労頂いたのですから」

「——あ、はいっ！」

はたと我に返って赤面し、エレーンはあたふたうつむいた。向かいのあまりの美麗さに、うっかり見とれていたらしい。統領代理はゆったり目を向け、話を切り出すのを待っている。込みあげる緊張に唾を飲み、エレーンは顔を振りあげた。「た、助けて欲しいの！ あたし達を！」

「助ける？」

訝しげに目を細め、統領代理は復唱する。

「え、ええ！ 実は昨日、屋敷にディールの使者がきて——」

統領代理は腕を組み、言葉を挟まず聞いている。相槌を打つても

なければ、促すでもない。反応のなさにやきもきしながら、しどろもどろで続けていると、途中で小さく嘆息した。やはり、あからさまに気のない態度だ。

こちらの事情は話し終えたが、彼は口をきこうとしない。空気がよどんだような応接室に、時間だけが流れていく。

「――あ、あの！」

「お引き取り願いますようか」

向かいがおもむろに席を立った。素っ気ない返事に驚いて、エレインは慌てて食い下がる。「お、お願いします！　だって、あなた達しか頼る所は――」

「無理ですよ。残念ですが、私たちはご期待に添えません」

「待つて！　ディールの使者が言つてたの！　あなた達とクレストは親密だって！　あれは一体どういう意味？」

統領代理は足を止め、肩越しに護衛を一瞥すると、軽くそちらに手を振った。

「ああ、お客様はお帰りだ。誰か送ってさしあげて」

エレインはとぼとぼ、街の大通りを歩いていった。一度は領邸に戻りもしたが、いてもたってもいられずに、再び抜け出し、散歩に出たのだ。

「……あたし、一体どうしたら」

途方に暮れて溜息をついた。観光客と思しき親子が、雑談しながら行き過ぎる。寂れた田舎には珍しく、街は多くの人で賑わっていた。年に一度の豊穰祭、一月もの長期にわたるその開催期であるからだ。

ノースカレリアの豊穰祭は、他都市のそれとは比べ物にならぬ程、華美で大掛かりなことで知られている。それには祭の主役ともいうべき遊民たちの存在が大きい。

観光客は「農作物の実りに感謝し、翌年の豊作を祈願する」という祭本来の主旨に賛同するというよりはむしろ、祭に彩りを添える

踊り子たちの優美な舞いや、秀逸な芸を披露する芸妓団の華麗な催し物の方を楽しみに、この大陸北端の地を訪れる。というのも、遊民たちの興行は通常、家財道具を積んだ荷馬車一つで気ままに各地を訪れる「どさ回り」が主なので、数十もの芸妓団が一同に会するこうした機会は、実に珍しいことだからだ。よって、毎年この時期、大陸北端のこの街には、世に聞こえた有名な祭を一目見ようと観光客が押し寄せる。この一大イベントに、街中の宿という宿は、全国からの観光客で連日満室御礼となる。無論、街中の商店にとっても唯一無二の書き入れ時だ。

ノースカレリアは観光収入に頼った街だ。華やかなりし港湾都市の昔には、飛ぶ鳥落とす勢いだったが、内海の氾濫で廃港となり、以降すっかり落ちぶれてしまった。今では観光客の落とす幾ばくかの金で暮らしが成り立っている側面がある。そうなれば畢竟、祭の準備には街を上げて入念に取り組み、壊れた外壁や人目につく歩道等はすべからず整備、修繕される。開催期には商店も、石畳の歩道にまで商品をぎっしり押し並べ、売り込みも盛んに行なわれる。親子連れや恋人たちが通りを行き交い、ひと時、街は活況を呈する。

「……豊穰祭、か」

通行人を見回して、エレインはそつと嘆息した。

北の街の石畳を、爽やかな北方特有の心地良い日差しが照らしていた。街をぶらつくどの顔も、肩の力を抜いてのんびりしている。

店の前を掃く前掛けをした老婦人、祭の準備に追われ、忙しげな店主、寛いだ顔で店先を冷やかす観光客。だが、祭に浮き立つこの街も、あと数日もしたならば――。

期限は刻々と近づいてくる。協力者は見つからない。そればかりか、のん気にぶらつく人たちは、今こうしている間にも、ディールの軍が着々と、この地に向かってのことさえ知らないのだ。

なんとかせねばならなかった。ディールの要請を突っぱねたからには、難局を自力で乗り切らねばならなかった。どんな手段を使っても。だが、こちらの味方は一人としていない。警邏は端から耳

を貸さず、身内に疎まれて居留守を使われ、頼みの綱の遊民たちにも、あつさり協力を拒まれる――。

整備された石畳が、いやに白々しく眩しかった。寒いような気候ではないのに、抱き締めた体が震えていた。街のつつがない喧騒が動かぬ体を包みこみ、四方八方から責め立てるように迫りくる。穏やかで平和なこの街を、この手で壊してしまうのか――

「どうしたい。新婚さんがシケた面して。ん？」

声を怪訝に振り向けば、大きな茶色の紙袋を抱えて、中年の夫妻が立っていた。

煉瓦を貼った建物の壁が、午後の日差しを浴びていた。遊民たちの天幕群、その最奥にある建造物だ。舞い戻った館の壁を、エレーンは固い決意で振り仰ぐ。街で再会した夫妻と共に。

夫妻は「どくろ亭」という宿屋の主である。宿の所在地は、街から東に伸びる街道をずっと行った遠方なのだが、物品の買い出しの為、ノースカレリアに来たらしい。亭主がセヴィラン、女将がビビ。二年前、休暇でこの地を訪れたエレーンは、「どくろ亭」を借りきって長逗留していた仲間たちと毎日のように遊んでいた為、階下にある飲食店は彼らの溜まり場となっていた。それで、宿の主とも家族同然の顔馴染みなのだ。いわば夫妻は、行きつけの店の亭主と女将といったところ。

ひょんなところで気心知れた顔に会い、エレーンは思わず泣きついた。夫妻は事態の経緯と窮地を知るや、加勢することを請け負った。それで早速、天幕群に舞い戻り、見張りの制止を振り切って、先刻、統領代理と面会した、敷地最奥の建物の前まで、半ば強引に押し通ってきたのだ。

日差しを遮る館内は、ひんやりとして涼しかった。閑散として誰もいない。エレーン一行は入口を潜り、先程通された応接室を目指して廊下を歩く。

「どこへ行く」

唐突に声がかかった。見れば、前方右手の薄暗い壁に、男が一人、腕を組んでもたれている。薄茶の直毛を腰まで伸ばした、整った顔立ちの若い男だ。細身の体に着古した革ジャンをはおり、中には黒のランニング、綿素材の暗色のパンツに、黒い編み上げ靴を履いている。先刻、応接室で見た護衛と似たような風体だ。

肩の長髪をしなやかに揺らして、男が背を引き起こした。静かな廊下に硬い靴音を響かせて、おもむろにこちらに近づいてくる。目の前まで来て足を止め、亭主の腕を無造作につかんだ。

「——なんだ。放せよ。俺たちはこの先に用があるんだ」

亭主はうるさそうに舌打ちした。だが、長髪は手を放さない。亭主の声には陰があり、右眉にある刀傷とも相まって、そうとう迫力があつたはずだが、怯んだ様子はまるでない。それにいささか苛立つたらしく、亭主が剣呑に見返した。「やろうつてのかよ。言つておくが、女みたいな面でも容赦はしないぜ。生憎こつちも急用なんぞでな」

「ここから先は、立ち入り禁止だ」

言うなり、長髪が亭主の腕をねじ上げた。

「——よ、よせっ！ おい！」

前のめりに体を折つて、亭主はうめく。ぎりぎり腕をひねり上げつつ、長髪は表情一つ変えるでもない。その手には相当な力がこめられているらしく、亭主の額に脂汗が浮かんだ。「よせ、腕が折れる——おい、放せ！ よせったら！」

「や、やめて！ その手をお放しよ！ デジデリオはあたしらの友達なんだよっ！」

女将が慌てて取りついた。長髪の傭兵が怪訝そうに眉をひそめた。女将の取り成しをしばし眺めて、ようやくその手を突き放す。ぶっきらぼうに顎をしゃくつた。「あんたらが友人だという証拠は」

女将は面食らってたじろいだ。「そ、そんなものはないよ。でも、デジデリオは友達で、いつも、うちの店に入り浸って——」

「お友達、ね」

小馬鹿にしたように鼻先で嘲笑い、長髪は女将を一瞥し、いわくありげに目をすがめた。「バード風情が友達か。あの人らしいが。」

——まあ、いい」

廊下の先を顎で指し、薄茶の髪をひるがえす。ついて来い、と言っているらしい。

はっ、とエレーンは我に返り、うずくまった亭主に駆け寄った。

「お、おじさん！ 腕、大丈夫？」

「——お、おつかしいな。あんな女みたいな奴に、この俺が？」

ひねられた腕をさすりつつ、亭主は首をひねっている。ちら、と女将が目を向けて、腕を組んで嘆息した。「腕が落ちたんじゃないのかい？ あんたもヤキが回ったね」

すっかり面目を潰されて、亭主はばつ悪そうに目をそらした。苦々しげな舌打ちで、長髪の背中を睨めつける。

「なんて野郎だ女男が！ デジデリオの奴、部下の躰けがなつてねえぜ。会ったら文句を言つてやる。ま、それはそうと——」

傍らのエレーンを振り返り、長髪に向けて促すように顎をしゃくする。

「案内する気はあるようだな。さ、行こうか、奥方様」

長髪の傭兵は、廊下の奥へと歩いていった。もう、こちらを振り向きもしない。はぐれてはならじ、と三人は急いで後を追った。

交渉2

「丁重にお断りしたはずだがな。俺たちは力になれないと」

亭主セヴィランにつめ寄られ、統領代理は面倒そうに溜息をついた。彼の言い分はこうだった。

「俺たちは所詮よそ者だ。どこが土地を治めようが、俺たちには関係ないね」

交渉は難航した。亭主が働きかけてはくれたのだが、統領代理は頑として、やはり首を縦には振らない。

今回案内されたのは、先ほどの小綺麗な応接室ではなく、紫煙がうつすら立ちこめる大勢が詰めた部屋だった。乱雑に置かれた丸卓と椅子に、数十人もの傭兵が荒んだ様子でたむろしている。ある者は卓に土足のままで足を投げ、ある者はもたれた椅子に腕をかけ、又ある者は隣の者と雑談し――森の底を這う白霧のように低く煙るざわめきは、さながら実戦部隊の待機所といった趣きだ。そのいずれもが物珍しげに目をすがめ、押しかけてきた珍客に冷やかしの視線を向けている。

馴染みのない、ざらついた物々しさに、エレーンは臆し、戸惑った。ここへは「遊民」に助力を乞いにきたはずだった。だが、ここにいる彼らは「遊民」のイメージとはほど遠い。確かに道中、ここに来るまでの建物の外には、長髪をくくった道化師だの、薄絹の衣装の踊り子だの、看板や太鼓を運搬する軽い風体の若者だのと、いかにもそれらしい「遊民」たちが大勢たむろしていたのだが。

今も窓ガラスの向こうでは、いわゆる「遊民」の天幕群が気だるく西日を浴びている。そこにひしめく面々も、日々に倦んだような無表情で、怠惰の衣をまとっている。この建物の中だけが異質だった。建物の内と外では異なる空気が流れている、そんな感じた。

案内してきた長髪の男は、窓辺でたむろしていた一団にまじった。陽のあたる窓辺にいるためか、目を引く蓬髪のたくましい男が一人

まじっているからか、そこだけ他から浮いて見える。

亭主の説得は続いている。だが、旗色は依然として思わしくない。軍は刻々と近づいてくる――エレーンはたまらず割りこんだ。だが、「ま、確かに役に立つ戦力だよな、俺たちは。街でのうのうとしているボンクラなども足元にも及ばねえくらいにだ。実際、シャンバールの戦場なんかじゃ、俺らはいつでも引つ張りだこたぜ。なんでかわるか奥方様。俺たちなら大抵の兵はねじ伏せられるし、例え討ち死にしたところで、後腐れがねえからさ。要するに使い捨てにするには都合がいい駒だつて話だ」

話のオチに苦笑いしながら、傭兵たちは白けた顔で卓に戻る。おのおの再び雑談を始めた。明らかに気のない素振りだ。だが、そっぽを向かれたら一巻の終わり。

エレーンは焦燥に駆られて考えを巡らせ、ふと、あの話に行きついた。以前ダドリーから聞いた話、街と「遊民」との関係に。彼らに視線を振りむけた。

「ねえ、聞いたわ。ここが――このノースカレリアが、あなた達の故郷だつて！」

室内のざわめきがピタリとやみ、部屋が唐突に静まり返った。馬鹿話をしてせせら笑っていた傭兵たちが、眉をひそめて振り返る。亭主が驚いた顔で振りむいた。「お、おい！ あんた、その話は――」

「だったら土地の人も同然じゃない。同じ故郷を持つ仲間じゃない！ ね、みんな。そうでしょう」

慌てた制止を振りきって、エレーンは強引に言い募る。

成り行きを見守っていたどくろ亭の女将が、たまりかねたように隣の亭主と目を合わせた。騒がしかった今しがたとは打って変わり、室内は不気味に静まっている。全ての者が動きを止め、空気がピンと張りつめている。

予期せず皆から注視され、エレーンは豹変ぶりにたじろいだ。雲行きが奇妙だったが、やっと食らいついた感触があるのだ。ここで

好機をのがすわけにはいかない。ためらいを思いきり、勢いこんで畳みかけた。

「ね？ だったら、少しくらい力を貸してくれても——！」

「——仲間！ 仲間、ね」

冷やかな声が返ってきた。茶化するような反応に、エレーンは面食らって振り返る。声の主は中央に陣取った中年の傭兵だ。彼は椅子の背にふんぞり返り、皮肉な笑みで頬をゆがめた。

「いいねえ。いい響きだ。そんな偽善的な言葉を聞くと、背筋がゾクゾクしてくるぜ」

くつくつ笑って腕を組み、大仰な仕草で感慨深げにうなずいている。顔を上げざま、鋭く視線を振り向けた。

「だったら、少しばかり毛並みが変わっていただけで、街から追いつ出すのが仲間なのかよ！ よってたかつて迫害するのが、仲間のすることだったのかよ！——あーあー、ありがたくって泣けてくるぜ。ためえらで勝手に追い出しておいて、そっちの都合のいい時にだけ、仲間扱いして下さるたあなあ！」

「——で、でもね、今は緊急事態よ」

突然の剣幕にたじろぎながらも、エレーンも必死で食い下がる。

「ご、ごめん。あたし、そっちの話はよくわかんないけど、でも、このままにしたら、デイルが街に攻めてきて、街そのものがなくなっちゃうわ。だからね、昔の遺恨はおいという——あ、ううん、これを機にいつそ水に流しましょうよ。だって、今こそ一致団結して各自の役割を果たす時よ。皆が一つにならないと、危機は乗り越えられないわ。みんなで街を守——」

「まったく大したペテン師だ！ ぺらぺらとよく回る口だぜ」

「聞いて！ あたしは不在の夫から、市民の命を預かっているの。街を荒らされるわけにはいかないの。だからお願い、力を貸して！」

「やれやれ。とんだ茶番だぜ。あんたの旦那も勝手放題ぬかしていたが、そんなに下手な交渉はしなかったぜ」

ギロリと憎々しげに中年が凄んだ。

「他人をコケにするのも、たいがいにしるや。とつとと帰りな。怪我しねえ内によ。やっぱり所詮はメイドあがり、高がしれてるってことだよな」

「——それが、なに」

むっ、とエレーンは顔をあげた。冷ややかに見ている傭兵たちに、やおら視線を巡らせる。

「そうよ、あたしはメイドあがりよ。だったら、それがなんだったわけ？ あんた達が遊民だから、だから盾に使うんだろうですって？——はん！ 冗談じゃないわ！ 甘つれたことぬかしてんじやないわよ！」

叩き返すように啖呵をきられて、椅子にふんぞり返った中年が、いや、部屋にたむろす傭兵全てが眉をひそめて見返した。エレーンは真っ向から睨めつける。

「あたしは身内と思えばこそ、こうしてお願いにきているの！ こんなせつぱつまった大事な時に、信用できない赤の他人に助力を求める馬鹿はいないわ！」

「——こ、このアマ、調子に乗りやがって！」

別の拳がわなわな震える。顔を振りあげ、男が吠えた。

「適当なことをぬかしやがって！ どうせ、この場だけ丸め込みりやいいって肚^{はら}なんだろうが！ 見え透いてんだよ、てめえの薄汚ねえ魂胆は！」

「いつまで駄々をこねてりや気が済むの」

「——あ？」

「いつまで拗ねてりや気が済むのかって訊いてんのよ！ そんなこと言っつていじけていたら、いつまでたっても、どこにも道なんか拓けやしないわ！」

男が拳を握りしめた。「小娘風情が偉そうに！ 土地を追われた苦労なんぞ、これっぽっちも知らねえくせに——どうせ俺らは遊民なんだよ！ てめえらが蔑んで追い出した——」

「なんだってのよ！ それが！」

それに倍する声量で、エレーンはぴしやりと言い放った。一同の顔に目を据える。

「いつまで泣きごと言ってるつもり！ 甘ったれてんじゃないわよ！ 逃げんじゃないわよ！ 人の存在に貴賤なんかないわ！」

窓から、そよ風が吹きこんだ。

大部屋の卓のそこで、紫煙だけがゆれている。壁一面の腰窓から、夏陽がじんわり降りそそぎ、白茶けた木板の床に、窓格子の影が落ちている。

「——そんなおとぎ話は、そこらのガキにでも言ってやれや。その手の奇麗事に興味はねえよ」

やがて、窓際に据えた卓の男が、目をそらして吐き捨てた。思わぬ反応にいささか慌て、エレーンは男に目を向ける。「き、奇麗事なんかじゃ——」

「もし！」

男が声を荒げて遮った。

「もし、あんたの言うように、人に貴賤がないんなら、どうして街の連中は、俺たちの仲間を追い出した。事あるごとに”あいの子”と蔑む！ そんな寝言は聞きたくもないね。俺たちはもう——」

「そんなことは言わせない」

エレーンの低い呟きに、室内全ての人間が訝しげに目を向ける。

エレーンは決然と畳みかけた。

「誰にも、そんなこと言わせない！ 何があっても、あたしが守るわ！」

一同が拍子抜けして見返した。

「……守るだア？」

やがて、哀れむように室内がざわめき、卓の方々から失笑が漏れる。

「そいつはいい。そりゃあ、頼もしい限りだな。あんたがその手で俺らを守ってくれるってか」

まぜっ返す物言いが、不意に激しい憤りに変わった。

「ふざけるな！ 小娘風情に一体何ができるってんだ！ そもそも、なんだって、無関係な他人が偉そうに——！」

「あんた達のことはあたしが守る！ 約束するわ！」

罵声に更なる大声で、エレーンも負けじと言い募った。

「約束するわ！ あたし達は家族よっ！」

シン、と大部屋が静まり返った。

傭兵たちは腑に落ちない面持ちで、互いの顔を盗み見ている。かんばんしからぬ反応だ。エレーンは焦れて拳を握った。

「そうよ家族よ！——なによ、なんか文句あるっ？ あたしなんかが家族じゃ嫌だってのっ！」

手近な胸倉むんずとつかんで、ぶんぶん力任せに揺さぶってみる。こうなりや破れかぶれた。

つめ寄られた若い男が、勢いに押されて立ちあがった。たじろいだような困った顔つき。彼の反応を見るまでもなく、熱意が空回りしているのは明らかだった。声が全く届いていない——砂を噛むような虚しい思いで、エレーンは声を震わせ、うつむいた。「家族になってよ。お願い、あたしを助けてよ……お願い、だから……」

すがった男は辟易と、後ろ頭を掻いている。統領代理はソファーに片肘をついて眺めていたが、困った男に指示を乞われ、溜息まじりに立ちあがった。

「兵は出せない。お引き取り願ひましょうか」

「——どうしてよ！」

男をすぐさま放り出し、エレーンは統領代理へ向かう。

「こんなに言ってもわかんないの！ このわからんちんっ！」

黙って見ていたどくろ亭の主が、見かねたように腕を組んだ。「おい、なんとかしてやれよ。時間がないんだ。お前になら、できるだろうが」

統領代理は肩をすくめた。

「なんと言われようとも、出せるような兵はない」

「嘘をつくなよ。お前らがシャンボールで荒稼ぎしているのは、こ

ちとら先刻承知だぜ。そもそもそれなら、ここにいるこいつらはな
んだってんだ。どう見たって、本職の傭兵だろうが」

「いや、本当じゃないんだ。手駒はここにいるだけで、後はあらかた
旦那の方に貸しちまったからな」

「旦那？」

視線で説明を促され、統領代理は嘆息した。「――これは内緒の
話なんだがな」とこちるように前において、観念したように腕を組む。
「商都に行くから兵をよこせ、と領主が突然乗りこんできてな。兵
はみーんなカレリアだ」

「――ダ、ダドリーがつ！」

エレーンは瞠目して泡をくった。無論そんな話は聞いていない。
失踪していたダドリーがデイルの捕虜になつていた事にも驚かさ
れたが、よもや、そんな勇ましい真似まで、ちゃっかりしていよう
とは……。

統領代理は額に手をあて、つくづくというように嘆息した。

「まったく。どうしたらいいんだろうねえ。旦那はカレリアを援護
に行くから兵をくれと言うし、奥方は奥方で、これからデイルに
楯突くから兵を出せと言う。まったく、なんて夫婦だ、我がままな」

どくる亭の主は談判の姿勢で腕組みしたまま、ぽかんと口をあけ
ている。しばし、そのまま呆気にとられ、不敵な笑いを頬に浮かべ
た。「へえ、お前らが領主に兵を貸してやったってのかよ。デジデ
リオ、お前、何を企んでいる」

「別に何も企んじやいないさ。俺たちはいつだって友好的だ、そう
だろう？ 街の皆さま方と上手くやるつもりは常にあるさ」

統領代理はかつたるそうに肩をすくめた。亭主は素っ気なく畳み
かける。「無料^{ただ}じゃないんだろ。条件は」

言葉につまったように軽口をつぐみ、統領代理は渋々亭主に目を
向けた。「……《影切の森》の、居住権」

「影切の森？ あんなもの手に入れて、どうするんだ。木こりにで
もなるのかよ」

「決まっているだろ、住むんだよ。樹海を切り拓いて集落をつくつて。近頃、人数が増えて手狭なんだ、色々と」

「それだけか？」

「もちろんだ」

いかにも心外そうに、統領代理はうなずいた。

「町で暮らすお前なんかには、ピンとこない話だろうが、俺たちには切実でね。一つ所に定住できるってだけでも、ありがたいさ。病人や年寄りに移動生活は厳しいからな。まあ、そういうわけだから、淡々と話を締めくくり、招かれざる客へと目を向ける。」

「わかつたろ。この有様じゃ、どうにもならない。古くからの友の頼みだ、できれば聞いてやりたいが――」

近くの席の屈強な男に顎をしゃくつた。

「さ、奥方様はお帰りだ。丁重に送ってさしあげて」

指名の男が席を立った。つかつか歩いて、エレーンの左の腕をとる。ぎよつとエレーンは身を引いた。

「は、放してよっ！ 話はまだ終ってないわ！」

だが、無遠慮なその手は構わない。エレーンは暴れて身をよじり、卓の面々を指でさす。「いいわよ、ここにいる人たちで！ この人たち、あたしに貸してよ！ ほ、ほら、いっぱいいるし、みんな、とっても強そうじゃない！」

さつさと追い出せ、と統領代理が手を振った。両手を振り回して抵抗するも、男にはまるで歯が立たない。今にもつまみ出されてしまいそうだ。

「おい！ 手荒な真似はよせ！」

亭主が慌てて、制止すべく手を伸ばす。卓についていた傭兵たちが機敏な動作で立ちあがった。客の元へと大股で群がり、二人はまたたく間に一団に吞まれる。

二人は懸命に抗った。だが、屈強な体で壁を作られ、なだめるように押し返される。吞まれた渦中で揉まれつつ、亭主が苛立たしげに目を向けた。

「おい！ デジデリオ！ こいつらをやめさせろよ！」

揉みあいを始めた人垣に、女将が驚いて駆け寄った。「こら！ あんたたち！ うちの人に何するんだい！ さっさと放さないと承知しないよっ！」

ねめつけて威嚇し、服をつかんで力任せにひっぱり戻す。腕に取りつかれた男の一人が、うるさげに女将を引きはがした。「バード風情は引っこんでな。大人しくしないと怪我するぜ」

肩を手荒く突き飛ばす。転んだ床で尻もちをついて、女将がまなじり吊りあげた。

「何すんだい！ ロムだかなんだか知らないけど、何をしてもいいってわけじゃないんだからね！」

うるさそうに男が動いて、すぐさま女将を引つ立てた。

拘束の輪から抜け出そうと、三人それぞれに足を踏んばり、手を振り回して抵抗した。だが、元より彼らの敵ではなかった。赤子の手をひねるが如くに部屋の出口に引きずられる。

「——いくじなしっ！」

押し寄せる周囲をせわしく見まわし、歯がゆい思いでエレーンは叫んだ。暴れて髪を振り乱し、せめて一同を睨めつける。

「人前に出るのがそんなに怖いの！ 陽の当たるところに出るのがそんなに怖いの！——ちよっと！ なんとか言いなさいよ！ いつまでそうやって殻に閉じこもっている気なの！」

「ほら、もういい加減にしときな、ねーちゃん」

無残な有様を見かねてか、エレーンを引きずっていた屈強な男があやすように顔を覗いた。「もう、これで終わりにしようや。俺らだって手荒な真似はしたかねえんだよ。噛みついてても無駄だってことは、あんたにもよくわかったろう」

それは拍子抜けするほど穏やかな口調だった。だが、部屋から追い出そうとしていることには変わりない。やがて、ドアが開けられて、男たちの無造作な手が、廊下へ客を引きずり出す。

「いやよ！ あたしは帰らない！ 帰らないいー！ 帰らないって

「ばっ！」

必死で壁にへばりつき、エレーンは声を張りあげた。

「お願い！ あたしと一緒に戦ってよ！ デイールはもう、すぐそこにまで来てるのよっ！」

「俺が行く」

日の当たる窓辺から、ぶっきらぼうな声がした。

交渉3

平然としていた柳眉をひそめて、統領代理が振り向いた。

「……ケネル」

それが彼の名前であるらしかった。声がしたのは、案内の長髪が歩いていった、あの窓辺の一団あたりだ。

黒い髪の青年が腕を組んで眺めていた。年齢は二十代後半といったところか。凜とした黒瞳、癖のない顔立ち、たくましい蓬髪が背後にいる為、ともすれば小柄に見えるが、弱々しい印象はない。

揉み合っていた全員が、たちどころに動きを停めた。ケネルのただの一声で。

女将が忌々しげに腕を払って、そちらの窓辺に憤然と目をやる。その表情が凍りついた。

「ガ、ガーディアン？——どうして、ここに」

人垣の向こうで、亭主が拘束を振り払い、いぶかしげに呼びかけた。「お前、あいつらを知っているのか」

「——あ、いや。別に知り合いつてわけじゃないんだけど、その、我に返って顔をあげ、女将は言いにくそうに口ごもる。エレーンは開け放った窓辺を怪訝に見やった。

四人の男がケネルを取り巻いてたむろしていた。顔を見るなり亭主の腕をひねりあげたあの乱暴な長髪もいる。蓬髪の男のたくましい腕に、青い入れ墨が見てとれた。

「事情はわかった」

ケネルと呼ばれた窓辺の彼が、落ち着いた口調で事もなげに言った。「ちよつと行って、始末してくりゃいいんだろっ」

「隊長が行くなら、俺も行くぜ！」

卓で見ていた傭兵が、弾かれたように立ちあがった。次々同調者が椅子を蹴る。勢い込んで引かれた椅子がガタガタ騒がしく音を立て、大部屋はにわかに騒然とした。

許可を乞う視線で注視され、統領代理は呆気にとられたように絶句した。今や半数が席を立ち、ケネルの言葉に同調していた。着席している者たちも真摯な視線を向けている。

「——いいでしょう」

一同の顔を見渡して、統領代理が向き直った。

「仰せに従いましょう、奥方様」

ぽかん、とエレーンは口を開けた。事態が上手く飲みこめない。

統領代理は降参したように苦笑いした。

「聞いている通り、いわゆる兵はないんだが、あなたにはこの、とっておきのボディーガードをお貸ししよう」

ふと気づいたように視線を巡らせ、男たちに手を振った。それを合図に、屈強な人垣が速やかに離れ、元の卓へと散っていく。いともあっさり拘束を解かれて、エレーンは戸惑って見まわした。「あ、あの、なんでもいきなり、そんなふうには……？」

何やら狐につままれた心持ちだ。たった今まで、つまみ出される寸前だったのに。統領代理が笑みをたたえて両手を広げた。

「あなたは我々を仲間だと言ってくださった。あなたの家族だと言ってくださった。ご覧なさい、彼らの顔を。止めたところで結果は同じだ。あなたに付いていくでしょう」

「……は、はあ」

エレーンはたじろぎ笑いで小首を傾げた。まったく訳がわからない。とってつけたような大仰な台詞。芝居がかったあの身振り。手の平返したようなこの態度。だが、統領代理は澄ました顔だ。

「我々があなたの仲間というなら、同胞の危機を黙って見過ごすわけにはいきませんか。今、彼らがここから動けば、正直、丸腰も同然なんだが——」

諦めたように微笑んで、しなやかな手をさし出した。

「まあ、いい。我らが命運、あなたの手に委ねましょう」

統領代理との話が済むと、エレーンは窓辺へ駆け寄った。

「あ、あのっ！」

意を決して呼びかけると、ケネルが無造作に目を向けた。小柄なのかと思っていたが、期せずして案外上背がある。近くで見ると遠くで見るとでは大違い。後ろにいる蓬髪の迫力がありすぎるのだと気がついた。

窓辺の彼らも身じろいで、各々エレーンに目を向ける。無言の視線に注目され、エレーンは気まずくたじろいだ。恐らくその気はないのだろうが、どうも雰囲気威圧的だ。

「あ、あの、ありがとう。お陰でとっても助かったわ。あ、あの、それで——」

切り出したものの、エレーンは詰まった。五人もいるのに、誰も言葉を返さない。見物されてでもいるようで、そこはかとなく、ばつが悪い。しょっぱなから萎縮するが、なけなしの勇気を奮い起こして、しどもど笑ってケネルを仰いだ。

「あなたがいなかったら、どうなってたか。あたし、どうしていいのか、まるで見当もつかなくて——」

なにぶん初対面の相手であるので、どう話しかけていいやらわからないが、とりあえず小首を傾げて笑ってみた。ぎこちないのはこの際やむなし。

ケネルは無言だ。応答どころか表情さえも崩さない。愛想笑いも何もない。不機嫌なのだろうか。

口をつぐんで反応を待つが、ケネルは腕を組んで眺めたままで、相槌さえも打ってくれない。仕方がないので勝手に続けた。「あ、で、でもね？　あなたのお陰で、あたし、なんとか乗り越えられそうな——」

「さっさと戻れ」

面食らい、エレーンは啞然と絶句する。その顔をやおら見やつて、ケネルが改めて口を開いた。

「あんたの街にさっさと戻れ。いつまで油を売っているつもりだ。あんたには、すべきことがあるだろう」

「すべきこと？ あたしに？」

おうむ返しに復唱し、エレーンは首を傾げて考えた。そうは言われても、とっさに何も思いつかない。警邏には管轄外だと言われたし、義兄の協力も得られなかった。ちなみに、ノースカレリアに軍はない。他に何かあるというのだ。今、自分がすべきこと——。ケネルは落ち着いた声で淡々と続けた。

「領主が不在というのなら、あんたがその代行だろう。往来で泣いている暇なんか、あんたにはもう、ないはずだ。このことを領民に知らせなくていいのか。デイルが攻めてくるんだぞ」

「あつ！——は、はいっ！」

はつと弾かれて背筋を伸ばし、エレーンは慌しく頭を下げた。すぐさま夫妻の元に戻って返す。言われてみればその通り。こんな所で愛想をふりまいている場合じゃない！

「あのっ！ あたし、すぐに戻らないと！」

「ああ、セヴィ、ちょっと残ってくれないか」

統領代理が割り込んだ。戸口に向かいかけたどくる亭の主が、肩越しに声を振り返る。「なんの用だよ、デジデリオ」

「話がある」

笑みを浮かべる統領代理と、怪訝そうな亭主の顔とを、女将は胡散臭げに見比べた。「そうかい？ じゃあ、あんたはゆっくりしておいでよ。あたし達はお先にね。さあ、帰ろう、エレーンちゃん。こうなったら、あたしも及ばずながら力を貸すよ」

「お前もだ、ビビ」

「……あたしも、かい？」

声を裏返して確認し、女将は腑に落ちない表情で、物々しい周囲をたまりかねたように盗み見た。「でも、この子を一人で歩かせるには、ここいら、ちよいと物騒だしさ。話があるなら後で聞くよ。送り届けて戻ってから——」

「なら、護衛をつけよう」

統領代理はにこやかに、だが、にべもなく退けた。「心配いらな

い。責任をもつて屋敷まで送る」

片手を軽くあげた途端、近くにいた男二人が機敏に立ちあがって近づいた。ぽかんと見ていたエレーンの腕を、両側からそつなく取る。「さ、参りましょうか、奥方様」

「え？ ちよつと、あの！——お、おじさん？」

エレーンは慌てて助けを乞うた。呆氣にとられて見ていたどくろ亭の主が、統領代理を一瞥する。軽く息をついて気まずそうに笑った。「ああ、悪いな。その人たちと戻ってくれるか。なんだか用があるらしいからさ。後でビビと顔を出すよ」

「……あ、はい。それじゃあ、後でまた」

さりげなく抗っていたエレーンは、やむなくぎこちなく頷いた。心細かったが、本人に言われてしまつては仕方がない。

肩越しに夫妻を振りむき振りむき、追い出されるようにして部屋を出た。何気ない約束が果たされないとは思ひもせず。

協力者たち

「——なんでえ、今のは」

蓬髪の男が目をすがめ、黒々とした無精ひげをさすった。たくましい上腕には、青い入れ墨が彫つてある。年の頃は三十後半、赤いバンダナで額をくくり、脱いだシャツを裸の肩に引っかけている。

「さあ。囲まれちまつて、よく見えなかったが」

四十絡みの短髪の男も、不可解そうに戸口を見た。「確かに妙な按配だったな。今、あの主が何か——」

「大方、威嚇でもしたんだろうさ」

声がぶつきらばうに割りこんだ。エレーン一行を案内してきた、あの長髪の青年だ。やおら革ジャンの腕を組み、戸口に冷ややかに目を向ける。

「一見普通の市民に見えるが、どうしてどうしてそんな生易しいもんじゃない。あのジジイ、傭兵をしていた経験がある。あの目、あんたにも見たろうが。こつちを全員向こうに回してガン飛ばしてきやがった。得物を持たせりや、恐らくあの場の誰より強い」

「それも、遙かにな」

野太い声で、蓬髪が駄目を押すように同意した。思案するように顎をさする。「ありやあ、おめえ、段違いだろう。本気になったら、俺らだつて敵うかどうか」

「代理の友達^{ダチ}だつてのも頷ける。どうも嫌な気がして手出ししねえで連れてきたが、そうしたら案の定、あの有り様だ」

一同が苦りきつていぶかしんでいるのは、今しがた起きた奇異な現象についてだった。統領代理の指示により亭主らを捕らえようとしたところ、二人を封じこめた人垣がだしぬけに外側に飛びのいたのだ。以降、一人として、亭主に近寄ろうとはしなかった。あの戦慣れた傭兵たちがだ。それで結局、代理自ら片をつけた。

扉は沈黙を守っている。今の奇妙な騒動があたかも嘘であるかの

ように。蓬髪が大仰に我が身を抱いた。「ああいう手合いとは関わり合いにはなりたかねえな。背筋が薄ら寒くなるぜ」

「——おもしれージジイ」

場違いに呑気な声がした。

日の当たる窓の手すりに、ひよろりと長身の若者が一人、足をぶらつかせて腰かけていた。目を覆うほどの薄茶の髪が、外光に柔らかに透けている。薄茶色したガラスのように透明な瞳は、窓の外を無関心に眺め、逆手に握った短刀で、手すりを無造作に傷つけている。飄然とした言葉の通りに、単に面白がっているようだ。短髪の男が苦笑いした。「おい、ウオード、吹っかけるなよ。あれは代理のご友人なんだからな」

五人の男が室内にいた。互い呼び合う呼称から、彼ら五人の名前が知れる。短髪の年長者ババ、蓬髪の壮年アドルフアス、端整な面持ちの長髪フアレス、飄然とした若者ウオード。そして、今しがた助力を買ってでた、ケネルと呼ばれる黒髪の青年。

ケネルは口を挟まず聞いていたが、話が一段落したのを見計らい、雑談を打ちきるように口を開いた。「さて、聞いている通りだ。俺は奥方に力を貸す」

「勝算は」

鋭い視線で、蓬髪がすかさず顎をしゃくる。

「ある」

端的に応え、ケネルは視線をめぐらせた。

「デイルの本隊、並びに収奪目的地は商都カレリア、分遣隊の目的は補充兵の確保だ。カレリアには元より兵力が少ない。それを国境守備と商都封鎖に振り分けている。よって、当地への分遣隊の規模では、街を包囲するのが精々だ。つまり、脅して降伏させる胆^{はたら}だろっ」

他人に指示を与え慣れた声だ。四人の視線が集まる中で、ケネルは淡々と説明する。

「デイルの余剰兵力のなさ、目的地が非武装地との条件から推せ

ば、分遣隊は二百やそこらというところだろう。兵の補充はないとみていい。商都を封鎖中のデイルには、本隊の主力を割いてまでクレストにかまける余裕はない。又、任地を離脱しても支障がないなら、分遣隊の陣容は弱卒だろう。分遣隊を二百、当方の残留人員を三十として、七倍近い兵力差だが、ともに当たっても勝算はある。実戦経験のあるカレリアの兵は、かつてシャンバールの進駐軍と戦った国境軍くらいのもので、更にその弱卒というなら、相手は素人も同然だ」

「乗った！」

腕組みで聞いていた目をあげて、アドルフアスが決然と顎を引いた。

「俺は行くぜ。あの奥方に協力する。あれじゃあ、あんまり不憫じゃねえかよ。お前らだって見たろうが。あんなに駆けずり回って可哀相によお。他でもない俺達を、あの娘は頼ってきたんだぜ。それを見捨てたとあっちゃ男がすたる。そうだろ、パパ！」

野太い声で賛同を求め、隣のパパに目を向ける。パパは頬をゆるめて苦笑いした。「このところ、いささか運動不足だからな。解消するにはもってこいか。もっとも、退屈しのぎで出向くにしては、いささか大掛かりの嫌いはあるがな。この平和なカレリアでは、この手の転覆劇は例がない。しくじれば一巻の終わりだから、デイルとしても必死だろう」

思慮深そうな茶色の瞳を、窓辺に座った若者に向ける。「どうする、ウオード。お前もくるか」

ひよる長い片足をぶらつかせ、ウオードは外を見たままだ。無頓着にあくびした。「……いいよー。暇だしー」

大して興味はなさそうで、逆手のナイフの切っ先は、依然として手すりに切りつけている。

「よし決まりだ！ そうこなくっちゃな！」

ごつい拳を手の平で叩いて、アドルフアスが不敵に笑った。

「そうと決まれば行動開始だ。あの不憫な奥方を、総力あげて助け

てやろうぜ。なあに、カレリアのカカシなんぞ、わけはねえ」

大口開けて豪快に笑う。ふと気づいたように口をつぐみ、視線を窓辺に振り向けた。

「――あ、ああ。お前も乗るだろ、ファレス」

鼻白んだように調子を落とし、不精ひげの頬をばつ悪そうに掻く。窓に腕組みでもたれたままで口出しせぬ者がいたことに、今更ながら気づいたらしい。ファレスがたるそうに振り向いて、一同をやら見まわした。

「不参加だ」

つくづく呆れた顔をする。「頭を冷やせ。ただ働きだろ。なんでそんな面倒事に首を突っこまなけりやならねえんだ。アド、他人のことは放っておけよ。こつちには関係ねえだろう」

「――たく。しけたこと言ってんじゃねえよ。お前に男気はねえのかよ。見たろうが、あの屋敷の裏道だよ」

「不参加だ」

にべなくファレスははねつける。

「今回の任務は代理の護衛で、女の手先になる事じゃない。ディーの弱卒に恨みがあるってわけでもなし」

「――だが、ファレスよ」

「そんなにやりたきや勝手にやれ。火傷したって知らねえからな」
「わかった」

声がつぱりと割りこんだ。黙ってやり取りを聞いていたケネルだ。たるそうに振り向いたファレスの顔に、ケネルは淡々と目を向ける。

「無理強いはいしない。どうせ大した戦でもない。そもそも仕事の枠外だ」

「そういうことだ」

もたれた窓から背を起こし、ファレスがさばさは踏み出した。

「ま、精々気張れや、正義の味方さん方。じゃあな」

薄茶のしなやかな長髪が、人けない廊下へ素っ気なく出ていく。

木目の扉が、パタリ、と閉まった。

「——まゝた女の所かよ。相変わらず愛想がないねえ」

持て余したように嘆息し、アドルフアスが黒い蓬髪を掻いた。非協力的なファレスの態度を咎めようとする者はない。周囲から浮いた素っ気なさも、毎度のことであるようだ。

ファレスの退室を淡々と見送り、ケネルが気づいたように振り向いた。

「ジャックはどうした」

腕組みで窓辺にもたれていたバパが、苦笑いして首を振った。「さあ、どこへ行ったものやらな。あれも、よくわからん男だから」

「知るわけないだろー、ジャックのいる場所なんか」

窓の外を眺めたままで、ウォードが興味なさげに呟いた。

摩擦 1

轍わだちの刻まれた黒土の地面に、光がまだらにちらついていた。昼さがりの街道筋。高木の枝で小鳥はさえずり、人影がゆつたり、木漏れ日の日陰を行き交っている。荷馬車、商人、散策中の観光客。デールと一戦交えるとなれば、街へと続くこの辺りが主戦場になると思われた。件の天幕群の建物では、街に迫りくる敵軍に備えて傭兵たち^{わだち}がたむろしている。

午後の静寂をだしぬけに破って、バパが待機所に駆け込んできた。「おい、ケネル、話が違うぞ！ 支隊は既に二日の距離だ。しかも脅しにしては、かなりの数だ。百や二百なんてもんじゃない。軽く一千は越えている」

「確かか、それは！」

知らせに驚き、蓬髪のアドルファスが振り返る。「ここは平和なカレリアだぞ。なんで、そんなに兵があるんだ！」

「——知るかよ、俺が」

嘆息して一瞥し、バパは身じろいで肩をすくめた。「現にあるんだから、仕方がないだろ」

「待機していた、というわけか」

ケネルはおもむろに腕を組み、いぶかしげに眉をひそめる。

「聞いていた話と大分違うな。だが、本隊は籠城戦の最中だ。国境は封鎖したにせよ、防衛部隊は動かせない。商都の西門と南の正門、街壁外周に配すとなれば、膨大な兵員が必要だ。要員確保に汲々としている状態で、非武装地の併合ごうごうごときに兵を費やせるはずはないんだが」

アドルファスが忌々しげに舌打ちした。

「どうすんだ。こっちは、たったの三十だぜ。これじゃあ渡り合いようがねえじゃねえかよ」

気楽に下見に出向いたバパが、急ぎ仲間にもたらしたのは衝撃的

な報だった。二百と見込んだ敵陣は、開けてみれば一千超。対する手勢はわずかに三十。使者が本陣に立ちもどり、指示を仰いで開戦となれば、通常十日以上はかかるはずだが、交渉決裂から開戦まで、わずかに二日と切迫している。

ケネルは渋い顔で顎をさする。「――まずいな、本気が。端からクレストを潰す気だ」

「いーじゃん、敵が大勢いたって。どうせ、結局同じことだしー」
声がのんびり割って入った。ウォードは窓辺に腰かけて、相変わらず手すりを傷つけている。全く気にしていないようだ。それを腕組みで眺めやり、バパが長に目を向けた。

「どうする、ケネル。千を超える兵隊じゃ、とても食い止めきれないぜ。数で押されたら一巻の終わりだ。占拠は時間の問題だろう」

「手勢は三十、住民の動員は論外か。バードを使うしか手はないな」
「――あー、丁度いいねー。馬鹿騒ぎしに集まってるし」

事もなげにウォードが割りこむ。バパは肩をすくめて同意を示し、そつなく茶々を受け流す。ケネルの思案顔に目を向けた。「だが、連中、果たして協力するかな」

「させるしかないだろう」

「その前に！　一つ、でっかい問題があるぜ」

かったるような銅鑼声が、堪りかねたように待ったをかけた。バパとケネルはアドルフアスに目を向ける。その顔を交互に見やって、アドルフアスは窓の外に目を向けた。

「バードを駆りだす事それ自体には、俺もなんら異存はねえ。逃げ足だけは速ええから、大して実害はなかるうし、そこそこの働きも期待できる。だが、肝心なことを忘れちゃいねえか。ここはあのノースカレリアだぜ」

ケネルがわずか眉をひそめた。言わんとする意味を察したようだ。アドルフアスは苦々しげに続ける。「連中の武装を、住民が果たして認めるかどうか。なにせ、ここは因縁の地だからな」

「――認めるだろう。そうしなければ、この街は終わりだ」

一拍置いて、ケネルは応じた。返答が遅れたわずかなその間が、検討するも考慮に値せずとして切り捨てた要因があることを示している。だが、アドルフアスは釈然としない面持ちだ。ケネルは構わず、西方に広がる穏やかな街並みを眺めやった。

「介入する必要はない。むしろ仲裁に乗り出せば、騒ぎが余計にでかくなる。住民の説得は奥方の仕事だ。あの威勢の良さなら、まあ、どうにか乗りきるだろう」

「——だがよ」

アドルフアスは依然として納得のいきかねる面持ちだ。西の街並みを眩しそうに見やって、無精髭の顎を片手でさすった。「大丈夫なのかよ、あんなひ弱なねえちゃん一人で。ディールとクレストの挟み撃ちにでも遭ってみろ。こっちは目も当てられねえぞ」

「心配ない」

ケネルは口端で薄く笑った。

「ああ見えて、あの女は馬鹿じゃない。使者の脅迫に屈することなく、武力の圧力に臆することなく、現時点で一番分のあるここへ来たというんだからな。あれが気弱な女なら、軍勢急襲の勢いに押されて、あえなく敵に降伏している。そうなれば、今頃は他領に占拠されるか、妙な面子にこだわって玉碎するか、していたところだ」

一同が眺める方角には、貴族らの住まう貴族街があった。彼女のいるクレスト邸は、その一番奥まった西の断崖に面している。

「とにかく」

話をおもむろに切りあげて、ケネルは一同を振り向いた。

「状況が変わった。あの女を呼べ」

摩擦 2

麗らかな夏の昼下がり。領邸の奥まった広い客間で、エレーンはやきもき手を握り、壁際で様子を窺っていた。

フロック・コートの貴族らが憚然と眉をひそめていた。この召集された十余名は「ノースカレリア貴族院」の構成員、いわば、施政権限を有する実力者たちである。いずれも椅子の肘かけにステッキを立てかけ、染み一つない白手袋に、筒型のトップハットという正装だ。

椅子の背もたれにふんぞり返り、或いは肘かけに頬杖をついた貴族らは、現状を説明するケネルの顔を冷ややかに、胡散臭げに眺めていた。一様に不愉快そうな面持ちだ。ケネルの粗野な服装が見慣れぬことも不興を買った一因だろうが、理由は何もそればかりではあるまい。腹立たしげなどの顔にも、不快と嫌悪があらさまだ。曰く、

「こんな怪しげな下賤の者が、何故、差し出がましく指示をするのか」

「こんな薄汚れた傭兵風情が、何故、偉そうに講釈なんぞを垂れるのか」

「使用人あがりのあの女に、何故、呼びつけられねばならんのか」

由緒正しきこの「私」が。

要するに、話の内容以前に、己が不当に軽んじられているように気に入らない、というわけである。

ケネルは彼ら貴族に対して、一切敬意を払わなかった。おもねるところか愛想笑いさえ浮かべるでもない。いつそぶつきらばうなまでに現況のみを説明し、まして戦の素人の貴族らに意見など求めはしない。現時点での状況を伝え、苦戦になるだろう予測を伝えて、緊急時の対処法を一方的に指示するのみだ。その素っ気なくも実務的な態度が、追従に慣れた貴族らの反感を買ったことは火を見るよ

り明らかだった。白けた空気の立ちこめる中、前に立ったケネルだけが、淡々と淀みなく話している。

大窓の外の青い空に、雲がぼっかり浮いていた。屋敷脇の植栽の緑が、そよ風に梢をゆらしている。貴族らは冷ややかに口を閉ざして、憮然とケネルを値踏みしている。質問を差し挟むというのでもなければ、意見を述べようとするでもない。ただただ仏頂面の沈黙で、無言の抗議を突きつけるばかりだ。

「――要点は以上だ」

一通りの説明を終え、ケネルは視線を巡らせた。

「可能な限り、攻撃は外で食い止めるが、敵はいかんせん数が多い。万一の侵攻に備えて座員に街を巡回させるが、その際、武器の携行を容認しておいてもらいたい。連中だって命は惜しい。素手でやり合えと言われれば、さすがに協力はしないだろう」

「わかった。携行を認めるわ！」

横で控えたエレーンは、ここぞとばかりに了解した。「それじゃあ、あたし、すぐに手配を――」

「お待ちください、奥方様」

初老の貴族が血相変えてさえぎった。こほんと小さく咳払いし、冷ややかな目をおもむろに向ける。「それはいささか早計かと」

「そうです。ご再考ください、奥方様」

これを機に、貴族たちが堰を切ったように反論した。

「相手はあの遊民ですぞ。武装するなど以ての外」

「武器など持たせたら、何を始めるか知れたものでは――」

立ち上がりんばかりにまくして、一斉に不平を打ち鳴らす。

「それなら、俺たちはこの件から降りる。街と心中したけりや勝手にしろ」

ぶつきらぼうに言い捨てて、ケネルは出口に踵を返す。

「待つて、ケネル！」

エレーンは慌てて駆け寄った。ケネルが足を止め、大きな嘆息で振り返る。肩越しに見やった黒瞳の思わぬ冷ややかさにたじろぎな

がらも、エレーンはおろおろ窺った。「あ、あの、ダドリーが前に言つてたの。いつか、あなた達に戻ってきてもらうつて」

前列左の貴族の一人が、嘆かわしげに首を振った。「奥方様、今はそのような夢物語を語っている場合では」

「夢なんかじゃないわよ！」

まなじり決して、エレーンはそのちらを振り返る。

「みんなで街を創っていくのよ！　一緒にこの街を創っていくの！　だつて、ダドリーがそう言つて——」

「しかし、奥方様。それとこれとは話が——」

「同じよ！——だから、彼らもこの街の一員だつて言つてゐるのよつ！　たく、わかんない人達ねつ！　ケネル、武器の携行を認めるわ！」

「しかし、相手は遊民ですぞ。信用なりません！」

「そうですとも！　そんな無謀な真似をして、この機に乗じて占拠でもされたら、どうなさるおつもりです。そんな失態は目も当てられませんか！」

又もやかましく言い立てる。今までかけらも喋らなかつたのに、たちまち結束したようだ。エレーンは苛立つて拳を握つた。

「——だからつ！　いい加減にしなさいよ！　いつまで寝ぼけたこと言つてんの！　だいたい心が狭いわよ。いつまでもいつまでも愚にもつかない見栄はつて！　これでディールに負けちゃったら、一体どうしてくれんのよつ！」

ケネルは油彩画のかかる白い壁に寄りかかり、呆れたように嘆息している。それも道理だ。散々説明させられて、拳句この有り様というのだから。

頑固な貴族と喧々諤々張り合いながらも、エレーンはおどかしい思いで唇を噛んだ。ケネルが現状を説明し、自分が勢い込んで承諾し、貴族が一斉反発する。やむなくケネルが説明し、それを自分が後押しし、貴族が一斉反発する——これでは一向に埒があかない。だが、現にこうしている間にも、敵は着実に近づいてくるのだ。自

力で排除できない以上、ケネルの助力を得られなければ、むざむざ降伏するしかない。となれば、所領はすべからく没収され、彼らも当然立ちゆかなくなる——こんなにも自明で簡単な理屈が、この風雅な貴族どもには、なぜ理解できないのか——。

ケネルは壁で腕を組み、実のない言い争いを無表情に眺めている。だが、果てなく続く小競り合いに、ついに嫌気がさしたらしい、閉口したように嘆息した。

「こっちは、どちらでも構わない。助力は不要と言うのなら、俺たちは一切、手は出さない。早く結論を出してくれ」

エレーンは瞠目して振り向いた。「——信用するわ！　あたし達を助けて！」

「奥方様っ！」

言った傍から、猛反発が湧きおこる。

「——あんた達ねえ！」

エレーンは憤怒の息を吐き出した。

「だったら、あんたには妙案があるわけ？　あんたなら、どうにかできるわけ！」

目の前の貴族を指でさす。

「だったら、あんたがどうにかしてよ！　現にディールは、軍を差し向けてきてるのよ！」

「——そ、それは」

身を乗り出していた前列の貴族が、椅子の背まで後ずさり、困惑顔で目をそらした。集団でいると威勢がいいが、個人攻撃には弱いらしい。すかさずエレーンは次々指を突き立てる。

「だったら、そのあんたはどうよ！　だったら、あんたは！　そっちのあんたは！——どうしたのよ、素晴らしい考えがあるんですよ！　だったら、それを聞かせてよ！」

一同は顔を見合わせて、不承不承口をつぐんだ。突如召集された彼らにすれば、この話は寝耳に水、助言ができるような取り巻きもない。これで代案が出る道理もない。だが、彼らの準備が整うま

で、時が止まってくれるわけではない。ディールは着々と近づいているのだ。怯んだ一同に構うことなく、エレーンは勢い込んで振り向いた。

「信用するわ、ケネル！ あなた達を信用する。だからお願い！力を貸して！」

ケネルが面倒そうに目を向けた。

「だったら、あんたの領民にも、指示に従うように言ってくれ」

壁にもたれた背を起こし、出口に向けて歩き出す。貴族たちには一瞥もくれず、会釈一つするでもない。エレーンは慌てて了解し、両手を振って後を追った。

摩擦 3

「そもそも、あんたが使者を追い返したのが原因じゃないか！」

「そうとも！ 穏便に対処すれば回避できたことだろう！」

「あんたがデイルに楯突かなければ、巻き込まれなくて済んだんだ！ なんて余計な真似を——！」

一斉にがり立てられ、エレーンはたじたじ後ずさった。支持と協力を得る為に、貴族らに次いで住民の代表を呼び集めたのだが、街に配す遊民が武器を携行すると聞くと、やはり良い顔はしなかった。いや、それどころか——

「要するに、あんたのせいだろう！」

「そうだ！ そうだ！ どうしてくれるんだ！」

文句は言っても体裁を気にする貴族より、迫力はよほど凄まじいだが、くじける訳には無論いらない。もじもじ両手を握り締め、エレーンはぎこちなく笑みを作った。

「で、でもね？ ここでデイルに屈したら、みーんな戦場にやられちゃうのよ？ それって、やっぱ、まずいじゃない。それに、そんなことしたら、街だつて乗つとられていいようにされて——」

「遊民に武器なんぞ持たせたら、たちまち街を占拠されるぞ！」

激昂した住民の一人が、口角泡を飛ばして言い募る。「そうしたら、あんた、どうやって責任をとる気だい！」

「……せ、責任？」

エレーンは引きつり笑顔でたじろいだ。

「一体てめえは何様のつもりだ！」

「え？ え？ ナ、ナニサマって、その——」

んなコト、あたしに言つたって！

涙目で一人おろおろする。まさに非難の矢面である。

「遊民なんぞにたぶらかされやがつてよ！」

商店主が舌打ちで立ちあがり、手近な椅子を蹴り飛ばした。振り

向きざまにギロリとすくむ。

「これだから若い女は駄目なんだ！　おう！　領主を出せ！　領主をよ！　あんたみたいな小娘じゃ、話にも何もなりやしねえよ！」

椅子に腕組みでふんぞり返った男が忌々しげに詰問する。「そうだ！　領主はどうしたんだ！　さつさと、ここへ連れてこい！」

「——あ、——い、いや、それはそのお」

エレーンはしどもど左斜め上方に目をそらした。当人は早速、捕虜になっているのだが、用もないのに勝手にトラビアをうつついで、拳句とつ捕まった、などと間抜けでお粗末な顛末をさらせば、業火に油を注ぐこと請け合い……。憤怒に上気した一同の顔を、冷や汗たらたら上目使いでちらと見る。「あ、あのお、ちよっと今、出かけてて——」

「あア？　出かけてるう？」

男が呆れ顔で復唱した。揶揄するように両手を広げて、やゝれやれ、と首を振る。一転、椅子を蹴って立ちあがった。

「何遊んでんだボンクラが！」

住民たちが次々、拳を握って立ちあがる。いずれも激怒の面持ちだ。

エレーンは慌てて後ろの壁まで後ずさった。両手で壁に張りつきながら、あたふた涙目で逃げ場を探す。気色ばんで詰め寄られ、こそこそ抜け出そうとした途端、ぐい、と首根っこつかまれて、輪の中に引っ張り戻された。

「いねえつてのはどういうことだ！　この肝心な時によオ！」

「まったくだぜ！　お陰で、こんなメイドあがりやしやしり出て、勝手な真似をしくさつて！」

「トラビアから北への移動が、いや、本隊のある商都から大陸北端に移動するのに、一体何日かかると思う」

異質な声が割りこんだ。

エレーンを吊るしあげていた一同が、口をつぐんで振り返る。

そよ風吹きこむ開け放った窓辺で、ケネルが腕を組んで眺めてい

た。いぶかしげに注視され、一同に視線を巡らせる。

「商都からここまで、馬を駆って五日の距離。進軍するなら更にかかる。だが、交渉決裂から支隊到着までわずかに三日だ。この意味するところが、あんたらに分かるか」

住人たちは面喰らった。戸惑い顔で、ちらと互いを盗み見る。ケネルは続けた。

「つまり、ディールは、端からクレストを叩く気だ。返答の如何にかかわらず」

「だ、だが、協力するよう、使者が来たと――」

「捨て駒が欲しかったんだろ。合意が成れば、無理に引つ立てるより統率が楽だ、遙かにな」

住民がざわざわめいた。疑わしげな面持ちで互いに顔を見合わせている。

「カレリアには元より兵力が少ない。だが、その点あんたらなら都合だ。初めから数に見込んでいないし、商都陥落にこぎつければ、ここは潰す^{ひは}肚^{はら}だろうからな」

「――な、なんで俺たちが！」

初老の店主が弾かれたように振り向いた。「俺たちは何もしてないぞ！ 何故、潰されなけりやならないんだ！」

「そうとも！ そんな馬鹿な話があるものか！」

「俺たちは無関係だぞ！ ラトキエとディールの戦だろうが！」

「一体俺らが何をした！ ディールを怒らせることなど何一つ――！」

「ディールの首都はトラビアだ」

素っ気なくケネルは遮った。

「ディールが国を統治するなら、ここらは距離があり過ぎる。監視が届かぬ地方の都市を無策のままに放置するのは反乱の芽を育てるようなもの、つまり、危ないからな」

「――そ、そんな――そんな勝手な――」

「商都を落ち延びた連中は、恐らくここノースカレリアに向かう。」

国境はディールが押さえているから、隣国シャンバールには出られない。よって、ラトキ工領家の残党どもは、余所者が混じっても目立たぬ場所に潜伏することになるだろうが、条件に適う都市は限られている。商都をディールが接收すれば、あとはノースカレリアを残すのみ。つまり、反旗を翻す反乱分子はすべからくこの地に結集する。ディールにとっては、ここは物騒なアキレス腱だ。そんな急所をみすみす放置するはずもない」

一同は言葉を失い、息を呑んでわなないている。ケネルは哀れむようにほんのわずか目をすがめ、それらを端から見渡した。

「品行方正なあんたにはケチをつけられる謂れはないんだろうが、この街は既に、ディールの経略に組みこまれてしまっている。つまり、これは対岸の火事なんかじゃないってことだ。ディールに見つかっちまったのが運のつき、そう思っただけで諦めるしかない」

住民たちは呆然と、事もなげに言葉を紡ぐ窓辺の傭兵を注視していた。この手の荒事に慣れているらしく、ケネルに動じた様子は見受けられない。声を荒げるでも、言い包めようと早口になるでもない。理不尽で冷酷な事実のみを、ただ淡々と突きつける。相変わらずの無表情で。腕さえも組んだままで。

「仮に、ディールについたとしても」

衝撃を受け、静まり返った住民の前で、だが、それをいささかも意に介すことなく、ケネルは続ける。

「あんたらは指揮官に召集されて、商都を攻める捨て駒にされる。連中が欲しいのは、あの商都のみだからな」

エレーンを取り囲んだ面々は、戸惑い顔で立ち尽くし、おろおろ顔を見合わせるばかりだ。急にそう言われても、やはり踏ん切りがつかないらしい。やがて、その内の一人が思い切ったように顔をあげた。「だ、だが、そんなことは、やってみなければ分からないんじゃないや——」

「あんたらは奴隷になりたいのか！」

ケネルが苛立ったように一喝した。震えあがって首をすくめた一

同に、改めて視線を巡らせる。

「あんたらは奥方に感謝すべきだ。この判断は賢明だ。ディールの要請を蹴っていなけりや、あんたら今頃どうなっていたと思う。戦と無縁のあんたらの国でも、聞いたことくらいはあるだろう。敗者の辿る惨めな末路を。そうなりや、あんたらだけの問題じゃない。妻子も親も同様だ。こうしたことは一蓮托生だからな」

おもむろに言葉を切り、落ち着いた声を更に強めた。

「いい加減に現実を見る。今となつては否も応もない。逃げ道なんか、どこにもない。まともな暮らしを守りたいなら、人として生き残ろうと思うなら、あんたらはディールを退けなけりやならない。あんたらのその手で。全てを賭けて！」

一同が目を見開いた。事ここに至つて、ようやく、それを自覚したのだ。逃れる道は既がない、ということ。ディール襲来の現実。は夢でもなければ幻でもない。ディールは現に攻めてくるのだ。

静まり返った客間の床に、窓から薄日が差しこんでいた。住民たちは立ちつくし、誰も口をきこうとしない。

「さあ、どうする」

打ちひしがれた一同を見やって、ケネルは淡々と決意を迫った。

「四の五の言わずに覚悟を決める。泣こうがわめこうが、この現実が変わりはしない。採るべき道は二つに一つだ。大ラトキエに楯突いて死ぬか、自分の街を守って死ぬか。どちらを選ぶか、さっさと決めろ」

その頃、件の天幕群の入口では、一座の男たちがざわついていた。「で、そんな滅法危ねえ橋を、なんで俺らが渡んなけりやなんねーわけ？」

長い髪先をいじりつつ、一人が無然とそっぽを向く。「俺らは祭で来たつてだけで、ここの奴には、なんの恩義もねえんだぜ」

「むしろ、どんなひでえ目に遭わされてきたか。あんたら口ムだつ

て知らねえわけでもねえだろうによ」

「それを事もあるうに、守ってやれ、だあ？——は！ 冗談じゃねえよ。俺らがそれをしたとこで、なんの得があるってんだよ」

そうだそうだ、と同意の声が沸き起こる。

一座の反応は芳しくなかった。ここノースカレリアの住人には、かつて彼らを手酷く迫害した過去があるのだ。そして彼我の間には、未だに冷ややかな隔たりがある。そうした経緯を踏まえれば、彼らが街の住人に対して強い反感を抱くのも無理からぬところというものであった。

不貞腐った態度で身じろいで、一人が揶揄するように肩をすくめた。

「第一、碌な武器がねえよ。あんたらロムと違って、俺らは戦争屋じゃねえからな。それとも何か？ そこのシケた果物ナイフで、でっかい軍刀と渡り合えっての」

芸能者たちに取り囲まれた、あのケネルの伝令は、堪りかねたように嘆息した。「それは追々なんとかする。とにかく人員を集めて街に詰める。隊長からの命令だ」

「——でもよお！」

「とにかく！」

伝令が苛立つて遮った。

「代理が力を貸すと約束したんだ。ぐずぐず言わずに協力しろ！」

一方、置き屋の寢床で目覚めたファレスは、探った手が空を切り、うつ伏せた顔を大あくびであげた。寝ぼけまなこで隣を見れば、昨夜買った夜姫がいない。見れば、枕元に置き手紙。

「 ” あなたも逃げて下さいね ” ？ 」

ゆつくりと、声に出して読んでみた。

「 ……おい 」

溜息と共に脱力する。つまり、見捨てられた、ということらしい。

女物の着物ごと、ファレスはのっそり身を起こした。あくび交じりに手を伸ばし、向いの腰窓を引き開ける。ひっそりとした外の様子を片膝立てて窺った。

階下の通りに人影はない。商店はすべからく戸を閉ざし、観光客の姿も見当たらない。街は閑散と寂れていた。宿にも居残りはないようで、館内はひっそりと静まっている。路地裏にあるこの宿は、街の外側に位置するせいか、皆、避難を終えたらしい。

ゆるい風が無人の路地を吹きさらう。ごみ箱の上の猫だけが、無関係な顔でニヤアと鳴いた。

「——たく。仕方がねえな」

舌打ちで頭をぼりぼり搔いて、ファレスは黒いランニングを拾いあげた。裸の腕を無造作に通し、襟ぐりに頭をくぐらせる。昨夜脱ぎ捨てたズボンを履いて、革のベルトを締めあげた。

「行くとするか」

身支度を整え、上着をつかんで、宿の出口へ足を向けた。

ケネルは街道を闊歩していた。仲間は既に集まっている。

「物見櫓をありったけ集めろ」

「——ヤグラだア」

部下に投げたその指示を、アドルフアスが聞き咎めた。たくましい腕を腹で組み、空に突き出たステージを怪訝そうに眺めやる。「だが、ありや祭用の櫓だろ。あんなもの一体どうする気だ」

「この街には街壁がない。西は断崖だから良しとしても、街道に面する東の側面が開けっぴろげというのでは、いくらなんでも護りきれない。櫓で街道を封鎖する」

「だが、東の先は樹海だぜ。足場は悪いが、がら空きだ。それに街の南だって似たようなもんだ。もっとも向こうにや、獣避けの外壁はあるがな。だが、敵がその気になりさえすれば、あんなもんはいくらだって乗り越えられる。街道の左右から回りこめば、簡単に中

に入りこめちまうぜ」

「獣を放せ」

「獣？」

「見世物で使う猛獣だ。ああ、白くてでかいアレがいたな。あれなら、うってつけだ」

「——バクーを？ バクーを森に放す気かよ」

「バードは獣を扱うからな。大方飼慣らして番犬代わりに連れ歩いているだろ」

「だが、連中は人を喰らうぞ。あんな化け物を放したりした日にや、逆にこっちが食われかねえぞ」

「さすがに扱いきれないか」

「無理だろうな、いくら獣使いでも」

「なら、鎖で足でもつないでおくか」

いずれ敵軍が姿を現すであろう街道の先の南方に、ケネルはおもむろに目をやった。

「三十対一千。この途轍もない兵力差をどうにか埋める必要がある。東西の森を塞いでしまえば、敵の侵攻ルートは街道一本に絞りこめる。それなら前線の上限は、狭い道幅が最大だ。——そうだな、街道付近に餌でもまいて、精々姿をちらつかせておけ」

街はにわかに騒然とした。

公邸に呼びつけられた代表が、ディールの襲来を伝えたからだ。

住民たちは驚き、嘆き、憤り、そして、降ってわいた戦に備えた。

飲料水を慌てて蓄え、食糧を備蓄し、避難経路を確認し——。

そして、互いへの不審がぬぐえぬままに、ディールの放った軍勢は、街まで一日の距離に迫っていた。

開戦 1

街に面した街道には、多くの傭兵が手慣れた様子で行き来していた。なだらかに続く街道の先には、敵が大挙して陣取っているはずだが、彼らに動じた様子はない。

「どうする。敵さん、ごまんというぜ」

敵情視察に出ていたバパが、陣を構える街道の北に戻ってきた。思わしくない旗色に、仲間たちから溜息が漏れる。ケネルが詳細を促した。

「総数は」

短髪の年長者は足を踏みかえ、敵が控える街道の南を眺めやる。

「千五百——いや、二千てどこか」

「いいや。精々千二百だ」

落ち着き払った別の声が、横から話に割りこんだ。

「——あれ、副長。来たんすか」

通りがかった傭兵の一人が、木陰でもたれた姿を見咎め、意外そうに首を傾げる。円陣を組んだ一同が、各々身じろぎ、振り向いた。いずれも、いぶかしげな面持ちだ。不参加のはずのあの彼が、突如、現場に現れたからである。

副長と呼ばれた木陰の男は、樹幹にもたれて腕を組み、白けた顔で見物している。呆気にとられて眺めたバパが、顎の先で促した。

「ファレス、お前は降りたはずじゃなかったか？」

構うことなく、長髪の副長は歩み寄る。「正規軍が九百、傭兵が三百」

「傭兵？」

「たく、何を見ていやがる。横着しねえで、数は正確に数えろよ」
じろりとバパを睨みつけ、ファレスは一同を見渡した。

「無邪気に突っ込みや即刻死ぬぞ。連中、助っ人を呼びやがったな」

円陣が顔を見合わせた。面食らったような面持ちだ。ややあつて、蓬髪のアドルファスが身じろいで、一同の困惑を野太い声で代弁した。

「まさか、このカレリアで、傭兵を使うところがあるとはな」

長らく、カレリア国には戦がない。その手の物騒な輩とは、元より無縁の国柄だ。そのカレリアに「傭兵がいる」というのなら、隣国で稼ぐ彼らの同業者に他ならない。

カレリアの隣国シャンバルでは、国を二分する内戦が長きにわたって続いている。今は停戦中ではあるものの、多数の本職の傭兵が荒っぽい戦場を渡り歩いて稼ぎ場としている現状がある。激戦を潜り抜けて生き残った彼らは言わずと知れた戦闘のプロ、平穩な国カレリアの、形ばかりの軍兵などとは比ぶべくもない姑息で抜け目ない猛者揃いだ。つまり、彼らが敵陣営に加わるかどうかで、勝手が大きく違ってくる。戸惑う面々に構うことなく、ファレスは素っ気なく先を続けた。

「敵の本拠地トラビアは、隣国と境を接している。国境を仕切るデイルにすれば、連中を雇い入れるなんぞ造作もねえだろ。現に傭兵がそこにいる。それなら事情はラトキエと同じ、この大番狂わせで、大方、身動きがとれなくなっちまってる」

隣国シャンバルでは、傭兵で稼いでいた面々が現在職にあぶれている。彼らは一時の享楽を求めて、或いは店舗や貨物の用心棒などの職を求めて、活気のある市街地へと大挙して流れる。往来・物流共に盛んな国境付近の盛り場などは、行きつく先の最たる場所、そこにたむろす失業者をデイルが密かに雇い入れることは、そう難しいことではない。

じつと話を聞いていたババが、天を仰いで、やれやれとごちた。

「それにしたって桁が違うぜ。千二百対三十はねえだろうよ」

「勝ち目はねえな。まるで、ねえ」

アドルファスも片手で蓬髪を掻いて、いささか投げやりに同意する。兵力にそうまで開きがあれば、話にも何もなりはしない。個人

の力量でどうこうできる繊細な範疇など越えている。ファレスは敵陣とは逆方向の、街道の北を顎でさした。

「バードに得物を持たせろよ。そうすりゃ少しは楽ができる。奴らは芸事で鍛えているから、ディールの鈍らより切れ味がいい。むしろ弓の腕なら一級品だぜ。なにせ、狩りの的は野生の獣だつてんだからな。狙いは正確、格段に身軽で、逃げ足も速い。足手纏いにならずに済む」

「だが、それでも百が精々だろう。いや、そこまで集まるかどうか。ファレスが示した方向を眺めて、バパが思案に暮れて顎をなでた。それでも精々千二百対、百三十——焼け石に水というものだ。

一同が眺める街道の北には、一大天幕群が広がっていた。灰色に荒んだ天幕群は、そびえ立ったバリケードの向こうで、一同の出方を窺うようにひっそり息を潜めている。この開戦のあおりを食って、祭も興行も全て中止だ。

ケネルは眉をひそめて思案している。ファレスはそれを一瞥し、右手の街を顎先でさした。「なら、その連中でも駆り出すか？ あれなら数には事欠かないぜ」

「無駄だろう。得物など持ったこともない連中だぞ」
ケネルはにべもなく却下した。

「ここの住人は戦には不向きだ。全く鍛錬していないし、訓練しようにも今更だ。出したところで犬死がおちだ」

敵軍が控える街道の南へ、淡々とした目を向ける。「要は、将を潰せば片がつく。無駄駒を使う必要はない」

「ま、頭を狩るなら、そいつの周囲の分厚い壁を突破しなけりやならねえが」

長に退けられるのは予め見込んでいたようで、ファレスは素っ気なく引き下がった。さばさばと話題を切り替えて、一同に視線を巡らせる。

「軍服の正規兵どもはともかくとして、周囲を固める傭兵どもが邪魔になる。外から徐々に切り崩そうにも、とてつもない数のだ。」

まともにぶつかっても骨が折れる。とくれば、あつちの傭兵連中に、こつちの顔を知る奴がどれだけいるかって話になるが――」

豪華な絨毯が敷かれた居間を、エレーンはそわそわ歩き回っていた。日差しさしこむクレスト公邸、彼女のいる広い居間には他に誰の姿もなく、ひっそり静まり返っている。

「奥様、お茶をお持ちしました」

扉の外から声をかけ、件の老執事が入ってきた。静かな居間を恭しく進み、湯気の立った紅茶を卓に置く。

「あつ――っ、うん。ありがと、爺^{じい}」

外の様子を気にしながらも、エレーンはあたふた長椅子に座る。

関^{とき}の声が外であがった。ぎよつと椅子から飛びのいて、エレーンは弾かれたように窓へと走る。南の窓を開け放ち、身を乗り出して目を凝らした。

ここは三階。高い建物が付近にないので、遠く街の外まで見渡せる。距離がある為しかと視認はできないが、草原の緩やかな起伏の向こうに、辛うじて土煙が見てとれる。

「じ、爺！ どうしよう！ デイルが来たわ！」

土気を上げているらしい荒々しい指揮官の怒声が、穏やかな初夏の風にのり、居間の窓辺まで微かに届いた。とても座っていられずに、エレーンは前にも増してうろろ室内を歩き回る。ついに戦が始まったのだ。

「落ち着きなされい、奥方様」

声をふと振り向けば、豪華な長椅子の真ん中に、老い枯れた小柄な執事がちょこんと腰をかけている。そして、己で己に淹れた茶を、姿勢も正しく、ずずつと啜る。「ここで我らが騒いだところで、事態は好転致しませぬ」

「そ、そんなこと言っただつて――！」

エレーンはあちこち見回して、親指の爪をそわそわ噛んだ。澄ました執事を盗み見る。なんか他人事に聞こえるのは気のせいかな？

(……どうしよう)

いてもたってもいられなかった。あの自信たっぷりの口振りでは、ケネルと仲間は慣れているらしいが、これは紛れもない戦争なのだ。これで死者が出るかもしれない。少なくとも、怪我人は大勢出るだろう。それもこれも、みんな己が発端だった。片や自分が要請を蹴ったから、片や自分の懇願に応えたからこそ、彼らはああして相まみえんとしているのだ——そこまで考え、エレーンはピタリと動きを止めた。嫌な自覚がじわじわ広がる。もしかして、これって

(あたしの、せい?)

たらし、と汗がしたたり落ちた。

血濡れた戦場が脳裏をよぎる。阿鼻叫喚の地獄絵図。これが自分のせいだなんて、これで誰かが死んだりしたら、なんだか、ものすごく後味が悪くないか? いや、デイルが引き揚げてくれれば、それでいいのだ。当方全く異存なし。こっちだってできることなら、是非とも穏便に済ませたい。けれど無論、デイルが同意見とは限らない。

(どーしたらいいの? どーしたらいいの? どーしたらいいの?)

焼ききれた頭で手立てを探すも、思考は微塵も進展しない。なんとか気分を落ち着けるべく、紅茶をとりあげ、口をつけた。

(……も、もう、やだ、こんなの)

薄いカップの縁に当たって、前歯がカチカチ鳴っていた。青い顔で縮こまり、カタカタ震えて考える。戦争というからには、やはり、斬り合ったりするんだろうか。でも、真剣なんかで切られたら、多分ものすごく痛いだろう。うっかり指先切っただけでも涙目になるくらい痛いのに。どんなに頑丈にできてても、男の人だって、きつと同じだ。まして真剣なんかを振り抜かれたら、それで誰かが死んだりしたら——

(じよ、「冗談じゃないわよっ!」)

エレーンはぶるりと身震いした。

(なんで、あたしがこんな目に遭わなきゃなんないわけ? なんで、

いきなり、こんな物騒な話になっちゃうわけ？)

カップを持つ手が小刻みに震える。恐くて恐くて仕方がなかった。今からでも、取りやめにすることはできないだろうか。いや、それより何より、ここから逃げたい――！

開け放った窓の先では、青葉がさらさら揺れていた。梢の向こうは晴れわたり、緊迫した場にまるでそぐわぬ、そら恐ろしいくらい
の晴天だ。

兵を鼓舞しているのだろうか、遠く歓声が聞こえてきた。野草ゆれる草原で、青い軍服に身を包み、手に手に武器を携えて、一分の隙もなく整列している軍人たち――そんな光景が目に見えぬ。ケネルたちはどうしたろう。やはり武器を準備して、配置についているのだろうか。自分の敵を倒す為に。

彼らはまさに戦おうとしていた。そう、文字通り、
命がけで。

ざわり、と胸がざわめいた。

微かに揺れていた違和感が、明確な形をとり始める。

鮮烈な疑念が湧き起こった。発端は他ならぬこの自分だ。なのに、きっかけを作った張本人は

——こんな所で、何をしている？

隊列を組む兵隊たち。助力を乞いに乗りこんだ遊民たちの天幕群、
明るい窓辺にたむろしていた表情のない傭兵たち――

強く唇を噛みしめて、エレーンは顔を振りあげた。老執事の前ま
で、つかつか歩く。まったり茶を啜る執事の腕を、むんず、と片手
でつかみ取った。

「行くわよ！ 爺！」

「……ど、どこへでございますかな？」

老執事はたじろいで首を傾げた。（いきなり、なに？）と言いた
げだ。エレーンは焦れて宣言した。

「だから！ あの人の所へよ！」

呆けたような間があった。

「……は？ あのとたち？」

主人の言葉を虚ろな顔で復唱し、はっ、と執事が正気に戻った。

「え、えええーっ！」

悲鳴と共に、ひっし、と肘掛けにしがみつく。だが、苦節四十年の執事の不幸は、その手がとつさに滑ったことだ。

エレーンはふんぬ、と踏んばって、力尽くで引きはがした。ずるずる虚しく引きずられ、執事はじたばた元の椅子にしがみつく。

「じよ、冗談ではございませんぞ！——お放しくだされ——お放しくだされいっ！ そればかりは何とぞ平にご容赦をつ！ 爺は——爺はまだ死にとうはございませぬっ！」

すぐさま速やかに不参加を表明。だが、エレーンはまるで気にしない。

老執事の抵抗虚しく、重厚な扉がいよいよ迫った。もはや瀬戸ぎわ崖つぷちの老執事は、壁のへりへと果敢にダイブ。最後の砦としがみつき、ぶんぶん首振り、じたばたあがく。ぬう、とまなじり吊りあげて、エレーンは指を突きつけた。

「なっさけないわね！ あんた、それでも男なのっ！」

両足壁に踏んばって、その手を無情にも引っぺがす。

だって、彼らと約束したのだ。盾にはしないと。捨て駒にはしないと。彼らの身柄は自分が守ると。そうだ、どうして、自分だけのん気に茶など啜っていられる。

今、ここで逃げたりしたら、彼らに説いたあの言葉は全て嘘になつてしまう。いい加減でもお調子者でも構わない。だが、嘘つきになるのだけは絶対に駄目だ。同じ土地に生まれた同士と彼らにそう説いたのは、他の誰でもない、この自分ではないか。

あの約束は礎だ。^{いしづえ}ようやく芽吹いた信用なのだ。それはまだまだ弱くて儂い脆弱な基盤だ。

あの時、助力を請いには行つたが、まるで交渉になどならなかった。彼らを利する何の権力も、^{ちから}自分は持ち合わせていないからだ。命を張るほどの見返りなんか、彼らにとっては、ないに等しい。そ

れでも彼らは、助けてくれると言ったのだ。

正念場だった。ああして見得を切った以上、成すべきことが自分にはある。損なうわけにはいかなかった。彼らがくれた無償の好意を。繋いだこの手を離してしまえば、ようやく手に入れた信頼は、扨って立つ土台を失い、その根底から崩れてしまう。今、逃げるわけにはいかない。

人として。

「ほらあ！ 駄々をこねない！ さつさと行くっ！」

足を踏んばる老執事を、力任せにぐいぐい引つ張る。べりつと唐突に壁から剥がれた。

「さ、行くわよん！」

力尽きたらしい執事をもぎ取り、エレーンは嬉々として引きずった。まあ、理屈は確かにそうなんであるが、

（一人で行くのは、やっぱり怖いしィ？）

人には「本音」というものがある。

「こ、こ、この年寄り相手に、かようなご無体な仕打ちをなさるとはっ！」

執事が顔を振りあげた。うるうる涙目で訴える。

「奥様が当地に嫁せられてから早や一月、爺はかようなご教育をさせて頂いた覚えはございませんぞ。奥方様におかれましては、下々に接し遊ばす際には、いかなる場合も美しい笑みをゆめ絶やさず、ご温厚に、慎ましやかにと、それはそれは口やかましく申しあげたはずでございます。目下に接しては寛容であれ、これこそが広大なるご領地を治め、多くの民を従えるこのクレスト領家に名を連ねるお方のご器量というものの、代々から伝わりまする揺るぎなき当家の家訓にございます！ それを領家の奥方ともあるうお方が高貴な方にはあるまじきお振る舞い。ああ、なんと嘆かわしい！ 下賤のよくな無作法をよもやかくも働かれるとは！ 爺は——爺は悲しゅうございますぞ——あ、いや、ちょっとあの聞いてます？——あ、あ、急にぎっくり腰の按配が——っ！」

エレーンはずるずる引きずった。そんな戯言聞いちゃいない。

廊下で立ち働く白襟紺服のメイドらが、一行に気づいて戸惑ったように頭を下げた。いぶかしげな反応も無理はない。日頃、他者の会釈に鷹揚にうなずく公邸きつての重鎮が、今日はじたばた足を踏んばり、引きずられていくというのだから。そう、威厳もへつたくれもあつたものではない。

先頭に行くエレーンは、ただいま崖っぷちの執事の悲鳴も、顔を見合わせる使用人の疑義も、すべからくことん捨て置いた。

老執事の悲痛な叫びが、静かな屋敷にこだまする。その首根っこ引きずって、エレーンは口を引きむすび、赤絨毯の廊下を突き進む。不安と高揚を胸に秘め、静かな屋敷を飛びだした。

開戦 2

「——これは、攻め込まれるな」

ケネル率いる遊民軍は、街道南の敵軍の様子を渋い顔で眺めていた。兵の数が圧倒的に多いのだ。パパは短髪の頭を掻きながら、右手に広がる街を眺めた。「バードを援護で行かせはしたが、あいつら素直に協力するかな。なにせ、ろくに武器さえない」

「武器ならあるぜ。問題ない」

パパの危惧に事もなげに応えて、ファレスは沿道を顎でさす。

「入り用だと思つてな。向こうからくすねてきておいた。剣と弓矢、それに火薬。その荷馬車に積んであるから、奴らに適当にばらまけよ。あの連中は器用だからな、大抵の武器は扱える」

「……国軍から強奪したのか」

ぽかんと彼らは口を開けた。あまりの手際の良さに言葉もない。確かにファレスは偵察帰りのようではあったが、まさか、武器の不足分まで調達してこようとは。だが、当人ファレスに気負った様子はまるでない。

「あれでも、まだ足りねえだろうが、後は敵を倒して掻き集めるしか手はねえな」

ホ口のかかった山積み of 積荷を、毒気を抜かれて眺めたパパが、呆れた顔で目を返した。

「よく中に入れたな。相手は素人同然とはいえ、ここは戦闘の最前線だぜ。侵入者には過敏になっていたろうに」

ファレスは平然と目を向けた。「起きたら女がいなくてよ。で、そいつの着物を拝借した」

「女のふりを？」

「ちよつと、そこいらうついてやったら、大歓迎で入れてくれたぜ」

肩の凝りをほぐすように、ファレスは首を軽く回して、何食わぬ

顔で言い放つ。

薄ら寒い沈黙が、周囲にどんより立ちこめた。バパが逸早く我に返って、わざとらしく咳払いする。「あー、お前の日頃の女郎屋通いも、少しは役に立つようだな。それでお前、もしか、その……」
「なんだよ」

口ごもる相手を怪訝そうに見返して、ファレスはぶっきらぼうに先を促す。バパは言いにくそうに隣のアドルフアスと目配せした。

「——いや、まさかとは思うんだが——もしか、本当に、そいつらと——」

「んな訳ねえだろ、どこぞの変態野郎じゃあるめえし」

ファレスは閉口したように吐き捨てた。性的指向を疑われたらしい。

「目的は向こうの軍服だ。身包み剥いでふん縛っておいたから、まだ無様に転がってんだろ」

遙か敵陣を眺めやり、嘲るように鼻を鳴らす。だが、すぐにその目を返して、一同に視線を巡らせた。「そんなことは、どうでもいい。あの程度の得物があれば、これでなんとか応戦可能に——」

「ケネルくっ！」

額を寄せていた円陣が、飛びあがって振り向いた。

場違いで異質な甲高い声。声の方向に目をやれば、木漏れ日さしこむ街道の先から、何かがふわふわ駆けてくる。いや、わっせわっせと直進している。黒髪揺らして、ぶんぶん手を振り、にんまっと笑った満面の笑み。相手の正体に気づくなり、一同は啞然と立ちつくした。そう、あれは——

「ねー！ あたしにできること、なんかないく？ なんでも手伝うから、どんどん言ってよー！」

一同は思考停止で絶句している。だって、駆けてきたのは誰あるう、クレスト領家の奥方ではないか。ちなみに、彼女が引きずっているのは、泡吹く寸前の老執事。

何が起きたかわからずに凍りついたままの一同をよそに、エレー

ンは、よいしょ、と到着した。乱れた呼吸を肩で整え、えへへ、と笑って一同を見回す。きょとん、とエレーンは視線を止めた。

「え？ なに？ どしたのよー。みんなして辛気臭い顔しちゃってさあ」

呆氣に取られて瞠目したきり、円陣は未だに反応できない。あめぐり口を開け、一言もない。いや、

「何考えてんだ！ あんたは！」

苛立った一喝が沈黙を裂いた。逸早く我に返ったのはケネルである。開口一番、険しい形相で怒鳴りつける。

「何をしに来た！ 危ないだろう！」

頭天边から叱咤を浴びて、エレーンは、うつ、とたじろいだ。だが、そこは庶民の出。そうすんなりとは負けてやらない。もそもそ逃げ腰を建て直し、爪先立ってふんぞり返った。「何しに来た”って、手伝いよ」

「手伝いい？」

ケネルは険悪そのものである。エレーンは、ずい、と胸を張る。

「だって、あんた達はどーなのよ」

「——あア！」

すぐむケネルの上着の胸に、ビシツと人差し指を突きつけた。

「あんた達だって危ないでしょうが。なのに屋敷であたしだけ、のうのうとかくまわれているっての？ 冗ー談じゃないわ！ 見くびらないでよ。女だからってナメてんじゃないわよ。あたし、そんなにヤワじゃないしい？」

「……あんた、な」

前傾姿勢で見下ろして、ケネルは拳をわななかせている。何か言いたいようではあるが、言葉が見つからないものらしい。エレーンは、ふふん？ と顎を出し、不敵に笑って腕を組んだ。

「いい？ あたしは領主の代行なのよ？ 領主っていうのは、戦の時に、指揮とかしたりするんですよ。だったらもう始まんないでしょうが、このあたしがいなくっちゃあ！ だいたいねー。みんな

を危ない目に遭わせておいて、自分だけ雲隠れしようだなんてケチな見もつてないわよ。そんなの言語道断でしょうが。あたし、そんな卑怯じゃないもん！」

大いに吠える。ここぞとばかりに。

ケネルはがつくりうなだれた。額をつかんで揉んでいる。呆れた顔で口を開けたファレスが、口を閉めがてら、ぼそりとこちた。「妙なのが出てきやがった……」

とびきり友好的な笑顔を作って、エレーンは突っ立ったままの一同を見渡す。

「みんなとあたし、約束したもん！ こんな大事な時なのに、引っこんでるわけにはいかないじゃないのよ、んね？」

どんとこい、と大言壮語し、だが、最後のトコだけ媚びてみる。大風呂敷を広げるも、畳むつもりはあまりない。珍妙な流れを振り切るように、ケネルが大きく嘆息した。

「あんたに何ができると言うんだ。自分の屋敷にさっさと戻れ。——おい、そのの！」

かたわらの沿道に手を振って、仲間の傭兵を呼びつける。得物の準備をしていた男が、すぐさま、こちらに駆けてきた。怪訝そうに見返す顔に、ケネルは珍客を押しやった。

「急いでこれを、クレスト公邸に連れ戻せ」

むむつ、とエレーンはケネルを見た。どうやら、追っ払おうとの魂胆らしい。

「なあにすんのよ！ 放してよっ！」

直ちに憤然と手を払い、両手を腰に押し当てる。

「なに、その失礼な態度はあつ！ せっかく、あたし、応援にきたのにつ！」

忙しなく立ち働いていた傭兵たちが、ぎよつと飛びあがって振り向いた。甲高いキンキン声の発信源を特定し、呆氣にとられて立ちつくす。作業の手を止め、荷物運搬の足を止め、長に盾突く小柄な客を、たじろぎ、まじまじと眺めている。

ケネルが慄然と腕を組んだ。それに負けじと、エレーンも膨れつ面で顎を出す。双方一步も引かぬ構えだ。エレーンは仏頂面を睨みつけ、両手を振り回して息まいた。

「あたしだって、ここにいます！ 荷物運びくらい、できるはずよ！」
「ここがどこだか分かっているのか！」

ケネルが頭ごなしに苛立った一喝。空気が怒声にビリビリ震え、周囲の傭兵が首をすくめる。だが、

「わかつてるわよ！ そんなことっ！」

肝心のエレーンは聞いちゃいない。

「馬鹿野郎！ さつさと戻れ！」

「あ、馬鹿って言った？ 今、あたしのこと馬鹿って言った？ あのねー知ってるー？ 馬鹿って言う人が本当は一番——」

「なんだか知らんが、とつと戻れ！ 邪魔だと言うのが分からないのか！」

「いや！ 戻らない！ あたしにだってできるもん！ 白衣の天使とか！」

「——はく——（一瞬、絶句）——そんな暇がどこにある！」

「なにそれ失礼っ！ ちゃあんと白いのに着替えてきたのに！」

奥方様は形から入るタイプである。

「それともなに？ あたしの治療じゃ不服なわけえっ！」

「そつという話をしてるんじゃないっ！」

双方、不穩に睨み合い、互いに一步も譲らない。

置いてけぼりにされた一同は、手持ち無沙汰そうに待機していた。初めの内こそ、長と珍客の言い合いを物珍しそうに見ていたが、あんまり終わらないものだから、いささか飽きてきたらしい。今では軸足を踏みかえて、得物で肩など叩いている。件の長髪に至っては、大あくびなんかこいてる始末だ。

長と客の言い合いは、けんけんがくがく延々と続く。のどかに揺れる高枝で、かあ、と鳥が呆れて鳴いた。

エレーンは断固たる腕組みで、ぷい、とケネルから、そつぽを向

く。

「あたし、絶対、絶対に帰らないからねっ！　誰がなんと言おうが絶対に！」

向かいの恐い顔など物ともせず、どんとこい、と不退転宣言。ケネルも不敵に腕を組んだ。

「やせ我慢は止めておけ。そんなのん気なことをほざいていると、取り返しがつかなくなるぞ」

「あゝら、あたしはあんた達と一緒にいるわよ。約束したもん」
「なら、いれぱー？」

声のんびり割りこんだ。

ケネルが飛びあがって振り返る。

「ウォード！　無責任な発言をするな！」

薄茶の髪 of 若者が、ぶらぶらこちらに歩いてきていた。背が高く、痩せてはいるが、長身瘦躯というよりは、やたらと「ひよる長い」印象だ。開戦前で切迫した状況というのに、ジャーキーを無造作にかじっている。

「なにコイツ。おもしれー」

かじりかけのジャーキーの先で、辿りつくなり、客をさす。こいつも、さっぱり聞いてない。

登場するなりいきなり笑われ、エレーンは憮然と目を向けた。無邪気な顔だが、なんか腹立つ。もちろん、こっちは大真面目。

（あんた、なによー。邪魔しないでよー）と口を尖らせ、見知らぬノッポにぶいぶい対抗。もっとも、当のウォードの方は、のれんに腕押し、上機嫌の様子だが。ちなみに、当該交渉の論点については、完全無視の態度である。いや、そもそも食ってる場合か？

ケネルは無言でうなだれた。額をつかんで揉みほぐす。げんなりうつむいたその顔には（馬鹿ばっかりだ。頭痛がする……）と彼の気苦労が書いてある。

ともあれ、そろそろ開戦だ。そこらにコレを放っぼって、戦いに行くわけには無論いかない。ケネルは嘆息で顔をあげた。

「わかった。あなたの気遣いには感謝する。だから早く屋敷に戻れ」
このとんでもない楽天家を速やかに他所へと撤去すべく、萎えかけた氣力を奮い起こして申し渡す。ひよる長くも無礼な闖入者に対抗していたエレーンは「んん……？」とケネルに目を戻した。ケネルの顔をじつと見る。そして、

「いや！」

ぶい、とつれなくそつばを向いた。実は感謝のかけらもないケネルの真意を、容易に看破したらしい。ケネルは持て余した顔で頭を掻いた。

「妙な駄々をこねるなよ。ここにいると危ないんだ。な？　早く帰ろうな？」

客の身長に合わせて上体をかがめ、幼児に言って聞かせる口調である。エレーンは膨れっ面で腕を組み、徹底抗戦の意思表示。「いやよ！」

「あなたの応援は必要ない。運搬の手も足りている。あなたがここにいる理由はない」

「嫌ったらいやつ！　い、や、よっ！」

「さつさと戻れ！　邪魔なんだよ！　そもそもあなた分かってないだろ、戦がどんなものなのか。ここにいたら、あつという間に踏み潰されて、あなたなんかけちよんけちよんに——！」

ケネル隊長、務めて冷静に対処しようとは、している。

降って湧いた珍騒動を、バパは啞然と見ていたが、我に返って瞬くと、苦笑いで沿道を見た。

「ほう、弓矢があるのか。助かるな」

わざとらしく声を張りあげる。脇の荷馬車に山積しているのは、奪取してきた得物の数々。珍妙な舌戦をかつたるそうに見ていたフアレスも、話を振られて振り向いた。

「可能な限り持ち出してきたが、向こうにも、たんまり残っている。弓はあらかた弦を切ったが、射手の手持ちがあるからな。全部潰したわけでもない。そいつで射掛けられたら打つ手がねえな。家が南

に面した奴らは避難させる方がいい」

「火矢を打ち込まれたら一溜まりもないな。家が燃えれば、延焼が始まる。そうなりゃ、消火の手が必要だ。今の内に、中の奴らに――」

「ま、火災はある程度防げるだろう。油はあらかた、別の用途で使ってきたから」

「別の用途？」

ふと、ケネルが聞き咎めた。不毛な睨めっこを中断し、いぶかしげに振り返る。「ファレス、お前、何をした――」

凄まじい爆音がとどろいた。

一瞬後、凶暴な爆風が巻き起こる。驚愕したような大勢の悲鳴。敵陣のある街道の先が黒煙をあげて炎上している。発火地点は陣の後方、被害は広範囲にわたる様子だ。

爆発音が連続して起こった。敵の動きが慌しくなり、兵の多くが馬を後方へ走らせている。

「――なんだ、事故か。こんな時に」

ケネルがいぶかるように腕を組んだ。バパも釈然としない顔で首をかしげる。

「戦に不慣れな兵隊だからな。火薬の扱いでも間違えたか。とはいえ、こいつは随分大掛かりだな。俺もこういうのは初めて見る。こうまで誘爆するものか？」

ウオードは無言で突っ立ったまま、薄茶の瞳を眇めている。アドルフファスが片頬で苦笑いした。「自滅か。こいつは幸先がいい。手間が省けて丁度いいってもんだぜ」

黒煙が一带に立ちこめていた。黒い人影が煙に紛れて、右往左往して叫んでいる。火勢が強い。飛び交う怒声。狼狽した悲鳴。恐慌に陥り、混乱している。消火の手が必要なのは、どうやら先方だったようだ。ケネルが長髪に目をやった。

「ファレス、お前、何をした」

向かいの様子を眺めたままで、ファレスは口端を吊りあげた。

「三百はいったな。これで残りは九百だ」

一同、弾かれたように振り向いた。ファレスが試算したその意味を瞬時に悟ったものらしい。ファレスの端整な横顔が、炎の赤に照り返されている。ケネルは身じろぎ、苦笑いした。

「やはりファレス、お前の仕業か。なるほど、さつき言っていた”別の用途”が”これ”だったというわけだ」

「こうでもしなけりや、どうしようもねえだろ」

嘲るように鼻を鳴らして、ファレスは大儀そうに首を回す。

「敵がああして固まっている時には、この手の荒技は効果的だ。食料庫をぶっ潰して、周囲に油をまいてやった。仕上げは簡単な起爆装置」

「——やるもんだな。敵が一気に四分の三かよ」

恐れ入ったというように、アドルフアスが軽く口笛を吹いた。ファレスは淡々とそれに応じる。

「ま、相手が不慣れな兵隊だからこそ、子供騙しの芸当だな。お陰で武器も持ち出せた。戦慣れした軍兵相手じゃ、こうはいかない」

敵陣は混乱の坩堝るつぽと化した。淡々と眺める一同の顔には、憐れみのかけらも浮かんではいない。その中でただ一人、エレーンは驚愕に目を見はっていた。

開戦3

彼らの平然とした話し声が、遠く淡々と聞こえていた。炎に焼かれて、悶え、のたうち、悲鳴をあげて苦しむ人影。その地獄絵図のような光景を眺めて、彼らは淡々と言い交わしている。あたかも、実験結果でも見るように。

彼らは如何にも手慣れていた。どの顔にも、動揺もやましきもかけらもない。戦禍の原因を作ったファレスも、軽く腕を組んだまま、無感慨に見届けている。今まさに死にゆくこととする己が手にかけた人々を。

「……そ、んな」

エレーンは愕然と立ちつくした。かつて味わったことのない衝撃に、足は震え、頭の中は真っ白だ。たった今、目の前で、多くの命が断たれたのだ。しかも、わずか一瞬で。

頭の中が朦朧とした。指先をわずかでも動かせば、叫び出してしまいそうだ。音の全てがざわめきと化し、言葉の意味が虚ろな体を素通りする。そんな中、ファレスに話しかけるアドルフアスの濁声が、不意に耳に飛び込んできた。

「——しかし、三百を一度に消し去るとはな」

目の端に写ったファレスは、戦禍に目をやったままだ。

「どうでもいいような雑魚どもだが、あんな障害もんでもない方が、バードの負担は軽くなる。まあ、これで少しは戦況が有利に——」

「人の命を、なんだと思っているの！」

平手の音が轟いた。周囲が弾かれたように振り返る。

「——痛って」

顔をしかめて頬をさすり、ファレスが剣呑に見下ろした。薄茶の長髪を額で分けた端正な顔。

「何しやがる！ このアマ！」

目がかち合ったその刹那、ファレスが胸倉をつかみあげた。一気

に乱暴に吊るしあげられ、エレーンは顔をゆがめて爪先立つ。喉がのけぞった息苦しさをこらえ、精一杯相手を睨んだ。「わかっていの？　自分が今、何をしたのか」

「――あア？」

長髪はうるさそうに舌打ちする。

「あんたは人を殺したのよ！　生きてる人に火を点けたのよ！」

「それが、どうした！」

固い拳を両手でつかんで、エレーンは顔を振りあげた。

「人が死ぬのがどういうことか、あんた、ちっともわかってない！　どんなに泣いてわめいても、二度と戻ってこないのよ！」

「――何を勘違いしていやがんだ」

忌々しげに呟いて、ファレスが舌打ちで突き離れた。その腕をケネルがつかんでいるから、長に制止されたらしい。地面に乱暴に投げ出され、うつむいて咳き込むエレーンに、ファレスは苛立った目を向ける。

「助けてくれ、と言ったのは、ためえの方だろうがよ！」

驚いて、エレーンは顔をあげた。

「違う！　あんなこと頼んでない！　殺して欲しいなんて頼んでない！　なのに、あんたは平然と――。人でなし！　あんなの卑怯よ！　あの人達にだって、家で待っている家族がいたのよ。それを、あんたは虫けらみたいに――！」

「綺麗事ぬかしてんじゃねえよ、ねえちゃん」

剣呑な声音で罵倒を遮り、ファレスは荒々しく目をむいた。

「だったら、こんな劣勢でどうすりゃいい！　中には使えねえ素人しかいねえってのに、軍隊相手に楯突こうってんだぞ！　卑怯？　人でなし？　結構だね！　もう後がねえってのに形振り構ってられつかよ！」

「殺さないで！」

「――あア？」

ファレスの足に取りすがり、エレーンは冷淡な顔を凝視する。

「あの人達を殺さないで！ もうこれ以上殺さないで！ なにも殺さなくたっていいはずよ。捕まえれば済むことじゃない。——ね、お願い。殺さないで！」

ファレスが怯んだように口をつぐんだ。だが、すぐに、苦虫噛み潰した顔で目をそらした。

「——馬鹿言ってるじゃねえ。こっちの何十倍だと思っていやがる。たく、いい気なもんだぜ。これだから何も知らねえ堅気はよ！ 甘ったれたこと、ほざいてんじゃねえよ。向こうは殺^やりにくるんだぞ」
いかにも面倒そうに舌打ちする。だが、どこか居心地の悪そうな面持ちだ。微かな希望をそこに見出し、エレーンは語気を強めて言い募った。

「ね、あたし、なんでもする！ ここでみんなを応援する！ あんたのことを——みんなのことを、あたしがここで支えるから！ だからお願い。あの人達を殺さないで！」

迷惑そうに柳眉をひそめて、ファレスは顔を背けている。周囲で眺める面々も困惑したような顔つきだ。

エレーンはもどかしい思いで唇を噛んだ。想いがまるで伝わらない。彼らの持つ感覚は、自分のそれとはかけ離れている。事態は刻一刻と進んでいく。後戻りできないところまで、既に来てしまったのだ。

恐ろしい程の焦燥に駆られて、エレーンは青ざめて立ちすくんだ。一人一人を失う事がどれほどの苦痛をもたらすか、嫌というほど知っている。殺してくれるなどの懇願は、本来容れられて然るべきだ。なのに、その「当たり前」が通じない。ひしひし身に沁みて実感した。

（これが、戦争……）

紙面の文字でしか見たことのない、これが”戦争”

異常だとは思えなかった。人と人が殺し合う、まともな神経でできる事じゃない。だが、そうした想いの一方で、彼らにそれを依頼したのは、他でもないこの自分なのだ。ならば、これが、自分

が彼らに望んだこと？

「……違う」

戦慄が走り、エレーンは強く首を振った。殺し合いなど望んでいない。そんなことは頼んでいない。なのに、現に起こったことは——
(あたしの、せい？)

これは全部自分のせい？ 自分が彼らを殺してしまった？ この人達に頼んだから？

(——どうしよう)

エレーンは愕然と唇を噛んだ。呼吸が浅く荒くなる。狼狽と後悔でめまいがする。鼓動が苦しいほどに速かった。動転した胸中で、誤魔化しようのない自覚がせりあがる。

——取り返しのつかないことを、した。

どす黒い動揺が湧き起こり、エレーンは唇を噛みしめる。

「……こんなはずじゃ」

こんなはずじゃ、なかった！

いても立つてもいられずに、ファレスに顔を振りあげた。

「殺さないで——お願い、殺さないで！」

言葉を知らない幼児のように、それだけを遮二無二訴える。ファレスは鬱陶しげに一瞥し、うるさそうに舌打ちした。「又きたか」という顔だ。エレーンは臆せず、彼の視界に割りこんだ。

「ね、お願い、殺さないで！ あんたの言うこと、なんでもきく。

できることなら、なんでもする。だから！——だから！ だからお願い！ 殺さないで！」

「いい加減にしろ」

腕を後ろから引っ立てられた。

「これは戦だ。敵を殺らなきゃ、こっちが殺られる」

淡々としたケネルの言葉に、エレーンは慌てて首を振る。「で、でも違う。あたしが頼んだのはあんなことじゃ——」

「戦になれば、人は死ぬ。当たり前の話だ。あんたも啖呵を切って戦端を開いたんなら、少しは心得ておくことだ。——おい、その

！」

辟易したように嘆息し、ケネルは沿道に振り向いた。

「何をしている。さつさと屋敷に連れていけ」

呆氣にとられて見ていた二人が、我に返って駆けてきた。エレインは慌てて取りついた。「でも違う！ あたしはあんな——！」

「邪魔臭いから引っこんでいろ。それと、その執事！」

「——は、はいっ！」

ケネルが怒鳴った茂みから、何かが弾かれたように飛び出した。ケネルの怒気を警戒しつつも、そろりそろりと寄ってくる。

「……お、お呼びで？」

「ご機嫌伺いのへらへら揉み手で現れたのは、こっそり見ていた老執事である。ケネルが憮然と目を向けた。

「こいつをしつかり見張っておけ。二度と部屋から出すんじゃないぞ。うるさくてかなわん」

「——ケネル！」

たまりかねて、エレインは叫んだ。だが、ケネルはもう目もくれない。つかまれた腕を振り解こうにも、力が強くて動けない。指名を受けた先の二人が、エレインの腕を両側から取った。「さ、奥方様。参りましょう」

「隊長を怒らせるのは、ウマくありませんよ」

引っ抱えるようにして歩き出す。エレインは慌てて身をよじった。

「ちょ、ちよつと！ なにすんのよあんだ達！ 放しなさいよ！

放しなさいってばっ！ あたしはまだ帰らないー！ ちよつとお！

帰らないってば！ 帰らないって言うてんでしょっ！」

苦笑いしている二人の足を、力任せに蹴り飛ばす。二人の男は「痛てて」などと言ってはいるが、効いていないのは明らかだ。腕を取られて引きずられながらも、エレインは必死で振り向いた。

「だって、あたし約束したもん！ みんなのことを守るって！ だったら、やっぱ一緒にいないと！ ケネル、あんたも聞いてたでしょー。ケネル！ ケネルってば！——て、ちよつとあんだシカトし

てんじゃないわよ！——もー！ 放してよ！ 放せつつてんのが聞こえないのっ！ だからねー、あたしはまだ、こっちにいないと——！」

薄い頭に手を当てて、老執事が嘆かわしげに嘆息した。

「奥様、はしたない真似はおやめ下され。爺はとても恥ずかしい」

だが、生憎エレーンはそれどころではないのだ。ぶんぶん首を左右に振って、目いっぱい大声でわめき散らす。

「手え放せつつてんのよっ！ 聞こえないのでくの坊！ さっさと放さないと噛みつくわよっ！」

だが、足が地にさえ着いていない。

健闘むなく、エレーンはとうとう摘まみ出された。足を踏んばって抵抗するも、屈強な男二人にがっちり左右を固められては、もはや敵う道理もなかった。

キンキンわめく音源が、二本の轡わだちを地面に残して次第次第に遠ざかる。傭兵たちは立ちつくし、茫然とそれを見送っていた。

「——俺たちを守ってくれるんだとよ。あの細腕でなあ」

やがて、苦笑いの眩きが、気の抜けた街道にポツリと落ちた。屈強な体躯のアドルフアスが一人うんうん頷いて、片手で蓬髪を掻いている。顔をあげ、周囲をさばさば振り向いた。

「おう、聞いたかよ。我らが女神様は勇ましいことだな！」

街道で眺めていた仲間たちも、準備の手を止め、困ったような笑みで見返した。

「殺さないでくれ、か」

アドルフアスの隣で聞いていたバパが、苦笑いで顎をなでた。

「ここは一つ、カレリアの腰抜けどもに見せつけてやるとするか、歴然とした差って奴を。それとも」

聞こえよがしに一瞥する。

「何十倍もの敵が相手じゃ」腰が引けちまうかな？」

「ぬかせ。俺を誰だと思っていやがる」

あてこすられて、ファレスは忌々しげに舌打ちした。その応えを口笛で囃して、バパは笑う。

「ならば結構。ついては、残りの敵は高々九百、一人頭三十つてとこだ。斬つても斬つても飽きるほど湧いてはくるだろうが、これも自己鍛錬の良い機会、そうとも思えばいいさ。ともあれ――」

ふざけた口調を改めて、冷静な視線を敵陣に向ける。

「副長が作ってくれた折角の好機だ。あの混乱に乗じて戦力を削いでおきたいが」

思慮深げな茶色の瞳は、燃えあがった炎の向こうを、慌しく行き来する人影を、何事か測るかのように見つめている。今度こそきつちり名指しされ、ファレスは素っ気なく顎をしゃくった。

「ああも統制がバラバラなら、手もなく突き崩せるぜ。大半は手負いで、食料庫の消火におおわらわだ。こんな田舎じゃ食いもんの補給は難しいからな。本隊がある商都の方は主力の大軍が詰めていてこつちにくれてやる余裕はなからうし、自領トラビアは更に遠い。

後は付近の農家から強奪するより手はねえが、いきなり、あの大人数じゃ賄いようがない」

「大所帯つてのが裏目に出たな。こうなると、一日分を工面するだけでも至難の業だ」

バパもおもむろに相槌をうつ。敵の動揺を眺めやり、ファレスは嘲るように目を眇めた。「どんなに偉そうにほざこうが、人間、食いもんがなけりや戦えやしねえ。たった一日食わねえだけでフラフラだ。これが二日となり、三日となれば、戦どころの騒ぎじゃなくなる。腹をすかせた奴らは惨めだぜ。後は、お定まりの食いもんの奪い合いだ。引きかえこつちは、すべからく万全の態勢で、飢えでふらついた手負いの足を軽く払ってやるだけでいい。叩くのなんざ、わけはない」

淡々と語る冷酷な声音に、一同はたじろいで沈黙した。誰も口を挟みはしないが、口をつぐんだどの顔にも（悪魔のような奴……）

との正直な感想が書かれている。こいつだけは敵に回したくない、とは誰もが抱いた実感だろう。

「とにかく用意は整った。さてと」

ファレスはさばさば切りあげて、中央のケネルに目配せした。

「どうする、隊長」

傭兵たちが一斉にケネルの方へと目を向ける。彼らは出陣の合図を待っていた。命を削る戦を控え、だが、どの顔の口元にも、不敵な笑みが浮いている。

命を預ける部下たちに、ケネルは視線を巡らせた。

「ここは一気に削りにかかるぞ。総員、心してかれ」

夕暮れの道

赤味がさした街の景色に、蒼闇がひっそり息づいていた。街へと続く街道を、夕陽が赤く照らしている。そんな中、仕事を終えた傭兵たちが得物を引つ下げ、かつたるそうに引き揚げてくる。彼らがその手に引つ立てているのは軍服姿の捕虜たちだ。うなだれ、疲れ果てた捕虜たちの顔は血と泥とで薄汚れ、色鮮やかな青軍服も所々切り裂かれている。

ケネル率いる遊民軍は、見張りを数名街道に残して、街の北に位置している根城の天幕群へと引き揚げていた。さし迫った敵軍を押し戻すことに成功したのだ。もっとも残兵はまだまだ多く、撃破するまでには到っていない。

沿道の高木の陰を出て、エレーンはそろそろ近寄った。人影に紛れてやってきた目当ての人物に駆け寄って、作り笑顔でぎこちなく手を振る。

「お、お疲れー、ケネル、迎えにきたわー」

ふと、ケネルが顔をあげた。視線を巡らせ、相手を認め、たちまち苦虫噛み潰す。

「――また来たのか、性懲りもなく」

持て余したように頭を掻いて、何気なく辺りを見回した。誰かに押し付けようとの魂胆らしい。だが、街道を行き交う傭兵たちは大抵捕虜を連行していて、各々の仕事で忙しい。やむなくケネルは嘆息し、ぶっきらぼうに足を向けた。

「当分攻めてはこないだろう。この間に、女子供や入口付近の住民を奥まった場所に移しておけ。ああ、貴族街ならうつつつけど。塀が屋敷を取り巻いているから、防衛線を突破されても、対処する時間が多少は稼げる」

「う、うん！ わかった！ そうする！ そうする！」

開口一番次々指示され、エレーンはたじろぎ笑いで、ぎこちなくうなづく。「ケネルの言うことなら何だって聞くから、何かあったら、じゃんじゃん言つてよ！」

まったく会釈も愛想もありはしない——内心ぶつくさ文句を垂れつつ、作り笑顔でうかがった。「そ、それから？」

「それから」

ケネルはおもむろに腕を組み、じろりと視線を振り向けた。

「ここへは来るな、と言つたはずだな」

お愛想笑いで凍りつき、エレーンはそそくさ目を逸らす。脅しかけてはさすが本職、えも言われぬ迫力だ。ダドリーと喧嘩するのなんかとはわけが違う。一方、けんもほろろだった傭兵たちは、何故か和やかな雰囲気だ。笑顔で手を振る者さえいる——顕著な変化にはたと気づいて、エレーンもぶんぶん振りかえす。

「み、みんなあつ！ お疲れ〜！」

彼らの唐突な豹変振りに調子が狂って戸惑うが、睨まれるよりはずっといい。

足を止めて見ていたケネルが、やれやれと首を振った。肩を返して、ぶつきらぼうに歩き出す。

「——ちよ、ちよつと待つてよ、ケネルっ！」

エレーンは慌てて追いかけた。

「疲れている。話しかけないでくれ」

ぶらぶら歩いているように見えて、そのくせ結構な早足だ。もたもたしていると、どんどん歩いていつてしまふ。エレーンは小走りで隣に並ぶ。「あのっ！——ありがとねケネル！」

「なにが」

ケネルはまるで見向きもしない。碌に話してもいないのに眉をひそめて鬱陶しげ。エレーンはわたわた食い下がる。「だから、あの——捕まえてくれたんでしょ、あの人たち」

戸惑ったような間があいた。

しばらく無言で足を運び、ケネルはぶつきらぼうに言い返す。「

礼を言われる筋合いはない。そんな指示をした覚えはない」

「でも、女男もあんなにたくさん——」

「女男？」

ほらあそこ、と指で示した先を追い、ケネルは怪訝そうに目を向ける。北へ引き揚げる背の中に、捕虜を引き連れた長髪がいた。横顔がどこことなく機嫌がいい。

「奴は腕がいいからな。見た目と違って」

一瞥したケネルの顔には、たじろいだような色がある。曰く（もうチェックしてんのかよ。目敏いなこいつ……）

ちら、とエレーンはうかがった。「でも、ケネルも捕まえてくれたんでしょー？ 殺さずに」

ケネルが怯んだように口をつぐんだ。しばし返事をためらって、渋々ぶつきらぼうに口を開く。「——ああ」

「ほーら、やっぱり！」

エレーンは会心の笑みで手を打った。「そうじゃないかと思ってたんだ。だあってケネル、実はいい人そうだもん！」

ケネルが頬をひくつかせた。だが、仏頂面で目をそむけ、かったるそうに歩き出す。

「——あつ！ 待つてつてば！」

エレーンはあたふた後を追った。この街道の突き当たりには、傭兵たちが詰めていた件の荒んだ天幕群がある。入口の見張りが手強くて中には中々入れないから、うかうかして戻られてしまえば、引きこもられてそれきりだ。大股で歩くケネルに取りつき、とびきりの笑顔で仰ぎやった。「ねーねー、ケネルー。恐かったあ〜？」

「別に」

「ねえ、ケネル。怪我とかは？」

「なんともない」

「あ、でも、ちょっとくらいは——」

「どこも、なんともない」

やっぱり、ケネルはけんもほろろ。だが、一日中戦って、すり傷

一つこさえないなど、そんなことがありうるだろうか。疑いのまなざしでうかがった。

「本当〜にい〜？　ねー、遠慮しないでちゃんと行ってよー？　ちゃあんと手当てしたげるから。ほ〜ら見て見て？　色々持ってきたんだから〜。消毒薬にガーゼに包帯でしょ？　あ、安心して？　そーゆーの、あたし得意だから。実は、ちょっと前まであのラトキエのお屋敷でね〜」

ケネルが大きく嘆息した。

「……ねー、そういう態度はないんじゃないのー？　せつかく戻ってくるのを待っていたのに。——ねえ、ケネル、あたしの話ちゃんと聞いているー？　ケネルってば！」

だが、夕陽に照らされた横顔は、もう何を言っても反応しない。歩く足さえ止めようとはしない。

作業をしている傭兵が、大声で仲間を呼んでいた。軍靴を引きずる大勢の足音。戦の後始末を手際良くしながら、ぶらぶら歩く傭兵たち、気怠い風情で引かれていく諦め顔の軍服たち、その何れもが影を引きずり、薄暗くなりかけた夕暮れの街道を行き交っている。

ケネルの後をあくせく追いかけて、エレーンは黙々と道を歩いた。だが、黙っているのも気詰まりで、そわそわ隣を盗み見る。案の定、すぐに沈黙に耐えられなくなり、ケネルの袖を引っばった。「……ねーケネル〜。もっとゆっくり歩いてよー。ねーケネルー！　ねえってば〜」

「どこまでついて来る気だ」

突き放したような物言いに、エレーンは怯んで足を止めた。ケネルは殊更に嘆息し、たまりかねたように振り返る。

「何故、俺につきまとう。いつもいつも、うるちよると」

エレーンはたじろいで言葉を飲んだ。その不躰な言い草に気づいて、慥然とケネルに言い返す。「べつ、別にあたしは、つきまとってなんか——」

「だったら何故、大人しくしない。何故、屋敷で報告を待たない。」

平気でこんな所までしゃしゃり出てくる。戦は遊びじゃないんだぞ。大事に至らなかったから良いようなものの、何かあったら、どうするつもりだ。あんたは領家の奥方だろう」

出来ない子供を叱るように、ケネルは容赦なく語気を強める。他人に頭ごなしに咎められ、エレーンは不貞腐ってケネルを見た。だが、指摘自体は的を射ていて反論する余地はない。せめて不服顔で見あげるが、ケネルは視線を逸らさない。これが街の男であれば、面倒事を回避して容易く迎合するところだが、ことこのケネルには、他人の立場に便宜をはかる——遠慮という対処はない。顔を合わせただ当初から、ケネルは常に決然としていて、異性で領家に属する彼女にも甘やかすことなく接していたが、その厳しい態度はぶれることなく今もなお一貫している。そして今後も、虚仮脅しなどには乗らないだろう。彼は自分の判断に絶対の自信を持っているのだ。それは、背後に控えた多くの仲間を後ろ盾にしていることも知れないし、自身の強い腕力を頼みにしていることも知れない、或いは、これまで彼が培った経験則の裏付けあつてのことかも知れない。いずれにせよ、相手を屈服させる説得力が、それほど年嵩というわけでもない目の前の男には備わっている。つまり、安易で不当な我がままは、ケネルには一切通用しない。拗ねて見せても無駄と悟って、エレーンは渋々目をそらした。

「……だって、あたしのせいだもん。あたしが頼んだことだもん。もしも、みんなに何かあったら」

ケネルが呆れたように嘆息した。「俺たちはそんなに柔じゃない。あんたに心配されるほど落ちぶれちゃいない」

「でも！」

「約束は守る。あんたとあんたのこの街は、けりがつくまで守つてやる」

「——でも」ともどかしくあげた目が、ケネルの直視とぶつかった。とつさに気圧され、目を逸らし、エレーンはうろたえて小石を蹴る。「でも、なんかいたたまれなくて。だって、あたしが——」

「そう不安そうな顔をするな。いくら旦那が――」

え？ とケネルの顔を見た。持て余したようになだめていたケネルが、我に返って口をつぐむ。

「――ああ、いや」

言葉を濁し、ばつ悪そうに目を逸らした。日頃は率直な物言いだけに、歯切れの悪さがそぐわない。エレーンは怪訝にうかがった。

「なによー。ダドリーがどうかした？」

「別に」

ケネルはにべもなく目をそむけた。だが、ケネルが漏らした「旦那」というのは、明らかにあのダドリーのことだ――はた、と含みに気がついて、エレーンは憤然と睨みつけた。

「あーわかった！ 悪口言うつもりでしょー！。こんな時に領主がいなくて無責任だとかなんとかって。でも、いくらケネルでも、そんなこと言ったら許さないんだから――！」

「そうじゃない」

ケネルはうるさげに嘆息で遮る。だが、エレーンはそんなことでは誤魔化されない。キツとまなじり吊りあげた。

「だったら今のはなんなわけ？ ダドは商都のことが心配で、様子を見に行っただけよ。ディールがこつちに来るなんて、まさか夢にも思わないもん。だから、ダドは――！」

ケネルが苛立ったように一瞥した。

「あの女とガキ、始末してやろうか」

エレーンは胸を突かれて息を飲んだ。不意打ちにうまく働かない頭で、放たれた一言を反芻する。『女とガキ』――つまり、サビーネとクリードのことだ。つまり、ケネルはあの母子を「亡き者にしやろうか」と持ちかけているのだ。

「な、なに馬鹿なこと言ってるのよ！」

とつさに誘いを突っぱねた。務めて平静を装うが、その語尾がわずかに震える。

「なんでいきなり、そんな物騒な話になっちゃうわけ？ 仮にも人

の、命なのよ」

諫める口調で続けたものの、視線を合わせてもらえない。

「へ、変な冗談はやめてよね。あたしはそんなこと、これっぽっちも――」

「邪魔なんだろう、あいつらが」

ケネルは素っ気なく核心を突いた。腕を組み、真正面から目を向ける。

「今なら、単なる事故で済む。敵の軍勢が押し寄せているから、騒ぎに乗じて何とでもできる。そうなりやあんたは、晴れて旦那を独占できる」

夕陽に半面を照らされて、対峙して見据えるケネルは真顔だ。試すかのように目をすがめ、人の悪い笑みを頬にのせた。

「こんな好機は滅多にないぜ。この機を逃せば、この先一度あるかどうかだ。あんたが依頼をすると言うなら、俺には受ける用意がある」

血なまぐさい話をしているというのに、声に乱れは全くない。いや、それも不思議なことではない。彼は現役の傭兵なのだ。命を奪い、他人を襲う、それが元よりの生業だ。こちらが聞けば震えあがるような話でも、この彼にしてみれば、通常業務の一環に過ぎない。片方の足に重心を預けて、ケネルは無言で眺めている。表情のない面持ちからは、彼が何を考えているのか、何故こんな打診を持ちかけたのか、片鱗さえもつかめない。むしろ、心を見透かされそうな恐さを感じて、盗み見の視線を慌てて外す。急かすでもなく打ち消すでもなく、ケネルは返事を待っている――

「……あ、あたしは……」

息を飲んで硬直したまま、エレインはわずかに足を引く。領邸の壁に降りかかる血しぶきが鮮烈に脳裏をよぎった。そのむごたらしい有り様がにわかに急速に現実味を帯び、肩から、頭上から覆い被さる。握った指が小刻みに震えた。喉は緊張にこわばって、からからに渴いてしまっている。――いや、早く突っぱねなければ。きつ

ぱり言うのだ、その気はない、と。

禍根を残すような態度は駄目だ。曖昧さが少しでも残れば、相手はそれを脈ありと見なして先走った行動に出るかもしれない。荒っぽい稼業のならず者は、そうして言質を巧みにとって法外な報酬を要求すると聞いている。無論、ケネルがそうした輩と全くの同類とは思わないが、とはいえ、慣例が通じる相手でもない。彼らは馴染みの商人ではなく、常識を異にする異邦人だ。言葉を尽くした理屈より腕力に訴えるきらいもある。よくは知らない相手に対して、火種になるようなものを残すのは危険だ。付け入る隙を与えてはならない。打診を受けてしまった以上、あやふやにしたまま別れてしまえば、後々問題にならないとも限らない。けれど――

向き直った革ジャンの肩を、赤い斜光が照らしていた。肩には届かぬ黒髪が、風にわずかにゆれている。街道は片付けの段階に入り、気怠そうな風情の傭兵たちがざわめきと共に行きすぎる。衣擦れの音が耳に届いて、ケネルが足を踏み出した。

「その気になったら言ってくれ。力になるぜ」

そむけた肩にかけられた言葉は、買物物を頼むかのような気楽さだった。朦朧としつつも顔をあげ、エレーンは唇を震わせて立ちつくす。

――早く否定をしなければ。

早く彼を追いかけて、笑い飛ばしてしまわねば。彼が行ってしまうその前に。あの幸せな妾子に対して、そんな敵意は抱いていない。自分は害意など抱いていない。北カレリア繁栄の為には、嫡子の存在は重要だ。血統を継ぐ候補者は多ければ多いほど好ましい。ならば、屋台骨を支えるあの母子を、愛し、慈しみ、見守ってやるのが、領家の奥方たる自分の務めだ。彼らとの関係は円満で、問題は何ら存在しない。まして抹殺したいなど、そんなこと露ほども望んではいない。

――本当に？

夕闇に包まれた天幕群に向け、黒い髪の傭兵の背が、かつたるそ

うに歩いていく。斜光に染まった街道が、いやに赤く、いやに眩しい。声が喉から出なかった。焦燥ばかりが身を焼いて、手足が痺れたようになっていた。

生ぬるい西風が、髪をゆるくさらっていた。膨張した意識の端で、ざわめきが遠く聞こえていた。立ち働く男たちの声。後ろから来て行きすぎる気配。人影が脇を通りすぎ、それぞれがそれぞれの在るべき場所へと引き揚げていく。いく人も、いく人も。

徐々に遠ざかる背を見つめ、エレーンは硬直して立ちつくしていた。ただの一步が踏み出せない。

握りこんだ指が震えていた。後を追おうとする足に、体が引き留まるべく抗っていた。燃え立つような大きな夕陽が、今まさに暮れようとしていた。

族長の息子 1

「よろしくお願い致します。奥方様」

磨きあげられた広いロビーで、サビーネは深々と頭を下げた。スカートのひだに隠れるようにして、あどけない顔立ちの男の子が、様子をおどおど、だが興味津々うかがっている。困った顔で子供を振り向く母親に、エレーンは笑って手を振った。

「んもう、いや〜ねえ、奥方様だなんて堅苦しい。あたしのことはエレーンと呼んでよ。年齢だつてそんな変わんないしい？」

一戦交えた翌日の、クレスト領邸エントランスホールである。母子の住まう街外れの別邸が避難区域に含まれていた為、彼らの身柄を保護することになったのだ。

作り笑いの裏側で手強い対抗馬を盗み見て、エレーンは密かに決心する。向こうは妾、こっちは正妻。ここは是非とも懐の広いところを見せておかねば。まして、使用人の面前で、醜態を演じることなど、あつてはならない。そう、この女の前では深刻ぶらないと決めたのだ。だって、癩癩なんか起こしたら、まるで――

「ま、まあ、かわいいっ！ ダドリーそっくり！――あ、ぼく、お名前は？」

ぽかん、と見あげた子供の頭を、エレーンは愛想よくなでてやる。天使の笑みで顔を崩して、子供は無邪気にのたまった。

「ぼく、クリードだよ！ よろしくね、おばちゃん！」

「……はい……よろしくね……」

子供の頭にめり込むほどに、エレーンはぐりぐり押しなでる。むっ、と子供が顔をゆがめた。ひょいと頭を引っ込める。

「――わ？」

体重をかけた支えを失い、エレーンは派手に尻もちをついた。転んだ痛みに顔をしかめて、子供の顔を睨めつける。

「ク、クリード！」

サビーネが慌てて駆け寄った。「申し訳ございません！　あの、お怪我は——」

「あー平気よ！　このくらい」

その手を素早く払いのけ、エレーンは笑って立ちあがる。手を拒まれたサビーネは、だが、やはりたおやかに、困ったように微笑むばかりだ。

ちら、とエレーンは盗み見た。そう、冗談じゃない。取り乱したりするもんですか。だって、癩癩なんか起こしたら、まるで——この女に負けたみたいじゃない。

煉瓦道の市街地に、住人たちの姿はない。皆それぞれの住居ふかくに閉じこもっているからだ。

幾多の靴に踏み固められた街道が、初夏の太陽に照らされていた。傭兵姿の数人が、ぶらぶら気の抜けた顔で行き来している。正午過ぎの街道はひっそりとして平穏で、殺伐とした昨日とは打って変わってのどやかだ。

敵が布陣する街道の南は、鄙びた沈黙を守っている。それを目を細めて眺めやり、ファレスは辟易として嘆息した。

「人手不足が致命的だな。いくら敵を手負いにしても、みすみす逃がす羽目になる。そうかといって街の周囲を離れるわけにはいかねえから、追い散らすのが精々だ。これじゃあ、どれだけ戦ってもきりがねえ。あのフケたバードどもを、とっとと駆りだすしか手はねえな」

「動員するなら、筋を通す必要がある」

目を戻したファレスにうなずき、ケネルは逆の方向を眺めやる。二人が見やった街道の北には、昼下がりの天幕群が白々と荒涼と広がっている。

木漏れ日ゆれる街道筋で、ケネルとファレスは話をしていた。いずれも笑みのかけらもない真顔の厳しい顔つきだ。端整な横顔で一

瞥し、ファレスが留意を促した。

「バードの大半は、レグルスの所属だぜ」
れんちゅう ほう

天幕群を眺めたままで、ケネルは思案顔で顎をなでる。「あそこ
の族長は確か――」

「ゾクチヨー？ なにそれ」

ぎよつとケネルが飛びすさった。慌てて振り向き、あたふた見回
し、出沒経路をたじろいで探る。「――あんだ、いつから！」

「さつきからいたけどー？」

珍客は小首を傾げて瞬いた。己の胸元に視線を下ろして、ケネル
は啞然と絶句する。そう、出現したのは誰あるう。昨日首尾良く追
っ払ったはずの（迷惑なほどに人懐こい）クレスト領家の奥方では
ないか。

一方、ケネルの嚴重な警戒網をあつさりすり抜けた奥方様は、テ
リトリ―侵入を首尾良く果たして、ケネルの袖をくいくい引いた。

「ねーねーケネルうー。これからゾクチヨーに会いに行くの？」

「――まあな」

ケネルは渋々返答した。すぐさま、つれなく回れ右。気鬱と難色
を態度で示してズボンのポケットに両手をつ込み、すたすた早足
で歩き出す。そして、こたびの失態に存分に苦虫かみつぶす。身を
入れて話していた為、うろちよろうごめく肩下をつむじが視界に入
らなかったものらしい。

「ふーん、ゾクチヨーかあー、どんな人かなあー、楽しみだわあー、
わくわくしちゃうー」

「ついてくんなっ！」

とっさにがなって振り返り、てくてくついてきた珍客を、ケネル
はシッシツと顎先で牽制。無論、図太い奥方様は、この程度の迫害
ごときでへこたれたりはいしないのだ。両手を腰に押し当てて、ちろ
りとケネルを一瞥した。

「あらーん、そんなこと言っていーのかしらあ？ あたしはクレス
トの奥方なのよん？ なのに仲間外れにする気なおー？ これで

もあたし、領主の留守を預かってんだけどなあ。いわば領主の代わりよ？ 代・わ・り！」

「……勝手にしろ」

ぎりぎり拳を硬く握ってケネルは怒気をみなぎらせていたが、色々抗議を押し殺し、仏頂面で踏み出した。脅迫されては仕方がないとはいえ、後続を無視してすたすた歩く。

あつさり道に取り残されて、エレーンは口を尖らせた。だが、すかさず地を蹴り、両手でひっしと飛びついた。拿捕目標はポケットから突き出たケネルの腕。

ぎよつとケネルが驚愕顔で飛びすさった。エレーンはにんまり振り仰ぐ。勝手にしろとの仰せの通りに、それなら勝手にするのである。あたふた払うケネルに構わず、両手で腕にぶら下がる。勝手に無理やり腕を組み、るるるん前方を指さした。

「ねーねーケネルう」。すっごい数ね。なんだってあんなに色んな色の天幕があるの？ えーなにになに？ 青と黒とこげ茶ア？——くつら——い！ 天幕ったら普通白っぽくない？ あの色なんか意味があるワケ？ それともテキトー？ それとも趣味？ パツと景気良く明るい色にすればいいのに赤とか黄色とかピンクとか——（息つき）——わあ見て見て！ あ奥の方の青い天幕！ なんかあれだけ他より立派——え？ 今からあたし達あそこに行くの？ ねえーケネルちゃんと聞いているー？ もーなんとか言ったらどうなのよ！ ねーねーケネルう！ ねーったらねー！」

ケネルはすたすた無言で歩く。その仏頂面のこめかみには、怒りの符丁が複数個。（ちったあ黙っていられないのか！）と彼の苛立ちが書いてある。ケネル隊長、厄日である。

そこは多数の天幕で埋めつくされ、強い獣臭が鼻をついた。敷地の到る所に、薄絹の衣装の遊民が所在なげにたむろしている。足を投げてかつたるそうに歩く者、額を寄せて雑談する者、天幕の陰にしゃがみこみ、気怠げな様子で喫煙する者——怠惰で荒んだざわめ

きが低くうごめき、充滿している。年に一度の豊穰祭で各地から集集したもの、この度の襲撃騒ぎで催しが中止となってしまう、暇を持て余しているらしい。

入口の見張りをやり過ぎ、一行が中に踏み込むと、物陰でたむろす遊民たちは一様に倦んだような目を向けた。だが、一行に声をかけるでもなく、ただただ行方を追っている。

しばし彼らは胡散臭げにそうして眺め、それぞれ視線をふと逸らした。苦々しげな面持ちだが、とりたてて文句を言うでもなく、各々の輪の中へと戻っていく。原因は傭兵然とした二人連れだった。ケネルとファレスの姿を認め、急速に興味が失せたらしい。

大股で闊歩する二人の男に遅れぬように、エレーンは天幕群の広い敷地をきよろきよろしながら早足で歩いた。先行するケネルとファレスは、敷地の北へと向かっている。

前方の隅の木の陰に、大きな木箱が雑然と置かれていた。すすけた黒っぽい木板には、文字とも記号ともつかない書き殴りが原色の塗料で記されており、いずれの箱にも頑丈な鉄格子がはめられている。鳴き声が聞こえてくるから、見世物に使う猛獣が入った檻らしい。つまりはあれが敷地中に立ち込める獣臭の出所だ。

そうした獣の檻の中でも一際大きい頑丈な檻が、他の獣の檻とは離され、日陰の片隅にひっそりとあった。檻の鉄格子の間から、輝くような純白の毛皮の前脚が突き出ている。

「うっわあ！ なにあれ！ 真っ白い熊？」

エレーンは瞳を輝かせ、両手を振って駆け出した。かつたるそうに行き来していた舞台衣装の遊民が、いぶかしげに振り返る。物陰に座りこんだ幾人かが、気怠そうに顔をあげた。足を止めた連れの二人が、素早く無言で目配せする。ほどなく檻に到着し、エレーンは満面の笑みでしゃがみ込んだ。

「あんた、熊？ にしては、なんか毛足が長いみたいな？」

藁と毛布が敷かれた床に、白い獣が四肢を投げ出し、気怠そうに寝そべっていた。この檻の木壁にも赤い塗料の書き殴りがある。他

の檻に比べて囲いの木板は格段に厚く、前面にはまった鉄格子も太い。

白い獣が頭をもたげた。人の声に反応したのか、白い毛皮の前脚を折り、大きな体をのっそり起こす。前脚の毛皮がさわりと揺れて黒く鋭い爪が覗いた。鉄格子から足先を出し、何かをねだるように空を掻く。くんくん匂いを嗅ぎながら、濡れた鼻面を突き出してくる。

「かつわいいっ！」

真っ白な毛皮につぶらな瞳が映えるのか、愛嬌のある顔つきだ。ほくほく顔をほころばせ、エレーンは瞳を輝かせる。こんなに大きな猛獣が自分に興味を示した事それ自体が嬉しい。白い獣は窮屈そうに体を屈め、真っ白なこうべを垂れている。獰猛なのかと思ったが、拍子抜けするほど大人しい。従順な様に庇護欲をそそられ、白い獣に手を伸ばす。頭の一つもなでてやろうと思ったのだ。手が鉄格子に近づいて——強く肩が引き戻された。

「——なによ」

むっ、とエレーンは振り向いた。つかんでいたのはケネルである。「近寄るな」

「はあ？　なんでよ」

エレーンは膨れっ面で腕を組む。こんな野生の大型獣と接する機会など滅多にない。だが、肩をつかんだケネルは真顔。

「そいつはバクーだ。人を食らう」

「——この子がバクー？　あの有名な？」

「あんたも聞いたことくらいはあるだろう。国境の森の通行不能は、こいつが出るのが原因だと」

へえ、とエレーンはまじまじ瞬き、ケネルと獣を見比べた。だが、見れば見るほど綺麗で可愛い生き物だ。黒く濡れたつぶらな瞳に、頬擦りしたくなるようなふっさふさの真っ白い毛皮——
「うっかり手でも出してみろ。あっという間になくなるぞ」

「……へ、へえ」

うつかり出しかけた右の手を、エレーンはあたふた引っこめる。

己の迂闊さに生きた心地もしない。ケネルは肩を突き放し、ぶつきらばうに歩き出した。「無闇に天幕を覗くなよ。引っ張り込まれるぞ」

「――な、なあにばかなこと言ってるのぉ」

慌ててケネルの後を追いつ、エレーンは引きつった笑いで軽く手を振る。無論、覗く気満々である。

「や、やーね。なんで、あたしがそんなことー。――あ、ほら、知り合いとか別にいないしいー？」

「だからこそだ。あんただって子供じゃないなら、その意味くらいは分かるだろう」

ぱちくり瞬き、ぽかんとケネルの顔を見る。分からないらしい。

ケネルはげんなり嘆息した。「――身の振り方に気をつける。連中、暇を持て余しているからな。日頃から素行が良いとは言いが、動きの取れないこんな時なら尚更だ。まして、あんたみたいにとろそうなのはいい力モだ」

「と、とろいー？ あたしがあ？」

己の顔を指さして、エレーンはあんぐり絶句した。「とろい」などとは聞き捨てならない。だが、二人の連れは構うことなく歩いていく。

ケネルの上着の背中をつかんで、エレーンはぶりぶりついて歩いた。ちなみに、ケネルのそばに寄るのはいいが、あの野蛮な長髪は嫌だ。恐いし非道だし乱暴だし――不貞腐ってしばらく歩き、はつと息を止めて振り向いた。ケネルの上着をぐいぐい引っ張る。

「ねえねえ見て見て！ ほら、あそこっ！」

……懲りないのである。

「ねーねーケネル、今の見たあ？ あそこの大っきな天幕に、今、大勢入っていったわ。ねーちょっとだけ寄ってかない？ いいですよケネル。ねえってばねーっ！」

近づくことさえままならぬ天幕群の中なのである。自由に見学で

きるなど、こんな機会は滅多にない。

「楽しみ〜！ 何が始まるのかしら〜！」

「賭博だろ」

ケネルの方はにべもない。

「賭博う？——いやいやまっさか！ なに言ってるの、こんな真つ昼間っから不謹慎な。ケネルってば普通の顔して冗談ばっか。どうせ興行の練習とかで（しょー？）——」

「ここでは普通だ」

「ぬっ？——で（も）」

「自分と同じ倫理観を連中に期待する方が間違いだ。ああ参加しようなんて思っなよ。八百長は連中の十八番おはじだからな。あんたみたいな素人の堅気は身包みはがれて泣くのがおちだ」

「……あ、……さいですか」

財布をしつかと握りしめ突き出した己の利き手を、エレーンはもそもそ引っこめる。一気に反論を封鎖され、ぶちぶち不貞腐ってケネルを見た。もしかや機嫌が悪いのか？

無愛想な二人とはぐれぬように、エレーンはせつせと天幕群を歩いた。ぶらぶら歩いているようなのに、連れの歩調はかなり速い。うっかり余所見でもしようものなら、たちまち置いてけぼりを食らうこと請け合い。そして、川と街とに挟まれた大陸北端の草原は、徒歩で実際に歩いてみると、外から眺めるより遙かに広い。

ふと、エレーンは気がついた。前方右手の天幕の陰に、髪の長い男が一人、気怠そうにうずくまっている。きらびやかな薄絹の衣装と、鍛えられた体つき——芸妓団の一員らしい。力なく肩を落として、ゆるゆる首を振っている。ケネルの上着から手を放し、そろそろそちらに近づいた。背を屈め、小声で男に声をかける。

「——あのう、もしもし？ 大丈夫？」

うつ伏せた男が、緩慢な仕草で顔をあげた。案の定、その顔は病人のように青白い。顔つきは案外若々しいが、眼はとろんと気怠そうだ。焦点が定まらないのか、ぼんやりと小首を傾げ、どことなく

虚ろな面持ちだ。地に落ちた瘦せた右手がもちあがり、ふらふらその手を伸ばしてくる。

「え？——あ、あの？」

エレーンはたじろいで首を傾げた。手を貸して欲しいというのだろうか。だが、相手は見知らぬ他人の男だ。伸ばされた手をとるべきか、とつさに判断がつきかねた。とりあえず目線だけでも合わせるべく、しゃがみこんで顔を覗く。「あの、誰か呼んでくる？ 大丈夫です——かつ」

ぐい、と引つ張り戻された。首根っこを誰かにつかまれている。不躰なその手を払って、エレーンは憤然と振り向いた。

「今度はなにによっ！」

これで二度目だ。誰の仕業か分かっている。

「相手にするな」

案の定、ケネルが見下ろしていた。そして、今度も理由も示さず命令のみ。どうして、この男はこうなのか。意思疎通を図ろうとの努力に欠ける。エレーンは拳を握って抗議した。

「どーしてよ！ 真っ青な顔で座り込んでんのに！」

そうだ。今度は興味本位じゃない。ちゃんと正当な理由があるのだ。

「何かあつたらどうすんの！ あんなに具合悪そうじゃない！ 早くお医者さん呼ばないと！」

「放っておけ」

「だつてっ！」

「あんたには関係ない」

「——はああ!？」

エレーンは呆れ果てて不平を鳴らし、キツとまなじり吊りあげた。「なにそれ！ あるでしょー！ 断然あるでしょー！ だって、現に目の前で——！」

「相手にしなくていい。あれは中毒者だ」

別の声が割りこんだ。

面食らって言葉をのみ、エレーンはケネルの背後に目を向ける。声の主はもう一人の連れだった。あの端整な顔の長髪だ。足を止め、面倒そうに眺めている。これまでの道すがら声を発しなかった長髪が口を挟むとは露思わず、エレーンはしどもどしながら見返した。「な、なによ、中毒って——ああ、きのこか何かに当たって、お腹痛いとかそういう——」

「麻薬だよ」

「……ま、やくう？」

素っ頓狂に復唱し、エレーンは啞然と絶句した。確かそれは非合法な物ではないのか？ 長髪は構わず、事もなげな口調で続ける。

「バードには常習者が多い」

「——バード？」

それに応えることもなく、二人はさっさと踵を返した。話をぶつ切りで中断したが、気にした様子はまるでない。無礼なケネルに負けず劣らず、長髪もかなり無駄なようだ。いや、この際そんなことはどうだっていい。

エレーンはわたわた追いかけた。麻薬中毒がうようよいるなら、置いていかれてはコトである。

「——ね、——ねーねーケネル。バードって何？」

あくせく追いつつ一応訊くが、やはり、ケネルは足も止めない。説明する気はないようだ。

族長の息子 2

「そっぴゃ、レグルス族といえぱ」

ぶらぶら歩く長髪の隣で、ケネルはふと呟いた。「先頃、族長が倒れたとか。代理で今回来たのは確か――」

「ローイ」クレバンス。レグルス族長カルバス「クレバンスの一人息子。当年とつて二十五歳」

「――詳しいな、お前」

すらすら答えるファレスの顔を、ケネルは面食らつて見返した。ちなみに、何を見てもはしゃぎながら付いてくる好奇心の塊については一切無視の態度である。ふと何かに思い当たったようで、「ああ」と合点したように頷いた。

「あそこで以前、厄介になつたとか言つていたな。なら、息子とやらは知り合いか。だつたら引き合わせてくれないか。俺はまるで面識がない」

ファレスは足さえ止めずに即答した。「嫌だ」

「どうして」

「あれに捕まると、うぜえから」

「ファレスじゃ〜ん？」

甲高い声が割りこんだ。いやに張りのある男の声。怪訝に声を振り向いて、エレーンは驚愕して氷結した。

長い茶髪を背中にくつた、ひよろりと背の高い男が立っていた。いや、問題なのは、軽薄そのものの馴れ馴れしさではない。男の身形だ。頭にターバン、どピンクの柄シャツ、お星様模様のだぼだぼパンツに、かわいく折り曲げたズボンの裾からちらと覗く靴下は黄色と黒のシマシマか？そして駄目押し。彼の心中の welcome 度を代弁してか、肩にかかった真つ黄のターバン、向かい風にピラピラなびく。更にはポケットタイにはラブリーなお花――そこらをつろつく遊民たちもたいそう派手ないでたちだが、彼のど派手さ

は群を抜く。

原色バリバリど派手男は、歡喜の笑みで駆け寄った。「なんだよファレス。まじ久し振りだな〜！ 来るなら来るで知らせを寄越せばいいのによ〜！」

素早く背けたファレスの肩をむんずとつかんで引き戻し、あくまで逃げる脳天を問答無用ですり撫でる。

「お前あれからどーしてたわけ？ いきなり出てって音沙汰なしとお前もずいぶん殺生じゃねえかよ。俺が心配してるの知ってるくせに、なんで便りの一つも寄越さねえ！ このうすらとんかちのこんちきが〜！ このっ！ このっ！ 薄情者〜！——んで、なによ元気でやってんの？」

「——まあな」

ファレスは男に揉みくちやされつつ、邪険にその手を押しのける。だが、しっかと抱えたど派手男はファレスの背中をバンバン叩き、一方的に旧交を温め、再会の感動を分かち合う。己一人で存分に。

相手の迷惑どこ吹く風で歓迎の儀式を一通り終えると、男は連れに目をやった。あんぐり固まったエレーンを見つけて、ぽかんと首を傾げて停止する。仏頂面のファレスを見、ぶらぶらエレーンに歩み寄った。頭の天辺から足の先まで全身じろじろ眺め回して、くいと親指でエレーンをさす。「誰これ堅気の街の娘^こじゃん。お前の彼女？」

大変気さくな御仁である。

ファレスはたるそうに頭を掻いた。「お前、領家の奥方の顔くらい覚えておけよ」

「奥方？」

ふと聞き咎め、ど派手男が柳眉をひそめた。ぽかんとしているエレーンに、ぶらりと肩で振り向きざま、ずいと顔を近づける。

「な、なによ」

長身の男が覆いかぶさり、エレーンはたじろいで後ずさる。背中にくっつた明るい茶髪が動作に伴い、ふわりと揺れた。表情を消し

た端正な顔が、間近でじつと見つめている。奇抜な風体が目を引くが、顔の造作は整っている。意外にも美形だ。心の読めぬ茶色の瞳綺麗に梳いたしなやかな髪。明るい茶髪が衣装の肩に落ちかかる。大きな帽子のつばの陰、長いまつげが瞬いて、

「——へえ」

薄い唇の端が持ちあがった。

「これが例のメイドあがりね」

カチンとエレーンは顎をあげた。

「ちよつと、あんたねー！」

無礼&馴れ馴れしい態度だ！

ど派手男は「……あん？」と振り向き、長身の背をひよいと屈めた。そして、

「かつわいいなあ、あんた」

ほくほくエレーンに笑いかける。

「——か、——かわ——？」

予期せぬ事態発生。

「そーか。これが奥方様かあー」

びたり、とエレーンは口をつぐんだ。気になる言葉があったから。

「おねーさん、お名前は？」

彼はとても愛想が良い。

「エレーンよん！ よろしくねんっ！（お、おねーさんって言った

——！？）」

はきはきエレーンはお返事しつつも、感動の語感をジーン……と全身で噛み締める。テンション一気に急上昇。生きてて良かった。本当に良かった！ 若干二名の朴念仁に爪の垢煎じて飲ませてやりたい！

両手を組んでうるうるしながら見つめていると、ど派手男は人懐こく笑った。「そ。俺、ローイっての。こっちこそよろしくな。奥方様」

「え、ええん——！」

ぽー…… っとのぼせた赤面で、エレーンはへらへら何度もうなづく。獲物をあつさり手中にするや、ローイは「さて、お次は——」と振り向いた。完璧に一枚上手である。視線の先には、呆気にとられて突つ立ったケネル。

「で、そちらさんは？」

もう一人の連れの素性を、旧友ファレスにさばさは尋ねる。頬を染めて溶け出した空中遊泳中の奥方様は、今しばらく使い物にならない。

ファレスは絶句の顔で見返した。「本当に何も知らねえんだな、お前は。そんなんで、よくも務まるもんだ、族長の息子なんて大任が」

気を取り直して、隣のケネルを顎で指す。「奴がああケネルだよ」「ケネルさん？」

名前を「さん」付けで復唱し、ローイは（だから何）と顔を見ている。ファレスはげんなり頭を抱えた。「だからロムの大將だ。こいつの顔くらい覚えておけよ。腐っても族長の息子だろ」

「しょうがねえだろ。かくしゃくとしたあの親父が、ぱったり倒れて寝付くとは、誰も夢にも思わねえもんよ」

ローイは口を尖らせて、己に非はない、と不貞腐る。片足を軸に、くるりと肩で向き直った。「じゃあ何。あんたが総大將かい。よろしくなケネルっ！」

満面の笑みで気さくそのもののご挨拶。ケネルはたじろぎつつも見返した。「……あ、ああ」

ケネル隊長、押され気味。だが、ここへはただ遊びに来たというわけではないのだ。すぐさま態勢を立て直す。

「早速で悪いが、協力要請に来たんだが」

真顔に戻って切り出すと、ぽかん、とローイが見返した。「……協力？ 俺に？」

喜色満面、目を見開き、己の顔を嬉々として指す。

「ロムの大將が要請ってか！——ああ、わかった任せておけ！ 何

でも俺に言ってくれ！　なんだって協力するからさ！」

いやに張りある発声の大音量で快諾され、ケネルはたじろいで後ずさった。「……た、助かる」

一方的に親密な彼らのぎくしゃくとしたやり取りを、ファレスは我関せずで眺めていたが、話はずいと思ったか、肩をすくめて踵を返した。「じゃ、俺はこれで」

「帰るのか！」

ひっしとケネルが腕をつかんだ。それに目をやり、ファレスは無下に払いのける。「言われた通り、引き合わせたる」

即座にケネルは食い下がった。

「もう少し付き合えよ。こういうのは、俺ちよつと（苦手——）」

「行く所があんだよ」

きっぱりファレスはにべもない。ケネルは恨みがましく目を向ける。「……また女の所かよ」

「わかってんなら一々訊くな。じゃあな」

ズボンのポケットに手を突っこみ、ファレスは構わず背を向けた。ぶらぶら歩く長髪の背が、次第次第に遠ざかる。青空に立ち並ぶ天幕と、ざわざわ行き交う舞台衣装に、すぐに紛れて見えなくなつた。

族長の息子 3

「で、協力ってなに。俺、どんなことすりゃいいの？」

ローイがあっけらかんと振り向いた。

ああ、とケネルは我に返る。

「実は――」

ローイはおもむろに腕を組み、神妙な面持ちで聞き入っている。

彼の先のキャラから推せば分かっているのか微妙な線だが、事ここに至った経緯を一通り聞き終えると、鷹揚に笑ってうなずいた。

「よっしゃ！ このローイ＝クレバンス、確かに依頼を請け負った！」

「……どうも」

ケネルはたじろぎ笑いで身を引いた。ローイ＝クレバンスはからから笑う。

「話は決まりだ。そうとなれば、大船に乗った気でいてくれよ！」

ケネルは曖昧な笑みを浮かべている。胡散臭げな相手に構わず、ローイはエレーンに目を向ける。「まあ、わざわざ出向いて下さったんだ。ちよつと、うちの連中に引き合わせしてもらおうかな」

「……え、あたし？」

突然自分に話を振られて、エレーンはぱくり見返した。族長代理は朗らかに笑う。「な」に心配しなくていい。気のいい連中ばかりだよ」

「じゃ、俺もこれで」

間髪容れずに、ケネルは出口に踵を返す。そそくさ逃げる上着の端を、エレーンはむんずと捕まえた。

「……なんだ」

不承不承振りかえり、ケネルは肩越しに嫌そうな顔。舌打ちの一つもしたかも知れない。エレーンはじっとり睨めつけた。「まさか、あたし一人を残して帰るとか言うんじゃないでしょうね」

「そうだが？」

ためらうことなく、ケネルは即答。エレーンはじたばたわめき立てる。「置いてっちゃいやっ！　一緒にきてっ！」

「どーして俺まで！」

ケネルは叫んで突っこんだ。不測の事態発生である。

「勝手についてきたんだろっが。俺はあんたのお守りじゃないし、連れてきた覚えも毛頭ないぞ」

苦りきったケネルの顔を、じいつ、とエレーンは凝視する。その手は上着をしつかとつかみ、片時たりとも放さない。ケネルもそれに対抗し、仏頂面で腕を組む。

突如勃発した睨めっこを、ローイは片足に重心を預けて眺めていたが、ぼりぼり茶髪の頭を掻いた。

「まあいーじゃん。せつかくだから、あんたも来なよ。大体うちの連中だつて、あんたの口から言った方が、ちゃんと話を聞くつてもんだよ。それともロムの大將さんは、俺らなんか下々の者とは、おかしくって話もできないってわけ？」

「……む」

ケネルが進退窮まり停止した。

「よーし！　みんな集まってくれい！」

のんびり怠惰な天幕群に、ローイが大号令をとどろかせた。

それから五分と経たぬ間に、三人は”お立ち台”の上に立っていた。ちなみに、この”お立ち台”、木箱を寄せ集めた代物である。

四方に散った遊民たちが、互いに顔を見交わして、かつたるそうに足を向けた。憩っていたところを邪魔されて、いずれも迷惑そうな顔つきだ。天幕の中にいた者も、近くの仲間に促され、入口シートを片手で払って、あくび混じりに外へ出る。

三人が立つ”お立ち台”の前に、黒山の人だかりができあがった。各所からぞろぞろ集合したのは、衣装を纏った面々だ。踊り子姿の美女たちも、ちらほら中に入り混じっている。しなやかな肢体に透

けた薄絹の衣装を纏い、絹のような長髪を頭の天辺で結い上げている。目元はややきつめだが、顔立ちは一様に整っている。

招集された一同は、隣と顔を見合わせて、ざわざわ訝しげにざわめいている。「これから何が始まるんだ」と言わんばかりの目、目――。

よそ者ゲスト二名は、不審の視線にいささか怯むが、ローイに気にした風はない。エレーンの肩を押し出して、もう一方の手を大きく広げた。

「クレスト領家の代替わりは、もう、みんな知ってると思うが、俺らんとこに奥方が、わざわざ挨拶に来てくれた！ 紹介しよう！ 領家の奥方エレーンちゃんだ！ 仲良くするように！」

（エレーンちゃんだア？）

エレーンは片頬をひくつかせた。あまりに能天気で気安すぎる紹介だ。小馬鹿にされた感も否めない。拳を握って抗議の用意――その時だった。

「……へえ。俺らんとこに、わざわざ出向いてくれたってのかよ」
人だかりの中から、戸惑ったような声が漏れた。

「お偉い領家の奥方様だろ、それが――」
不審にざわめく喧騒が、水を打ったかのように静まり返る。

（な、なに？ この変な反応は）

エレーンは密かにたじろいだ。皆に凝視されている。そう、気のせいだろうか。皆の真摯な注目を一身に集めているように思うのは――。次の瞬間、華やかな衣装の聴衆が、満面の笑みでどつと沸いた。

「いやあ！ 商都の人間ってのは垢ぬけてんなあ！」

「ほーんと可愛いわあ！ キヤー奥方さまあつ！」

人だかりの方々から、やんややんやの熱烈歓迎。口笛で囃^です者さえいる。

「……あ、あらん」

ぼつと頬を赤らめて、エレーンは両手で頬をはさんだ。「もう、

そんなあー。かわいいだなんてー。もー、そんな本当のことん——
！」

「いやんいやん、と首を振り、くねくね体をくねらせる。事あるごとに「メイドあがり」と揶揄されて、こんな快拳は久方振り。

「あーいやいや。俺らは色んな街に行くから、そういう違いはよく分かる！　ここの田舎もんとはえらい違いだ！」

「そ。べっぴんさんな上に気配りも抜群！　今度の領主はまったくいい嫁さんをもらったもんだな！」

「んーっ！　こゝんな可愛い奥方様は、あたしもほんと初めて見るわあ！」

　楽しげな口笛がピーピー吹かれ、片手を頬にやんやと囁す。

「も、もうつ！　いやあね、みんな。よく分かつてるじゃないのおゝ！　あんた達ったら見る目があるわね！　もおーこのゝお！」

　奥方様、一躍一同の人気者。実のところこの聴衆、うわっ調子の軽薄さと場当たり的なノリノリ感はぬぐうべくもなく見え見えなのだが、幸せ絶頂のエレーンにとっては、能天気であるうが、いい加減であるうが、そっちはどうでもいいのである。

　和氣藹々の歓喜の中、聴衆の一人がようやく気づいて顎をしゃくった。「んで、そっちの無愛想なにーちゃんはなに」

　今度はケネルが頬をひくつかせる番である。ローイは気にせずのたまった。「あー、この人はロムの総大将だよ。俺らに話があるんだそうだ」

「——ガーディ、アン？」

　一同、ぴたりと口をつぐみ、それぞれ隣と顔を見交わす。

「総大将って、まさか——」

「そついや、その草原に、ロムの部隊が詰めていたが」

　場がざわめき、一同の顔から笑みが消えた。ケネルの顔を盗み見て、ひそひそざわめき立っている。

「……おい、なんでガーディアンがこんな所にくるんだよ」

「知るもんかよ。俺に訊くな」

友好ムードは払拭され、一転、空気が様変わった。張りつめた緊張の中には、排他的な警戒が含まれている。

「な、なに……？」

打って変わった豹変振りを、エレーンは戸惑って見回した。そこにあるのは焦燥の入り混じった不安と動揺、いや、怯えのようなものが強いだろうか。おろおろしながら、ケネルを仰ぐ。「ね、ねえ、ケネル。どうしたの？」

ケネルはそれには目もくれず、無言で脇に押しのけた。強張った面々を端からおもむろに見渡して、静かな口調で切り出した。

「話とは他でもない。今日は協力の要請にきた。先の敵襲は周知と思うが、人員が出払っていて手が足りない。ついては、しばらく手を借りたい。本件は統領代理の意向でもあるので、是非とも協力願いたい」

「というわけだ」

ローイがパンパン手を叩き、そつない笑顔で締めくくった。

「デイルの兵を撃退するまで、俺らは大将の指揮下に入る。御大自らこうして出向いてくれたんだ。ここはひとつ快く協力しようじゃないか！——な、みんな、よろしく頼むな！」

街へと続く夕暮れの道を、ケネルは疲弊しきって歩いていた。奇襲を受けて戦った、というのではない。あの後ローイに捕まって散々話を聞かされたのだ。実のない話を延々と。

普段であれば即刻逃げるケネルであるが、しかし、相手は族長代理。無下にはできない事情もあって、しばらくは我慢して付き合ってもいたのだが、いつまで経っても終りそうもないので、ローイが席を外したわずかな隙に、連れを脇に引っかかえ、即行逃げ出した次第である。

じんじん痺れた耳の奥には、甲高い笑いと喧騒が未だ取れずに渦巻いている。もっとも、只今一番人氣のエレーンは周囲に散々持ちあげられて、すこぶるつきの上機嫌。一人で照れてはえへらへらと

舞いあがり、にまにましながら歩いている。案の定、はしゃいでケネルを振り向いた。

「んねっ！ んねっ！ ローイってばほんといい人ねっ！ みんなもとっても明るくて！ 遊民の人があんなに気さくで親切だなんて、あたし、ちーっとも知らなかったわあ！」

とろけそうな顔で、にんまあつ、と笑う。

木箱のお立ち台を下りてから、ずーっとこの調子である。ケネルは不機嫌に目を向けた。「連中は口が上手いんだ。ちょっとチャホヤされたからって、いい気になるな」

ああしたお喋りなお調子者とは、ケネルは反りが合わないらしい。へらへら笑いをふと引っこめ、エレーンは、きょとん、と振り向いた。そして、にんまあ、と相好を崩す。

「それって焼きもち？ ね？ ねっ？ ケネルってば焼きもちやいてる？」

無敵状態、継続中。なにせ、今は上機嫌。

「——そんなじゃない」

ケネルは憮然と返事をした。そっぽを向いたその顔には（どういう頭してんだこいつ）と荒んだ感想が書いてある。エレーンはやれやれと嘆息した。「自分のウケが良くなかったからって、すねちゃってさ」

ぎろり、とケネルが振り向いた。

「お前みたいに浮わつついたのが一番危ないんだ！ 今がどんな時だか分かっているのか！ へらへらしてて、おっ死んだって知らないぞ！」

「でも、それに引きかえ、なんでかな」

何を思い描いているのか、エレーンは上目使いで首を傾げる。ちつとも話を聞いてない。ちら、とケネルに不思議そうに目を向けた。「ケネルたちって、なんか遊民っぽくない？ みんなみたいに派手じゃないし、陽気じゃないし、むしろ暗いし」

「あんな極楽とんぼと一緒にするなっ！」

とうとう、がなって怒鳴りつけ、ケネルは地面を踏んづけて、振り返りもせずに歩いていった。

恋敵

梢をそよがせる路地の木陰で、ファレスは苛立ちを押し殺して嘆息した。

「――何故、こんな所にいる」

小柄なその背がぎくりと見るからに跳ねあがり、目元をぬぐって立ちあがる。「――あ、あの、お水をやりに」

「水だア？」

おつ被せるようにして復唱し、ファレスは忌々しげに舌打ちした。
「今がどんな時だか、あんた、本当にわかつているか」

「も、申し訳ございません。けれど、この暑さでほうっておいたら、みんな枯れてしまいますし」

散々街中を駆けまわった拳句にようやく姿を見出したのは、別邸の裏庭の隅だった。水滴したたる植木鉢の前で、ひっそり膝を抱えていた。しゃがみ込んだ足元には、水滴に輝く銀のじょうろ――かのクレスト公の愛妾サビーネ。この領家の別邸は避難を要する地域にある為、身柄を移したはずだった。閑静な館の庭は豊富な緑であふれ返り、家の中にまで植木鉢がある。

「全部あんたが世話しているのか」

いささか呆れてそう問えば、サビーネはおどおど、ぎこちなく微笑う。「ええ。綺麗でしょう？」

「物好きだな」

邪魔な葉先を指ではじいて、ファレスは生い茂った生垣を出た。

あの育ちの良さそうなサビーネが、あんな野蛮で凶悪な輩に何故好意などを寄せるのか、いささか不可解な気がしたが、そんなことなど、どうでも良かった。

（な）によ。あっちはあっちでヨロシクやってんじやない）

エレーンは冷ややかに眺めやる。ケネルと別れて屋敷に戻り、裏庭を散歩していたら、とんでもない光景に出くわした。外出したらしいサビーネが男に連れられて戻ってきたのだ。相手は柄悪く乱暴な、仲間内から副長と呼ばれるあの男。初対面の宿の亭主を吊るしあげ、敵軍を爆破して吹っ飛ばし、その非道をなじった途端、いきなり胸倉つかまれた、残忍冷酷な吊り目の長髪。ケネルと赴いた天幕群で、用があると帰ったが、つまりはサビーネとデートだったというわけだ。

微笑んで歩いてくるサビーネを眺めて、エレーンは憮然と腕を組んだ。あのおやかな妾のせいで、こっちはダドリーと喧嘩したのに。そして、酷い別れ方をした。なのに、全ての元凶サビーネときたら、別の男と楽しくデートし、平気な顔ではにこんでいる。ダドリーの心もダドリーの子供も温かい家族も何もかも、こちらが焦がれるあらゆるものを、全て手中にしているくせに。

「どこ行つてたの？」

挨拶しかけたサビーネが、面食らったように立ち止まった。笑みをぎこちなく頬に乗せる。「——ええ、屋敷の草木に水をやり」

「あら。遊びに行つてたのかと思つたわ」

「——あの、わたくし、あまり外には——その、少し恐くて」

でも、男と一緒になら喜んで外出するわけだ。まったく呆れてものが言えない。そして、彼女の言い分を信じるならば、このやんごとなき姫君は、病弱なのか、神経が細いのか、あの街外れの妾宅からほとんど外に出ないらしい。エレーンは冷淡に眺めやる。

「でも、あーゆーのは浮気っていうんじゃないのかしらあ？　こういう階級の人たちのことって、あたし、よくは知らないけど、そういうのもアリなわけ？　ほんと、あなたは幸せよねえ」

困惑したように視線をそらし、サビーネは長く優美なまつ毛を伏せた。

「一生、妾と呼ばれても、ですか」

エレーンは詰まって口をつぐんだ。「妾」という語の思わぬ暗い

響きに動揺する。失言に気づいて、遅まきながら、たじろいだ。

「ご、ごめん変なこと言っちゃって！ そんなこと、あたし、考えたこともなくて」

「…… お優しいんですね」

サビーネはふわりと微笑んだ。

「エレーンさんが羨ましい」

微笑を湛えた横顔が悄然として見えたのは、西空を染める夕焼けのせいばかりでもなかったろう。サビーネは、そして、ゆつくりとダドリーとの馴れ初めを淡々と語った。

植栽生い茂る広い庭には蒼い帳が降りはじめ、昼の光を刻一刻と失っていく。重く苦い時だけが、静かに周囲にふり積もる。赤に染まった夕暮れの庭に、サビーネは微笑んで立っていた。涼しくなった夕刻の風が彼女の髪をそよがせて、庭をさらさら行きすぎていく。後ろ手にして邪気なく笑った。

「わたくしね、普通にお嫁に行くものとはかり思っていました」

無防備な心を驚掴まれて、エレーンはぎくりと硬直した。

「このお話を頂いた時には、わたくしはまだ十五の子供で、年の近い姉が二人、家にはまだおりましたから、縁談ならば姉の方から、とそう思っておりまして。なので、あの時には本当に驚いてしまっ
て」

クレスト領家とカレリアの商家の絆を強めるこの縁談。ダドリーとの年齢の釣り合いから、彼より年下のサビーネに白羽の矢が立ったのだろうが、理由はそれだけでもなかったろう。このサビーネは誰が見ても愛らしい。商人の自慢の娘だったに違いない。姉をもしのぐこの器量が選出された一因であろうことは想像に難くない。サビーネは静かに笑みをたたえて、暮れゆく夏空をゆつくり仰いだ。

「突然わたくし一人だけ、わけもわからぬまま、こちらの方に参りまして。けれど、姉も母も友人も、こちらには知り合いがおりませんし——。屋敷の使用人にも口をきいてもらえなくて、わたくし困ってしまいました。正直に言くと、何故わたくしばかりがこんな目

に遭うのかと――」

愚痴を漏らしたくらいだから、自らの境遇を嘆かぬわけでもないのだろうに、彼女ののんびりとした物言いでは、こことは別の世界で起きた他人事のように聞こえてしまう。暮れゆく空を眺めたまま、くすりとサビーネは小さく笑った。「あんまり心細いものだから、屋敷をこっそり抜け出して、逃げ帰ったこともありました」

「――しょ、商都につ？ 一人で？ あんたが？」

思わず続け様に疑問を發して、エレーンは目を丸くした。当のサビーネは「ええ、そうですね」と頓着しない。

「そ、そうですね、って……あんた、ね……」

エレーンはあんぐり絶句した。商都までの道のりは、大人でも難儀する遠距離だ。まして、伝^つても土地鑑もない少女の足では、更に困難を極めたらう。

「一体どうやって！」

「ええ。屋敷を出たまでは良かったのですが、すぐに街道で迷ってしまつて。途方に暮れておりましたら、商都行きの荷馬車が通りかかりまして。馭者がどこの者かと訊くものですから、父の名を申しましたら、わたくしの商都の実家まで送り届けて下さいました」

「……ど、度胸あんのね、あんた」

エレーンはしとどに冷や汗を掻いた。その荷馬車の商人とやらは、大方、礼金目当てで館に連れて行つたのだろうが、もしも運が悪ければ、手もなく誘拐されたらう。このサビーネの家のように資産家であれば尚更だ。世間の世知辛さを知らない彼女は、けれど「そうですねの？」と釈然としない様子で微笑んで、話の先をおつとりと続けた。

「あの時の商人は親切にして下さいましたが、商都はやはり、とても遠くて。それでも、やっと家に戻れると思つて、頑張つて我慢致しました。けれど、やっとの思いで帰りつけば」

ふと口をつぐんで言いよどみ、弱々しく微笑つて、ぽつりと続けた。

「父に、叱られてしまいました。真つ青になつて飛んできて、ノースカレリアに戻るようと。お前の部屋はここにはない、帰る家はないのだと、わたくし、そう言われてしまつて」

エレーンは眉をひそめて目を逸らした。頼みの父に突き放されて心の中いかりだつたらう。自らの言葉を噛み締めるように、サビーネは口をつぐんでいる。やがて、気を取り直し、きつぱりと言いきつた。

「それで、やっと、諦めがつきました」

屈託なく笑つてみせるが、笑顔はどこか頼りない。エレーンは密かに嘆息した。なんだか嫌な展開だつた。喜び勇んでやつてきた自分と、生家の都合で送り込まれたサビーネとでは、天と地ほども経緯が違う。サビーネの声が淡々と続ける。

「わたくしが家出などしたものだから、旦那様がとても気にかけて下さつて。毎日のように様子を見にきて下さるのですが、わたくし、旦那様のことがとても怖くて」

「怖い？」

ふと、エレーンは聞き咎めた。

「もしかしてあいつ、乱暴なことでも？」

ダドリーには、とある前科があるのだ。サビーネは微笑んで「いえ、そのようなことは」とたおやかに首を振る。確かに、ぶっきらぼうな面こそあれ、ダドリーは威圧的な手合いではない。むしろ高貴な生まれには珍しく気さくすぎるくらいがある。まして、相手の弱さに増長し、威張り散らすような真似などしない。愛らしい相手なら尚のこと、さぞや楽しく通いつめたに違いない。エレーンは怪訝に目を向ける。「だったら、どうして」

「——あの、父以外の殿方とは、わたくし話したことがございませんので」

おっとり補足を入れられて、エレーンはぱちくり瞬いた。

（そんな人種も、世の中にはいるんだ……）

腕を組み、今更ながら、しみじみうなずく。本物の深窓の令嬢な

のだ。人間の質が全く違う。それにしても——とうかがった。とぼけたことを無理なくのたまうこの無邪気さ。

——誰かに似ている。

エレーンは密かにいぶかしんだ。こんなとぼけたやり取りを、以前にもどこかでした覚えがある。誰だったかと考えてみるが、けれど、どうしても、わからない。その彼女と会ったのは、それほど昔ではないはずだ。回顧にまつわるこのほのぼのとした感覚は、身近な人物のはずだった。なのに、気持ちが悪いくらいに出てこない。その思い出の箇所だけが嚴重に封印されたかのように。

「こちらに戻ってからというもの、ずっとしよげていたものですから、旦那様が屋敷から連れ出して下さって」

柔らかな笑みさえ頬に浮かべて、暮れかけた夏空をサビーネは仰いだ。

「手をつないで街を案内して下さって、色々な店に連れていって下さって、豊穣祭の人ごみを一緒に歩いて下さって」

かつての思い出を楽しそうに披露する。そのどれもこれもが、すぐにも忘れてしまいそうな日常のささやかな場面ばかりだ。だが、目の前の彼女にとっては、何気ない記憶の一つ一つが、かけがえのないものなのだと痛いほどに伝わってくる。

「見世物に連れていって下さって、屋台で指輪を買って下さって、それから、わたくしを——」

幸せをかみしめるような横顔が、ふと、そこで言いよんだ。サビーネは戸惑ったようにうつむいて、はにかむように微笑んだ。

「……とても、氣遣って下さって」

そつと胸で握った手には、銀のチェーンが通された、いささか古びたペンダントトップがあった。何を思い起こしているのか、そのまま、しばし思い出に浸る。長いまつ毛をゆっくり瞬き、幸せそうに微笑んだ。

「それで、わたくし、旦那様を大好きになりました」

空にかかった夏雲が、夕陽の赤に照らされていた。クレスト邸の

緑の庭に、夕刻の涼風が吹き抜ける。こぼれるように咲いている頭でっかちな花々が、夕風にさらわれ、ゆらゆら揺れる。彼女に悪気がないのは分かっていた。

見るもの全てを蹴り飛ばしそうな勢いで、エレーンは屋敷の廊下を歩いていった。サビーネは無論、あの彼との思い出話を何の気なしに語ったのだろう。共通する話題など、それ以外にはないのだから、だが、ささくれ立った心には些細な言動の一つ一つが、一々神経に引っかかる。

「——ダドの奴！」

エレーンは苛立ちを吐き捨てた。自分は今や、豪華な屋敷の女主だった。誰もが羨むそれらのものは、全て自分のものだった。ここにあるのは、かつて胸躍らせた上流階級の憧れの暮らしだ。だが、豪華な屋敷も、憧れの暮らしも、ささくれ立った心には何の慰めにもならなかった。この屋敷はいかにも広い。だが、かつてラトキエ邸にいたエレーンの目には、どんなに館内が広かろうが、所詮はどれほどのものでもない。そして、華美で豪華な装飾などは、見慣れた目には三日で飽きる。

鬱屈した気持ちをぶつけようもないままに、階上にある自室に向かった。赤絨毯を踏みしめて、エレーンはひたすら歩いていた。妬ましかった。忌々しかった。腹立たしかった。どうしようもなく。

荒れ狂う胸を占めるのは、ただ一人の面影だけだ。長い黒髪をなびかせて、赤く染まった夕刻の庭に、ひっそりたたずむあの姿。サビーネは、なんて清らかにたたずむのだろう。なんて無邪気に笑うのだろう。かつて、あんな娘を見たことがある。他人を間違っても貶めることのない、まぶしいほどの純真さ。人を惹きつける大きな瞳、ほっそりした白い首。そして、たおやかなあの肢体。無垢な笑顔はまるであの——

得体の知れぬ焦燥が、不意にどす黒く湧きおこった。そう、——まるで、あの娘を見るようだ。

ようやく自室に辿りつき、ドアを叩き付けるようにして室内に入った。部屋をずかずか突っ切って、窓辺のベッドに身を投げる。

荒んだ気分をもてあまし、エレーンは親指の爪をじりじり噛んだ。どれほど気に食わなかつたが、今更おめおめ戻れはしない。あんなに盛大に送り出されて、どの面下げて戻れと言うのだ。そう、帰る場所がないのは、あたしだって同じよ。

魔の刻

手にした紅茶を卓に戻して、エレーンはちらと壁を見た。

サビーネと別れ、自室に戻った数刻後、ふらりとケネルがやってきた。だが、元より素っ気ない彼との会話は、やはりというべきか長続きしない。ケネルが世間話につき合うなどは以ての外、興味がひと度失せた日には、話を打ち切ってしまうからだ。

今も彼は相槌ひとつ打つでもなく、戸口付近の壁にもたれて腕を組み、じつと黙りこくっている。何をするというでもなければ、何を言うというのでもない。それなら夜分に何しに來たと文句の一つも言いたくなる。普段は顔を見た途端、あんなにうるさそうに逃げ回るくせに。そもそも、領邸に出向くような用件が、ケネルにあるとは思えない。

ふと、それに思い当たり、エレーンはケネルを盗み見た。彼はもしや、返事を聞きにきたのではないか。だから人目のない夜分を選んで、わざわざ居室を訪問した——？ どぎまぎうつむき、汗ばんだ手を強く握る。

（……いつそ、頼んでしまおうか）
あのことを。

ケネルの「誘い」が気になった。皆が引き揚げてきた夕暮れの道で、彼から言われたあの言葉。

『あの女とガキ、始末してやろうか』

気がつけば、また考えている。彼女らのいない明るい未来を。あの母子がいなければ、いや、サビーネさえいなければ——。

馬鹿な考えと知ってはいる。頭の中ではわかっているのに、想いはそれでも膨れあがり、自分で自分を止められない。愚かで危うい不毛な願望、それは今や、再考の余地もないほどに巨大に膨れあがっている。

ここ当主の居住階には、主の許可なくして立ち入れない。階段の

下に不寝番が数人いるだけで、必要最小限の使用人と、客間に例の母子がいるくらいのもの。つまり、廊下にも客間にも、ほとんど人影は見当たらない。居室内は元より然り、”それ”を今、依頼しても、見咎められることはない。要請するなら、今しかない。

——あの母子の殺害を。

エレーンは苦しくなつて息を吐いた。もしも、それが実現するなら、もうこれ以上苦しまずに済む。これ以上悩まずに済む。あのダドリーと二人きり、真つ当な生活を営める。ダドリーと二人、幸せな家庭を築くことができる。それなら華やかな商都を出、知己さえいない片田舎まで嫁いで来たのも納得できる。ならば、味方がいなくても、胸を張れる自信はある。「頼む」と一言、告げるだけいいのだ。何をする必要もない。報告を待ちさえすれば、それでいい。それで全てが劇的に変わる。望む全てが手に入る——

何かが倒れる音がした。

物思ひから引き戻されて、エレーンは扉に目を向ける。

「……なにかしら」

どことなく、あわただしい気がした。慌てて走っているような——。階下からの物音だろうか。いや、階下にしてははっきり聞こえた。音源はここから案外近い、そんな気がする。だが、この階は無人であるはずだ。この部屋の他に人がいるとすれば、客間に母子がいるくらい——

壁で腕を組んでいたケネルが、背を起こして戸口に向かった。扉をそつと細く開け、隙間から廊下をうかがっている。

「どうしたの？ ケネル」

ケネルはわずか目をすがめ、何か小さく罵倒した。ボタンとすぐさま扉を閉じて、元いた壁に戻っていく。エレーンは怪訝に目を向けた。「どしたの、ケネル。今の音って——」

「なんでもない」

ぶつきらばうにケネルは遮り、元いた壁に寄りかかった。それ以上の詮索を拒むかのように、再び胸で腕を組む。そうした素っ気な

さはいつものことで、普段と何ら変わらない。だが、ほんのわずかではあるものの、明らかな温度差を感じとれた。

廊下の物音に耳を澄ますと、やはりどこことなく騒がしい気がする。階下で見張りが騒いでもいるのだろうか。勤務中に大の大人が？　どうも何かが釈然としない。廊下に通じるドアを見て、壁のケネルを振り返る。「でも、今、確かに変な音が――」

「デイルの兵が入り込んだらしい」

鬱陶しげにケネルは応えた。反論しかけたその途端、更なる応酬を封じるように真っ向から目を向けた。

「今は危ない。部屋から出るな。全てが済むまで、ここにいろ。いいな」

「……う、うん」

言い募られて面食らい、エレーンとはつさに口ごもる。頭ごなしに命じられ、従う以外の選択肢がない。

容易く相手を捻じ伏せてしまうと、ケネルは再び腕を組んだ。彼はいつも仏頂面で不機嫌そうではあるけれど、今日はいつもにも増して機嫌が悪い。昼のローイのお披露目会にかなり無理やりつき合わせたが、それを根に持っているのだろうか。

あらゆる干渉を拒絶すべく、ケネルは目を閉じている。こうなつてしまつたら、いくら訊いても何も応えてはくれないだろう。エレーンは密かに嘆息し、（でも、変よね）と首をかしげた。

何かが意識に引かなかつた。明らかに手持ち物沙汰であるようなのに、ケネルは壁にもたれたままで引き揚げようとするでもない。そうかといって、話しかけてくるでもない。用件があの子の返事なら、もつと率直に尋ねるはずだ。ならば、ケネルは、何故いつまでも、あそこにいるのだ？

ケネルの様子が変だつた。何かを隠しているような。じっと目を閉じたあの姿は、耳を澄ましているように見えなくもない。そう、喻えは悪いが、見張られてでもいるような――

（――あたしのことを？）

得体の知れぬ禍々しい不安が込みあげた。エレーンは落ち着かない気分で目をそらす。ふと、それに気がついた。

（どうして、あんな物音だけで、ディールの兵だとわかったのかしら）

ケネルは「らしい」と言っていたから、姿を「見てはいない」はず。それでも、はつきり「ディールの兵」と特定した。

胸騒ぎがした。じわじわ違和感が広がって、これまでのやり取りを無意識のうちに振り返る。その一つ一つを吟味する脳裏に、今しがた聞いたケネルの言葉が、ふっと唐突に浮かびあがった。

『今は危ない。部屋から出るな。全てが済むまで、ここにいろ』

——全てが、済むまで？

急速に、喉が渴いた。

知らず握りしめた指先が、微かに小刻みに震えだす。何故ケネルが「ディールの兵」と知っている？ 何故ケネルはここに来た？

何故自分を見張っている？ 勘のようなものが働いた。今、何が起きているのか、きっとケネルは知っている。ならば、今の物音は、もしや

——もしや！

「どこへ行く」

扉に向かおうと身じろいだ刹那、間髪容れずに声がした。堪りかねたような苛立った声だ。エレーンは恐る恐る振り返る。もたれた壁から、ケネルが背を引き起こした。

「あんたは本当に落ち着きがないな。部屋を出るなと、今言っただかりだろう」

平素の落ち着いた物言いだ、声に反してケネルは真顔、すぐにもやってきて拘束しそうだ。ゆっくり、こちらに近づいてくる。それを凝視し、目をそらし、エレーンは唾を飲みこんだ。

「まっ！ 野暮なこと訊かないでよ」

にんまり笑って、ちょい、と手を振る。

ケネルが面喰らったように立ち止まった。片方の足に重心を預け

て、いぶかるように眺めている。

「んもー！ いやーね！ そんなこと、あたしの口から言わせるつもりなのお〜？」

きよとん、とケネルが瞬いた。ばつ悪そうに目をそらし、元いた壁に引き返す。脱力したように背を戻した。

「——あ、ああ。悪い」

こほん、とエレーンは咳払いした。壁のケネルを横目で見やって、そそくさ居室の出口に歩き、冷たいドアノブに手をかける。しばし、そのままためらって、おもむろに扉を引き開ける。するりと廊下に滑り出て、ケネルの気まずそうな顔をうかがった。「……あー、ケネル？」

「なんだ」

ケネルが慚然と目を向ける。扉の向こうから、ちよつと駄目押し。「覗きにくんじやないわよ？」

「——誰が行くかつ！」

怒鳴り声に背を押され、エレーンはそそくさ駆け出した。

あの妙な音はもしや——もしや、ケネルが、

——先走った？

エレーンは薄暗い廊下を駆けていた。事情を聞こうにも、広い廊下に人影はない。日常業務を既に終え、使用人も引き揚げてしまったのだろつ、光度の落とされた照明だけが、高価な絨毯を白々と虚しく照らしている。

とはいえ、妙な物音がしたというのに、誰一人として駆けつけない。何故気づかないとなじつてもみるが、公邸は常に厳戒態勢を敷いているため返って安心してしまい、邸内は意外と無防備だ。そうした領邸の内々の事情を無論知らないわけではない。他でもない自分こそが使用人の一人だったのだから。妙な音がしたのは恐らく、客室が並ぶ一角だ。そこにサビーネ親子の部屋がある。

件の客間に飛びこめば、だが、サビーネの姿は室内にない。すぐ

にそこを飛び出して、曲がり角で左右を確認した。親指の爪を噛み締める。

絨毯の廊下を息せき切って走りつつ、薄暗い邸内に苛々視線を巡らせる。息が切れる。喉が焼ける。この屋敷はなんだって、こうも無駄に広いのだ！

エレーンはもどかしい思いで舌打ちした。何故さつさと断らなかつた。ケネルにもちかけられたあの話を。未練がましい浅はかな留保が、とんでもない事態を引き起こしてしまった。体の芯が凍りついた。どうしよう、あの母子の身に何かあつたら、

——あたしの、せいだ。

静かな廊下を一心に走った。あの姿を必死で捜し、前のめりで廊下を走る。汗が額をしたたり落ちた。息があがる。視界が揺れて胸が苦しい。あの物音が、どこからのものだか分からない。

目についたドアというドアを、端から闇雲に引き開けた。どこにいるのか分からないなら、屋敷中の部屋という部屋を手当たり次第に見て回るしかない。

暗い妄執に引きずられてしまっていた。自分は何を、思い違いをしていたのか。そう、とうにわかつていたはずなのに。

嫡子の存在は重要だ。北カレリア繁栄の為には、血統を継ぐ候補者は、多ければ多いほど好ましい。困い女めの存在もその一端。ならば、傘下に住まうあの母子を、愛し、慈しみ、見守ってやるのが、宗家を盛りたてるべき責務を負った領家の奥方たる者の務めではないか。

（——いた！）

エレーンは息を飲んで立ち尽くした。覗き込んだ五番目のドア、細く開けた空き部屋の重厚な扉の陰で、愕然として動きを止める。目に飛び込んだ光景は、ある種異様なものだった。母子は確かにそこにいた。あのサビーネとクリードが右側の壁に張りついている。だが、問題は、既にそこではない。

怯えて抱きあう母子の向かいに、予期せぬ者たちが立っていた。

軍服姿の三人だ。壁際まで後ずさった母子ににじり寄っている。

青と白との色鮮やかな軍服は、彼らが国軍の兵士であることを示していた。黒い蓬髪ほうまつのひげ面の男が、三人の侵入者の先頭だ。扉の裏にいるこちらには、幸いまだ気づいてはいない。

音もなく絨毯を踏みしめて、蓬髪はゆっくりと向かっている。相手を値踏みするかのように目をすがめて眺めやり、腰の軍刀を抜き払う。

刃の鋭い切っ先が、灯りにギラリと反射した。蓬髪ほうまつの兵士の無骨な片手が、無造作にそれを持ちあげる。

（——サビーネ！）

鋭く息を呑みこんで、エレーンは室内に飛びこんだ。

まばゆい白光が一閃し、視界が一瞬消えうせた。

重い衝撃に突き飛ばされて、肺が圧され、息が止まる。背中が激しく焼けついた。何が起きたか分からない。離れた床に、あのサビーネが転がっているから、とっさに彼女を突き飛ばしたらしい。

侵入者に向き直ろうとして、ガクリとエレーンは膝をついた。背に激波が襲いかかり（ああ、斬られたのだ——）とぼんやり悟る。圧倒的な痛みに襲われ、ただ息をするにも難儀した。すぐにも意識が遠のきそうだ。だが、倒れるわけには、まだいかない。敵はまだ

——この目の前にいるのだから。

力の入らぬ足を踏ん張り、エレーンはなんとか立ちあがる。

「手出しすんじゃないわよっ！」

渾身の力で一喝し、軍服を見据えた。軍服たちは目配せし、怪訝そうに見返している。足を引きずるようにして踏み出した。

「この娘こはダドの身内なの。ここにいるのは、ダドの大事な子供なの！」

肩を押さえた右手がぬるつく。体から迸る血液が指の間を滴っていくのを、朦朧とした意識の端で、いやに生々しく認識する。

「手出しなんか、してんじゃないわよ。この娘こたちは、あたしの家

族よ。かけがえのない大切な家族、そうよ、あんた達と同じようにね！」

軍服たちが戸惑ったように目配せした。

「この娘が死んだら、親が泣くわ。友達が泣くわ。ダドリーが泣くわ。分かっているの？ あんた達が奪おうとしたのは人の命よ。あんた達と同じように、この世で一番、尊くかけがえのないもののよ」

「——人の命ってか。そりゃあ、随分と重みが違うものだな」

中央にいる、大柄な蓬髪が身じろいだ。血まみれの軍刀を片手で握り、喉を鳴らして苦笑いしている。

「なら、あんたにいいことを教えてやる」

臆することなく目を眇め、ぶらりと一歩踏み込んだ。

「いいか、ねえちゃん。人の命の価値なんてものは、どれも同じじゃないやねえんだよ。仮に俺らが死んだところで、泣く奴なんかいねえやな」

仲間の二人が白けた苦笑いで同意する。エレーンは向かいを睨み据えた。

「あんたが死んだら、あたしが泣くわ！ それじゃあ駄目なのっ！」

三人は啞然と絶句した。居心地悪そうに身じろいでいる。覚束ない足を踏みしめて、エレーンはもう一歩踏み出した。

「——帰りなさい」

三人の軍服は動きを止めて、もてあましたように眺めている。

「早く帰れって言ってんのよ！ 聞こえないのっ！」

ふと、蓬髪が顔をあげた。目をすがめ、じっと聞き耳を立てている。忌々しげに舌打ちし、片手を振って合図をした。

「引くぞ。誰か来る」

テラス窓の向こうの闇に、次々身を翻す。撤退していく有り様を、エレーンは霞みがかった視界で眺めていた。

深夜の訪問者

あの後、ケネルが飛び込んできて、何か言っていたのを覚えている。サビーネはしゃがみこんで泣いていて、取り乱して叫んでいた。小さなクリードを抱きかかえて。

消毒薬の匂いがした。灯りを絞った薄暗く見慣れた居室には、誰の姿も認められない。

「……なんで、あたしばっかり、こんな目に」

冷たいベッドにうつ伏せて、エレーンは嗚咽を押し殺していた。包帯で固く締められた背が、焼けつくように痛い。

糊の利いた真っ白なシャツ。柔らかく大きな羽枕。高い天井から吊り下げられた豪華できらびやかなガラス灯。いくえにも重なる薄いレースが天蓋のベッドを取り囲んでいる。採光に配慮し、窓が大きくとられた広い居室——言わずと知れた正式な居場所だ。けれど、せめて住み慣れた部屋であれば、少しは心も休まっただろうに。世界の全てを拒絶すべく、エレーンはかたく目を瞑る。

「……帰り、たい」

本音が口をついて出た。住み慣れた商都に帰りたかった。喧嘩しては笑い合った同僚たちがいる場所に。ラトキエ邸のあの寮に。この部屋には、誰もいない。心許せる友は誰ひとり。

何かを叩く音がした。

等間隔の物音だ。ノックの音だと気がついて、エレーンは慌てて目元をぬぐう。

今時分、誰だろう、と怪訝に扉を振り返る。だが、扉に誰何するより早く、ドアは不調法にも勝手に開かれた。いささか不快に目を向けて、息を飲んで目をみはる。

「——あんたは！」

薄闇から現れたのは、思いもよらぬ相手だった。薄暗い室内に目をすくめ、いぶかしげに眺めている。傭兵姿の若い男だ。荒っぽい

身形にそぐわず髪が長い。うつ伏せた寝台に手について、エレーンは憤然と顔をあげた。「女男あんなね！　今、一体何時だと思って

――！」
「ファレス」

男は呼び名を訂正し、ズボンのポケットに手をつこんだ。

「たく、ご挨拶だな。わざわざ出向いてやったつてのによ」

ぶつきらばうに値踏みしながら、足を投げ出すようにして歩いてくる。

エレーンは仏頂面で牽制した。そう、そこにいたのは誰あろう、女装で敵をたぶらかし、多くの敵兵を吹っ飛ばし、更には連れて行かれた天幕群に、あろうことが置き去りにするなどという不逞を働きやがった冷血漢。幾多数多の由々しき前科をぶら下げた厚顔不遜のあの輩ではないか。更にはその上、大量殺戮を抗議したら、怖い顔して凄まれた。もっともあれは、奴を引っ叩いたせいでもあるのだが。そして、目下サビーネと、密かに良い仲にもなっている。つまりは気に食わないの塊だ。そう、喻えるならば、まさしく、

天敵。

ちなみに、女みたいな頭のくせに、部隊の副長でもあるらしい。

ファレスは無遠慮に踏みこんだ。領家の煌びやかな居室にも、臆するでもなければ、ためらうでもない。さらりとなめらかな薄茶の長髪、髪と同色の冷ややかな瞳、すっきり整った目鼻立ち、あの冷酷な性根を知らねば、見目麗しい瘦身長軀にうっかり騙されていたところだ。ともあれ、あの無礼な振る舞いは、およそ見舞い客のそれではない。夜分に踏み込む無礼者に、エレーンは慌てて夜着の前を掻き合わせた。

「な、何しにきたのよ！」

威嚇牽制。とりあえず。

「見舞い。泣きべそかいてると思ってな」

エレーンはあわてて頬をぬぐう。唐突に背を屈め、ファレスが顔を覗きこんだ。「どうした。本当に泣いていたか」

「な、な、泣いてなんか——！」

ファレスは嘲るように苦笑した。「いいざまだな、奥方様。しかし、妾に代わって斬られるたア、馬鹿な真似をしたもんだ」

エレーンは口を尖らせた。だが、背中を盛大に負傷中であるため、生憎這いつくばった体勢以外とることができない。せめて顔だけでも振りあげて、無礼者を睨めつける。「冷やかに来たわけ？ あたしのこと」

「だから言つたら、こいつは見舞いだ」

「——はあ！？ どこが！」

見舞いの意味を知っているのか己は。

ファレスは広い室内を突っ切り、壁際の寝台にぶらぶら近づく。あくび混じりのまるで気負いない足取りだ。ここがうら若き乙女の寝所であり、深夜の部屋に二人きりという、ドキドキもののシチュエーションだというのに、頓着する様子は全くない。ちなみに、案内の執事がどこにもいないところを見ると、勝手に入ってきたらしい。部屋の主をつくづく眺めて、ファレスは白けた顔で嘆息した。

「脅かしやがって。大したことはねえじゃねえかよ」

「これだつて、さうとう痛いわよっ！」

カリカリ、エレーンは言い返す。

「それだけ喋れりや上等だ。重傷だったら、そんなもんじゃ済まねえからな。口も利けずに唸っているか、気絶したまま目え覚まさねえか、何れにせよ、そんなに平気でくっ喋れるはずがねえ」

いかにも「来てやって損した」と言わんばかりの言い草だ。エレーンは無然と睨みあげた。「あんたも知ってたの？ 今日のこと」
「いいや」

端的に承えて足を止め、ファレスは片脚に重心を預けて腕を組んだ。うつ伏せのエレーンをしげしげ見下ろす。

「珍しく元気がねえな。まあ、それも当然か。軍刀で斬りつけられるなんて経験は、さすがに初めてだろうしな」

「あ、当たり前でしょ！」

事もなげな言い草に驚いて返事を叩きつけ、エレーンは枕を掻き抱いた。無礼な見舞い客の無神経な言葉に、白刃きらめくおどろおどろしい恐怖が、今更ながら背に迫る。

寝台の縁が、不意に沈んだ。ファレスが腰をかけたらしい。枕に顔を伏せたまま、エレーンは唇を噛みしめる。「……こ、恐かった」
「だろうな。よくもそうして生きてたもんだ。あんた、運がいい」
あつさりファレスは相槌を打った。予期せず声は茶化してはいない。意外な思いで、エレーンはしがみついた枕から顔をあげた。

天井の薄闇を背景に、端整な顔の鋭い瞳が間近で様子をうかがっていた。片手を突いた上着の肩から、彼の薄茶の直毛がなめらかに滑り落ちている。静かだ。とても。あの恐ろしい出来事が、あたかも嘘であつたかのように。

突如、恐怖がぶり返し、エレーンはすがった羽枕を抱き締めた。

「——でも、信じられない」

「なにが」

ファレスの口調は素っ気ない。

「だってケネルが、あんなことをするなんて」

エレーンは強く唇を噛んだ。敵襲を受けて困窮し、灰色に荒んだ天幕群に孤立無援で出向いたあの時、ケネルは何の見返りもなく助けてやると請け負った。この過激で性急な仕打ちは、窓辺でたたずむ静かな姿と、どこか異質で相容れない。

「奴は何も知らねえよ。もっとも勘はいいからな。薄々察しはしたろうが」

思わぬ返事に面食らい、エレーンは怪訝に顔をあげた。その視線をそつなく捉えて、ファレスは真正面から覗きこむ。

「奴の名誉の為にも言っておく。あれは奴の差し金じゃない。連中があんたに同情し、勝手に行動を起こしたんだ」

「同情？ あたしに？」

エレーンは啞然と復唱した。あのケネルはともかくとして、部隊の他の面々とは、話したこともろくにない。声にならない疑問に応

えて、ファレスはさばさば口を開いた。「知っているか。ケネルがどうして、あんたの話を受けたのか」

「——ど、どうしてって」

エレーンは口ごもった。まるで見当もつかなかった。元より彼は知人ではなく、日頃の彼の態度にしても好意的とはいいがたい。むしろ怒ってばかりだ。あの無愛想な仏頂面は、いつそ「迷惑そうだ」と形容した方が早かろう。ファレスは軽く肩をすくめた。

「気づかなかつた。あの時、後ろを通りかかったのに。別宅の裏で泣いてた。庭の親子を見ながらよ」

「か、関係ないでしょ、そんなこと！」

ギクリと体を硬直させて、エレーンは慌てて言い返した。ファレスはじつと眺めている。反応を見るかのような直視とかち合い、エレーンはしども目をそらした。「だ、大体なんで知ってんのよ、あたしのことなんか、あんた達が——」

「なんで知ってるかつて？」

ファレスは呆れた顔で見返した。「まるで自覚がねえらしいな。」

——いいか。あんたは、今やクレストの正妻だ。あんたの顔なんざ、街中の者が知っている。評判だからな、今度の当主はメイドあがり、を正妻の座に据えたってよ」

「……そ、そう」

ばつの悪い思いで、エレーンはもそもそうつむいた。メイドあがり——事あるごとに揶揄される冷やかしだ。事実だが。普段であれば、そんな中傷、笑い飛ばすか食ってかかるかするところだが、意気消沈した手負いの今は、生憎そんな気力も失せている。

「あんた、あの時、めそめそ泣いてた。裏庭の鉄格子を握りしめて、親に見捨てられたガキみてえに。庭の様子を一人でいつまでも見つめてた。通りかかった俺たちにも、気づかねえほど熱心に」

とつさにエレーンは身構えた。心が未知の害意を警戒する。強張った向かいの顔を、ファレスは思わせぶりに一瞥した。

「何を見ているのかと思いきや、庭にいたのは当主と妾、こまつし

やくれたあのガキだ。それで大方ケネルの奴は、一人で乗り込んできたあんたを見て、柄でもねえ仏心を起こしたんだろうさ。だから、あの時、名乗りをあげた。勝手に助力を買って出た。ああ、言っておくが、奴が上を無視するんなら、滅多にあることじゃねえんだぞ」

「……同情？」

先の言葉を復唱し、エレーンは皮肉な笑みを頬に浮かべる。

「ああ」

ファレスはきっぱり肯定した。本来ならば言いにくい類いの応えだろうが、誤魔化しもしなければ、取り繕いもしない。彼の返事を噛みしめて、溜息混じりにエレーンは笑った。「——同情、してくれただ、あたしに」

「惨めか？」

間髪容れずにファレスは返す。淡々としたその声には、狼狽もなければ蔑みもない。エレーンはゆるゆる首を振った。

「同情が、こんなにありがたいものだなんて、あたし、今まで知らなかった。今のあたしには、差し伸べてもらえるなら、どんな手だって嬉しいもの」

「逃げねえんだな」

「——逃げる？」

エレーンは怪訝に見返した。もの珍しいものでも見るように、ファレスはまじまじ眺めている。

「あんたはこの当主じゃない。右も左も分からねえ、嫁いだばかりの新米だ。律儀に領民に付き合って玉碎なんぞしなくても、住み慣れた商都かどこかに避難しておきや良かったんだ。ひよっ子のあんたの働きになんぞ、誰も期待しちやいねえんだからよ。もっともデールが張りついているから、商都に行っても、ちよつとやそつとじゃ入れやしねえが」

「……そっか。その手があったんだ」

エレーンは面喰らって見返した。「そんなこと思いつきもしなか

「つた——なあんだ、それで良かったんだ。奥方様って言うから、あたし——」

誰にも手の出せない安全な所へ避難して、ひたすら隠れ、ひたすらじっと息を潜めて、この騒動が収まるまで——それこそ望んだことだった。安全な場所、安全な時間。己の手に余る厄介事が無事頭上を通過するまで。エレーンは頬をゆがめて苦笑いする。「逃げられるわけが、ないじゃないよ。あたし、領民を託されているのよ」

領邸の者が逃げたりしたら、残された領民はどうなるのだ。ファレスが呆れたように見返した。

「そいつはたくましいな、恐くねえのか。平気で前線に出てきた時にも、そりゃあ度肝を抜かれたが——本当に分かっているか？ 運が悪けりゃ、ここで死ぬかも知れねえぞ」

「——じよ、冗談じゃないわよ！ なんで、あたしが死ななくちゃなんないわけ？ 悪いことなんかしてないのに！」

エレーンはうろたえて言い返した。通常であれば現実味のない話だが、最早、対岸の火事ではなかった。生きながらにして焼かれた人間を見たのは、遠い過去の話ではない。あの兵たちの境遇に思わず思いを巡らせて、エレーンは身震いして首をすくめる。業火に焼かれた者たちは、さぞ熱かったことだろう。さぞ苦しかったことだろう。あれと同じ種類のことが、我が身に降りかかるのだとすれば――。

エレーンはいささか呆然と、今更ながら自覚した。自分はクレストに属する人間だ。敵に身柄を拘束されたら、何をされるか分からない。もしか、恐ろしい拷問を受けるのだろうか。公衆の面前に引き据えられて処刑されてしまうのだろうか。そうした血なまぐさい出来事は、歴史書の記述で目にする類いであるはずだった。現実とはあまりにもかけ離れていて、我が身に置き換えることなど到底できない。だが、歴史を塗り替えるような大きな異変が、今、現実に起きている。この内乱が終息した時、暗い獄から引き出されるのは、紛れもない、この自分だ。

エレーンは震えあがつて突つ伏した。

「あ、あたしはただ、お嫁に來ただけなのに。來いって言うから、くっ付いて——ダドにくっ付いて來ただけなのに——」

そう、冗談じゃない。やっと樂ができる予定だったのに。大勢の使用人にかしずかれ、方々の美味を好きだけ食し、高価な服を日替わりでまといつて——そんな輝かしい奥方様生活は、まだ始まつたばかりなのだ。なのに——

「——そうだな」

頭の上に重みを感じて、エレーンはふと目をあげた。

ファレスが右の腕を伸ばして、手の平を頭に置いていた。意外なことに、ぞんざいに頭をなでている。思わぬ労わりに胸を突かれてエレーンはとうとう堪えきれずに、枕にしがみ付いて泣きじゃくつた。デイルの使者がやつてきた、あの午後以来の出来事が、鮮烈に目まぐるしく脳裏を巡る。押し殺してきた数々の想いが、次々胸に去來した。自ら戦を起こした後悔。目の前で失われた多くの命。常にまとわりつく死への恐怖。夫の美しい妾への嫉妬。夕陽に照らされたケネルの横顔。軍服姿の三人の賊——。

「——ねえ」

頭に置いた手を止めて、ファレスが「なんだ」と目を向けた。とつさに腕にすがりつき、エレーンは端整な顔を凝視する。

「も、もしも、——もしもの話よ？」

切り出したものの踏ん切りがつかず、目を逸らして言い淀んだ。ファレスは急かすでもなく、いぶかるでもなく、黙つて先を待っている。その視線に背を押され、エレーンはためらいながらも口を開いた。「もしも、あの時頼んでいたら——ケネルは本当に斬つていたと思う？」

「だろうな、奴なら」

ファレスは躊躇なく肯定する。ついに堪えきれなくなつて、エレーンは顔を振りあげた。

「あの日、ケネルに言われたの。あの娘たちを——サビーネたちを

始末してやるつて。あたし——断らなかつた！」

ファレスは顔色ひとつ変えるでもない。

「死んじやえはいいつて思ったの！ あの娘は何もしてないのに。なのに、あたしは自分の勝手な都合だけで！」

新たな涙が頬を伝った。震える声を押し殺す。

「……最低だわ、あたし！」

エレーンはうなだれ、夜着の肩を震わせた。

白いレースのカーテンの裾が、夜風にふわふわなびいている。窓がかすかに開いている。闇に沈んだ装飾品が、夜のしじまに銀光を放つ。

「だが、あんたは頼まなかつた」

ファレスは静かに声をかけ、泣きじゃくる頭に手を置いた。

深夜の訪問者（後書き）

次章を用意しますので、しばらくお待ちくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6569v/>

CROSS ROAD【ディール急襲】 第一部

2011年11月17日12時16分発行